



Rin!
III

手を大きく振りながら去っていく少年を、笑みを浮かべながら見送る。しかし胸中に渦まくのは、酷く憂鬱な気持ちだった。

(後数年もしたら、彼も大人になってしまう……今ある儂き美しさが失われる……)

人の持つ美しさというものは、月日を経れば経るほど失われてしまうもの。それはよくわかっている。だが彼らの持つ美は、女性以上に失うのが早すぎる。大きく丸い瞳は次第に鋭さを帯び、柔らかな肌は硬くなる。それが『成長』というどうしようもないことだとしても、その事実を思うと落胆を禁じえなかった。

自分は美しいものが好きだ。キラキラと眩しいものは、見ているだけで心を満たし幸せな気持ちにしてくれる。名うての絵師が描いた絵画、名匠が生み出す陶磁器、身を飾るための宝飾品。そんなありとあらゆる美しい一品を、集めに集めた。

そしてその対象は品物だけに留まらない。人もまた同じ。使用人や侍従、家来として己の傍に置くのだ。できる限り見目麗しい者を置いて、目を楽しませたいと思うのは当然のこと。

そして己がこの世で一番美しいと思うのは、彼らのような少年たちだ。二次成長が始まる前の、限られた期間でしか在ることのない美。その儂い美貌に己は酔いしれた。

すぐに失われてしまうからこそ、己は彼らに惹かれたのかもしれない。だが、彼らの美がいずれ失われてしまうことは、とても悲しいことだった。どうして彼らは大人へと成長してしまうのだろう。そのままの姿でいてほしいと願ったことは、一度や二度のことではない。

ふうと嘆息して、その場を後にした。この後は特に用事もなく、馬車に乗って屋敷へと帰るだけである。今感じている鬱屈とした気分は、私室にある美しいものたちを見て癒してもらおう。

容姿と強さ、両方を兼ね揃えた護衛に馬車までエスコートさせると、そこには二人の人間が己を待ち構えていた。

一人は良く知る侍従である。夫が亡くなってから雇った男であるが、キリリとした容姿もさながら、よく気がつく性格で屋敷での己の身の世話をさせている。

そしてもう一人は見知らぬ男だった。みすぼらしいローブを纏い、フードを深く被っているせいで顔もあまりよくは見えない。しかしどう見ても己が好む見目麗しい人間ではないのは確かであろう。背筋は曲がり、どこか落ち着きなくきょろきょろとしている姿は、自分に自信がない者がよくする行動である。美しい者は堂々と胸を張っているのが大半だ。それだけで、彼に己が見向きする価値はないだろうと悟るに十分である。

「お待ちしておりました、奥様」

侍従の男が胸に手を当て、仰々しく頭を下げる。彼には美術品の発掘に行かせたはずだ。彼は気配りが得意だけでなく、己の好みをよく理解しており、彼が見つめて来る品物は、どれもお気に入りばかりだ。だが、今回ばかりは戦利品が美しいものではなく、みすぼらしい男であるというのはどういうことなのだろう。咎めようと口を開こうとするが、彼が再び口を開く方が早かった。

「今回奥様が気にいられるような美術品を見つけることは叶いませんでした。申し訳ございません。――ですが代わりに、奥様の望みを叶えられる者を見つけることに成功いたしました」

「まあ！」

己が心から望んでいること――それはたった一つだけ。どれだけ大金をはたいても手に入れることが叶わなかったものを、本当に叶えられるというのか。

「もしかして、そちらの彼が？」

「ええ。彼の力を使えば、奥様が望んでいるものを手に入れることが可能となります」

みすばらしいローブを来た男を再び見遣る。彼が己の望みを叶えてくれる。それならば、こんな所に長いは無用だ。

「貴方たちも馬車へと乗って。そして詳しい話を聞かせてちょうだい」

興奮を露に彼らを籠の中に乗るよう促し、そして己も乗り込んだ。

(ああ、ついに叶うときが来たのね！)

ボタンと籠が締まると、ガタゴトと音を立てて馬車が出発する。その間も、己の胸は興奮が止まず、どきどきと高鳴り続けていた。

零さないよう、注意を払いながら歩みを進める。手に持つお盆の上のカップに注がれているコーヒーのビターな匂いが、己の存在感を表し続ける。

目的の場所へ辿りついた後、片手で上手くお盆を持ちながらコンコンとノックをする。どうぞ、と中から入室を促す声が聞こえたため、失礼しますと言ってから、扉をゆっくりと開いた。

「リン、僕に何か用かい？」

備え付けられた椅子に座り、こちらに背を向けたままの部屋の主が、淡々と用件を述べてくる。彼が向かっているテーブルの上には羊皮紙がたくさん積み重なっており、その手にはペンが握られていた。

「はい、ヴェルザさんからコーヒーを預かってきました。どこに置いたらいいでしょう」

リンはこちらに向けられている群青色の髪に向かって訊ねると、くるりと彼の身体がこちらを振り向いた。ガラス越しに映る翡翠の両眼が、ニコリと細められる。

「わざわざありがとうございます。そうだね、ここへ置いてもらってもいいかな」

「わかりました」

彼の傍まで行って、彼の手が示す場所へとコーヒーを置いた。淹れたてであることを示すかのように、ほかほかと湯気が立っている。

「書類仕事お疲れ様です、モルリーさん」

コーヒーカップに手を伸ばし、美味しそうに瞳を細めるモルリーに、労いの言葉をかけた。

「あー、流石ヴェルザだ。とっても美味しい。元気であるなあ」

モルリーは一度カップをテーブルの上に置くと、両腕をぐっと伸ばして伸びをする。くわっと大きく口を開くと、そこから欠伸が零れた。

「……大変そうですね。僕も何かお手伝いしましょうか？」

「ん？ ああ……ありがとうございます、でも大丈夫だよ。僕は皆と違って弱い分、こういうことでしか力になれないからね。適材適所ってヤツさ」

からからと笑う青年に、そういうものですか、と言うと、そういうものさ、と肩を竦めながら返ってくる。

彼は義兄のレニィよりも二つほど年下の、ガルデア支部内では年嵩の一人である。穏やかな表情に理知的な光が宿った翡翠の瞳が印象的な、物腰の柔らかい青年。

五年ほど前にレニィがガルデア支部を任された際、共にレニィに着いて来た古参メンバーの一人だ。年嵩のメンバーは大体が、前に所属していた支部からレニィを慕ってついてきた人たちである。

リンはテーブルの横に立てかけられている、長い棍棒を見遣った。これはモルリーの愛用する獲物であり、そしてその武器に刻まれているのは『C』という文字。

正直いって、彼はお世辞にも強いとは言いがたい。比較的長身が多いガルデア支部内の男性陣の中で一番の小柄な上に、体格もそれほどいい方でもなかった。彼が扱うこの棍棒の使用法も、乱戦となった際に己に魔物が接近しづらくなるよう、振り回すためのもの。それ故、軽く扱い易い造りとなっている。殺

傷力は皆無とっていい。

「丁度よかった、この書類全部まとめ終わったから、レニィさんに持って行ってもらえるかな？ 少し重いかもしれないけど」

「あ、大丈夫です。持ちます」

示されたのはテーブルの端に積まれた、山のような書類。確かにこれは重そうではあるが、持ちきれないほどではないだろう。それに、レイィのいる部屋もそう遠く離れているわけでもない。

「これは今月分達成した依頼書を纏めたのと、発生した費用の一覧に、来月分の見越し分。ああ、それと今日も新たに入った依頼の大体のランク付けもしておいた、ってレニィさんに言っておいてくれるかな」

「はい」

モルリーは戦闘力こそ他の面々に劣るものの、彼の真価はこうしたデスクワークで発揮される。モルリーは頭の回転が早く、行動するよりも先に思考を巡らせるタイプの人間なのだ。

リンは彼のいる部屋の周りに視線を移した。そこにはどっしりと立つ本棚が所狭しと並び、その棚の全てにぎっしりと本が詰まっている。魔術書から王国の歴史書、果てや冒険譚までであるという。驚くべきは、彼はこれら全ての本の内容のほとんどを暗記しているということだ。知識量で彼を上回る者は、一体どれだけいることだろう。

リンはお盆を彼のテーブルに置かせてもらい、レニィへの書類を持ち上げる。一枚一枚は軽くとも、量が重なれば相当な重みとなる。腕に負荷がかかるが、それでも持てない重さではなかった。

「よろしく頼むよ、リン」

「はい。それでは失礼します」

書類を抱え、モルリーの部屋を出る。義兄は今、部屋にいるだろうか。まずは彼の自室を訪ねてみよう。

さして長くもない通路を歩き、レニィの部屋へと向かう。そして部屋の扉が見えてきた、そのときだった。

「リン！」

「！」

背後から呼ばれたリンの名前。ドキリと大きく心臓が跳ねる。思わず腕が緩み、書類が落ちそうになったところを、慌てて持ち直した。

名前を呼ばれたくらいで驚くほど、リンはか弱い神経をしていない。なのにリンが驚いたのは、名前を呼んだ相手がある人物だったからだ。

「よっ。すごいたくさんの書類だな。レニィさんにか？」

「は、はい……そうです、シグルドさん」

声をかけてくれた青年、シグルドが、いつもの気さくな笑みを浮かべていた。ドキドキバクバクと心臓がけたたましく鳴り響く。

彼はガルデア支部でSランクを誇る、凄腕の傭兵である。重量のある大剣を軽々と扱う、とても大柄な青年だ。小柄なリンが隣に並ぶと、まるで大人と子供のよう。

シグルドとは、リンがワイドリジョンに入団する前からの付き合いとなる。そのときから何かと気に掛けてくれている、恩人だ。

(お、収まれ心臓……！)

そしてリンが現在片思いしている相手でもある。そのせいでシグルドとこうして会う度に心臓がやかましく音を立て、平常心を失ってしまうのだ。出会ってから大分時間が経つというのに、一向に慣れる気配がない。今まで恋をしたことがなかったリンは、己の感情に振り回されてばかりだった。

「シ、シグルドさんは買出しですか？」

「ああ。今戻ってきたところなんだ」

シグルドもまた、リンのように荷物を抱えていた。茶色い大きな紙袋の中に、ごろごろといろいろな物が詰まっている。リンだったら確実に前が見えなくなるであろう物量にも関わらず、ガルデアで一番の長身の持ち主であるシグルドでは、流石に視界を塞ぐには至っていない。

「レニィさんだけど、多分部屋にはいないと思うよ。なんかさっき客が来たみたいだし」

「お客さんですか？」

シグルド曰く、支部に戻ってきたとき、丁度客が応接室へと案内される場所だったらしい。その客は仕事の常連の一人であり、今回もまた仕事の話があるのだろうと。

それなら確実にレニィは部屋にいないと断言できる。もう一人の責任者であるロードは現在別の依頼で三日程前から出払ったままであり、依頼を受理する権利を持つのは、レニィだけだ。

「教えて下さってありがとうございます。……この書類、机に置いておいたら義兄（にい）さまは手をつけてくれますかね……？」

「あー……どうだろうなあ」

シグルドが苦笑した。彼もまた、レニィが机仕事を好まない人間だと知っているのだ。と、いうより、ガルデア支部内で机仕事を好んでする人間はモルリーだけであろう。大雑把でないロードもまた、細かい雑務を好まない。シグルドもそうだろう。だからこそ、モルリーのような人間が重宝されているのだろうが。

「モルリーさんすげえよなあ。たくさん書類あっても、ほぼ一日で全部片付けちゃうんだから」

「そうですね……美味しい食事を作ってくれるヴェルザさんもですけど、皆モルリーさんには頭が上がりませんよね……」

「全くだ」

ガルデア支部が支部として成り立っているのは、モルリーのおかげであると言うまでもない。物理的な力で依頼を解決するのは、誰だってできることなのだ。

「一先ず部屋に書類だけ置いて、少し時間経ったら応接室に行ってみたらどうだ？ もし話が終わってなくても、相手は常連客でこれからもよく来るだろうから、リンも顔を合わせておくべきだとも思うし」

「そう……ですね」

仕事の邪魔をしてはならないが、相手が常連だというのであれば、リンもその客の依頼を受けることがあるかもしれない。『顔を合わせる』という名目で、時間をおいて訊ねたならば、客の心証を悪くすることもきっと避けられる。

「ありがとうございます。そうしてみます」

「ああ。あ、俺今から荷物置きに行くから。じゃあな」

「はい」

シグルドは奥にある倉庫へと向かっていく。

リンは一度書類を床へ置いてから、念のために扉をロックする。案の定返事はなく、そのまま扉を開けると、やはり中にレニィはいなかった。リンは軽く息を吐いた後、床に置いた書類を持ち上げ、部屋の中のテーブルへと置いた。

(頃合いを見計らって、応接室にいかないとな……)

モルリーの仕事を無にしないためにも、義兄には書類の確認をしてもらわなければならない。

それまでの時間をどう潰そうかと考えながら、リンはレニィの部屋を後にした。

こちらに向けられる黄金色の視線は神妙さを帯びており、話の深刻性を増しているように思った。いつもならどこか楽しげな光が宿っているのだが、それは影を潜めている。

「これ以上の被害を出さないためにも、今回もまた貴方がたの力を借りたいのですよ」

「それはいいんだけどな……俺達みたいな傭兵が力になれるのか？ シェード」

切り揃えられた鳶色の髪と、切れ長の黄金色の瞳を持つ客人の名をレニィは呼んだ。

シェードから協力を要請されたことは、これが初めてではない。だから力を貸す分には何の問題もないが、今回は相手が相手である。

「確かそちらには、潜入を得意とする方が二人ほどいらっしゃいましたよね？ どちらでも構いません、その方に忍びこんでもらいたいのです。動かぬ証拠さえ見つければ、こちらのものですよ」

「ああ、そういうことか……」

気配を絶ち、誰にも気付かれることなく侵入することを得意とする者ならば、確かに二人ほどいる。一人は現在遠出をしているが、もう一人は予定通りならば明日帰ってくるだろう。彼女（・・）の腕自体も申し分なく、まさしく適任と言える。

「多分明日になったら、彼女が帰ってくる。悪いけど、また明日この時間帯に来てもらってもいいか？」

「そうですね……詳しい事情説明も、本人がいらっしゃる方が都合がいいですし」

「じゃあ決まりだな」

今日のところはこれでいいだろう。更に詳しい話は、彼女が帰ってきてからすればいい。

軽く息を吐きながら椅子の背に凭れていると、コンコンと扉がノックされた。そういえばそろそろモルリーが、書類を提出してくる頃である。少しばかり憂鬱な気分になりながら入室を促すと、入ってきたのはモルリーではなかった。

「リン、どうしたんだ？」

黒椽の髪をしたショートボブの、一見少年にも見える少女は、レニィの忘れられない女性の大事な忘れ形見だ。彼女は愛した女性と同じ虹彩である紫色の瞳を、立ち上がりかけている客人に向け、軽く頭を下げてからレニィの方を向いた。

「モルリーさんから書類を受け取りました。本日届いた依頼をランク付けしたものと、発生した経費の一覧や来月の見越し分を纏めてくださったものです。義兄さまの部屋に置きましたので、後で必ず確認をお願いします」

「……りょーかい」

来た人物は違えど、告げられた言葉は予想と全く違わなかった。こうしてわざわざ告げに来たということは、暗にサボるなと警告をしているのだろう。レニィはモルリーと違い、書類をあっという間に捌く力量などない。全ての書類に目を通すだけでも、長時間必要とする。肩にずしりと重しが乗せられたような錯覚を覚えた。

「おや、初めて見ますね。新人の子ですか？」

「はい。リンと申します」

リンがシェードに向かって名を名乗ってから、一礼した。姉であるキキョウから礼儀を仕込まれたリンは、基本誰に対しても礼儀正しい。

「ご丁寧にありがとうございます。私はシェード。シェード・フィネルと申します。これでも一応パルジファル・ガルデア支部の支部長を務めさせていただいておりますので、以後お見知りおきを」

「え……？ パルジファル、ですか？」

「はい」

黄金色の瞳を細めてニコリと笑うシェードとは裏腹に、リンは困惑気に瞳を大きく見開いた。（まあ……普通は驚くよなあ。『神聖騎士』サマがワイドリジョンの支部にいるなんて知ったら）

ガルデアにはワイドリジョン以外にも、ギルドが支部を置いている。それがチェスタジア王国が運営する国営ギルド・パルジファルだ。

チェスタジアは、ラージェント大陸と呼ばれる巨大な大陸にある六つの国の中で、一・二を争う国土と国

力を持った大国である。土壌や自然にも恵まれ、海域に近い街では豊富な漁場を有し、耕作地が広がっている場所では、瑞々しい野菜や果物が実を結ぶ。

その分人の手が入り込んでいない街の外は多種多様な魔物が闊歩しているが、それらの魔物から手に入る部位もまた、生活に役立てる一因となっている。そんな豊かな国にワイドリジョンが支部を設けないわけがなく、チェスタジア国内にはレニィが知るだけでも、五つの街に拠点を置いていた。

ギルドが街に置かれれば、その街に住む人々は旅商人であるディーラー以外からも、遠く離れた土地でしか入手できない品物を手に入れるルートができることになる。もしくは、護衛をしてもらって自身が別の街に赴くことも可能。『金さえ払えばどんな仕事でも受ける』と銘打っていることもあり、あの街の名産品を食べてみたいだとか、あの街でしか売っていない商品がほしいという、傭兵にとっては容易すぎることも依頼として受け付けている。

つまりは、離れた街から物資を調達する手段が増えるということだ。ディーラーが取得するのが難しい、Aランク以上の魔物の一部などは、ギルドでないとまず得ることはできないだろう。

街と街の間に魔物が蔓延っているこの世界にとって、どの国もギルドの存在は必要不可欠である。ワイドリジョンが世界規模で広がったのは、それが主な要因だ。

しかしその利益がギルドに集中していることを、よく思わない者は当然いる。自分達もギルドを立ち上げて、一発当てようじゃないかと企てるのが現れるのも、全く不思議なことではない。

実際、ワイドリジョン以外にもギルドはあるだろう。だが、一から信頼を築きあげ、仕事を獲得していくのは一朝一夕で出来ることではなかった。

更に、ワイドリジョンは所属している傭兵の獲物にランクを刻ませることを徹底しており、戦いに関して全くの素人でも、その人間がどのくらいの強さの魔物までなら倒せるのか、一目でわかるのだ。ワイドリジョンに所属していなければランクを刻むことを承知させず、また、実際のランクより高ランクであると偽装した場合、重い制裁を下される。

だからこそ、ワイドリジョンが示すランクは信頼できる指標であった。そのため、ランクを得るべくワイドリジョンに入団する者も多い。個々の強さがはっきりとわかっているワイドリジョンと、全くの未知数である他ギルド。仕事を任せるならどちらがより確実かは、子供でもよくわかるだろう。

ワイドリジョンの規模は大きく、他の追隨を許さない。しかし、大きな組織の後ろ盾があれば、どうだろうか。

パルジファルは、チェスタジア政務機関がワイドリジョンに対抗すべく立ち上げた、王立ギルドである。国そのものという確固とした後ろ盾と、『神聖騎士』となって己の街を守ろうという謳い文句を掲げ、数年前から新たに門戸を開いた。

強力な後ろ盾というのは、ワイドリジョンにはない利点だ。所属した時点で、最低限の衣食住が約束されるのだ。ワイドリジョンは依頼の斡旋はするが、あくまで己の力量のみで身を立てるもの。ギルドに入ってもやっていけるのかという不安に悩まされることはない。

仕事内容も、ワイドリジョンと同じように依頼を受けることもあるが、拠点の置かれた街やその周辺の街の治安維持の役割も担っている。自警団のような活動も行ってた。

当然、『騎士』と呼ばれるに相応しい立ち振舞いを要求されるらしいが、『神聖騎士』という肩書き欲しさに入団する者は後を絶たない。中には遺産相続から外れた貴族の次男坊や三男坊なども、己の居場所を得るべく入団していると聞いている。

ワイドリジョンからしたら、それは面白くないことだ。街で発生する依頼が彼らの方へと流れることになり、その分の利益が減る。そのうえパルジファルの拠点が置かれるのは、大体がワイドリジョンの支部が置いてある街か、その近辺の街である。『治安維持』という大義名分を掲げてはいるが、その実、ワイド

リジョンを牽制するのが目的だろう。

だからこそ、パルジファルとワイドリジョンは仲が大層悪かった。ワイドリジョンは彼らの存在自体を邪魔なものと思い、パルジファルはそんなワイドリジョンを野蛮だと嫌う。これはチェスタジアで暮らしている者からしたら、誰でも知っているような常識だ。

なのに、眼前で意味深な笑みを浮かべる男は、ワイドリジョンを嫌っているはずのパルジファルの人間だという。しかも、ガルデア支部を纏める支部長だ。どうしてパルジファルが天敵であるワイドリジョンに依頼などするのか、混迷を極めても不思議ではない。

「……先ほど、仲間の一人から貴方は常連だと伺ったのですが」

「ええ。ガルデア支部の方々には、よくお世話になっております」

困惑しているリンを見て、シェードは口の端をつりあげた。明らかにリンの反応を楽しんでいる。相変わらず、人をからかうのが好きな奴だ。

「こいつはパルジファル——いや、チェスタジアの上流階級の中でも専らの変人として有名なんだよ。ああ、手段を選ばないっていう方が正しいか」

「失礼ですね、レニィ殿。私はただ、使えない物より使える物を使った方がいいと思っているだけです」

「それを手段を選ばないと言うのでは……？」

ハッハッハと胡散臭く笑うシェードに、リンは訝しげな視線を送る。本能的に、からかわれていると悟ったのだろう。

「うちの力で解決できることなら、勿論そうしますが、我らが支部は設置されてからまだ三年ほどしか経っておりませんので、精鋭が育ってはいないのです。だからこそ、時折こうしてレニィ殿に力添えを頼みに来るのですよ。彼は私がパルジファルの人間だからとつっぱねるような狭量な方でなくて、本当に助かっております」

「そう……ですか」

おどけた口調に、リンは完全に引き気味である。しかし、その次の瞬間には紫の双眸が理知的な光を取り戻した。

「つまり……ワイドリジョンの力を借りなければならない事態が発生してしまった、ということでしょうか」

「——ええ、その通りです」

シェードは再び、口元をつりあげる。どうやら今の返答が気に入ったらしい、えらく満足気だ。

そしてどこか底が見えない光が黄金色の視線に宿った。何故だろう、嫌な予感がする。

「レニィ殿、不躰を承知で提案したいことがあります」

「……何だ？」

「今度の依頼、是非とも彼女（・・）にも協力していただきたいのです」

リンの息を呑む声と共に、嫌な予感が的中してしまったとレニィは大きく肩を落とした

ガヤガヤと活気のあるトレイディアの街並みは、国境付近の街であるガルデアと比べても遜色がない。見渡す至るところに、新鮮な果物や野菜を売りに出している人々が、余所の店には負けじと声を張り上げている。

「この街はいつ来ても美味しそうな食べ物が一杯だなあ。リン、お腹はすいてない？」

「いえ、まだ大丈夫です、フレイさん」

リンは隣を歩いている人物の顔を見上げた。

スラリと伸びた手足に纏うは、濃紺色の男物の長衣。しかし僅かにある胸の膨らみやラインの丸さは、男性にはほど遠いことを示している。少し長めの灰色の前髪がさらりと揺れ、藍色の切れ長の瞳が穏やかな光を宿してリンを見下ろした。

彼女の名はフレイ。今回、共に依頼をこなすことになったガルデア支部の仲間である。

この顛末は二日ほど前に遡る。ガルデア支部を訪れたパルジファルの支部長であるシェード・フィネル。彼はあることを直々にリンに依頼した。

「貴女にしてほしいこと……それは囮調査です」

本人を目の前にして堂々と言いつ放たれた言葉に、リンは目を丸くした。口調は丁寧だが、その中身は飄々としていて、掴み所がない。それ以前に、リンは彼らの話を聞いていないのだから、いきなり囮調査をしてほしいと言われても、全く要領が得なかった。

「おい待てシェード。お前リンが女の子だってわかって言ってるだろ」

「ええ勿論。ですがそんなのは些細事です。実際の性別など、大した問題にはなりませんよ。大事なものは見た目なのですから」

「……話が全く見えないのですが」

囮となってほしいと言われて気分がいいわけでもないが、それで解決に導けるのならば、することに異論はない。それでも囮にされるならば、詳しい事情を聞きたいと思うのは当然ではなかろうか。

「ああ、説明をしていませんでしたね、これは失礼しました。では、今から一から説明いたしますので、どうぞそちらへお掛けください」

「おい、ここはワイドリジョンの支部だぞ」

「そう固いことおっしゃらずともいいではないですか」

彼はまるでここが自分の敷地のように、リンを椅子に座るよう促す。レニィの苦言は珍しく尤もだ。しかしシェードはどこ吹く風で、軽く笑ってみせるだけ。これではどちらが客人なのかわからない。

しかし椅子に座らなければ、彼はきっと話を進めないだろう。リンは一度軽く嘆息した後、大人しく示された椅子に腰をかける。レニィもまた、諦めた様子で凭れていた身体を起こし、椅子に座りなおした。

「リンさん、貴女は現在ガルデア周辺の街々で起きている失踪事件をご存知ですか？」

「失踪？ いいえ」

くどいようだが、街と街の間は魔物が跋扈しており、一般市民はまず街の外へと出ることはない。だからこそ、街で広まる噂話のようなものは、その街以外に移ることは滅多にないのだ。ガルデアで起きた事件でなければ、知る機会は極端に限られる。

「ではそこから話しましょう。――今から大体一ヶ月半ほど前からでしょうか。遊びに行った子供が帰ってこない、パルジファルに捜索願いが出されました」

シェードの顔つきが神妙なものへと変化した。先ほどこちらをからかって楽しんでいた光は、完全に消

え失せている。

「子供が街の外を行けるはずがないので、その街中をくまなく探しましたが見つからず……そしてあまり間を置かずに、別の街から再び少年の捜索願いが出されたのです」

「……！」

一つ一つの街は広く、子供が闇雲に遊びまわれば、道に迷ってしまうこともありえなくはない。そして、何かしらの犯罪に巻き込まれてしまうことも。

「一ヵ月半程前から始まった少年の失踪……五日前にも、また捜索願いが来ました。これで五人目です。――何らかの犯罪に巻き込まれたと断言していいでしょう」

短期間で連続していなくなるなど、同一人物による犯行とみて間違いない。このままでは、他にも被害が出る可能性がある。

「そして、攫われたとみられる少年たちには、ある共通点があるのですよ」

「ある共通点、ですか」

「ええ。――姿を消してしまった少年たちは、みな少女に見紛うほどの、十歳前後の美少年ばかりなのです」

「……」

それを聞き、リンは漸く彼の言っていることを理解した。

少女に見える美少年など、滅多にお目にかかれる存在ではない。髪を伸ばせばいいというわけではないのだから。顔の造作が少女のように整っている少年は、普通に顔立ちが整っている少年よりも明らかに少ないことはわかる。

ただ、囮として使うのならば、少年に見える少女でもいいのではないか。先ほどのレニィとのやり取りは正しくそれを物語っている。現に、ガラス越しにある黄金色の瞳は、是非有効利用させてほしいとばかりに輝いていた。

「……こう見えても、僕は女ですが」

「ええ、そうですね。ですが、そんなものは一時的に誤魔化せば何の問題もありません。相手が食いつくまで、バレさえしなければいいのですから」

せめてもの抵抗とばかりに己の性別を告げれば、満面の笑みでいけしゃあしゃあと返される。リンは何も言えなくなった。

実際、リンは頻繁に女顔の少年に間違えられる。それを特に気にしたことはないが、そのせいで囮に抜擢されるというのは、正直嬉しいことではない。

それでも、囮捜査の重要性はよくわかっている。いなくなってしまった少年たちがどのような仕打ちを受けているかはわからないが、決していい扱いはされてないだろう。助けられるならば、助けたい。

「……わかりました。出来る限り協力いたします」

「ありがとうございます。ご決断いただき、感謝いたします」

丁寧な口調と共に頭が下げられるが、彼は絶対断ることなどないだろうと見抜いているだろう。リンの口から嘆息が漏れた。

すっかりシェードに対して苦手意識が埋め込まれてしまったリンだが、その日は詳しい話は明日にするとあって、彼はギルドを後にした。もう一人手伝ってほしい人が、明日帰ってくるからと。

そしてその人物こそが、今リンの隣にいるスレンダーな男装の麗人である。彼女は明らかに女性とわかる容貌をしているが、熱い視線を向けてくるのは女性ばかりだ。そこかしこから、カッコいい、素敵……という声が聞こえてくる。

女性にしてはやや高めの背丈や、強い意志の宿る藍色の瞳は、リンもとてもカッコいいと思っている。瞳を穏やかに細めながら向けられる笑みに、ときどきと心臓が高鳴った。

(こういう人になりたいな……！)

高めの背丈、スラリと伸びる手足。己の強さを理解した上での自信からくる、力強い眼差し。フレイはリンにないものばかり持っている。憧憬の眼差しで見ずにはいられない。

(それに……背が高い美人だから、シグルドさんといるととても絵になるし……)

フレイはシグルドと同期の、二十歳の女性である。そのためシグルドとはとても気安い関係であるらしく、二人が顔を合わせるとしょっちゅう軽口が飛び出していた。

それは今回の件の詳細を、フレイと共にシェードから聞いた後のこと。レニィから大まかな事情を聞いたと血相を変えたシグルドが、二人の元へとやってきた。

「囮調査って大丈夫なのか!? どうしてそんな危険なこと、まだCランクのリンにやらせるんだよ、フレイがやればいいだろ！」

「わたしもできれば代わってあげたいとは思っただけだね、こればかりはリンではないと駄目なんだからしょうがない」

シグルドは、囮役となるリンのことを心配してくれたらしい。その気持ちだけで胸一杯になったリンは、暫く言い合う二人の会話の大半が耳に入っていなかった。

それでも、二人が最後に交わっていた言葉はしっかりと記憶に残っている。

「成る程、君はわたしの実力を疑っているわけだ。酷い男だね、四年ほどの付き合いのある同期の実力を疑うなんて」

「いや、別に俺はフレイの実力を疑ってるわけじゃ……」

「はは、だろうね。ただ単純に気持ちの問題なんだろう？」

「……わかってるなら、何でわざわざ言うんだよ」

クスクスと微笑しながらシグルドを見上げるフレイと、たじたじになり、一步身体が後退しているシグルド。降参の意を表しているのか、両手が胸の位置にまであがり、フレイから視線を思いきり逸らしている。

——仲がいいな。

漠然とそう思ったと同時に、胸がどこか息苦しさを覚えた。呼吸は正常にできているのだから、苦しいと感じるはずがないというのに。どうして胸が締め付けられるような痛みを覚えるのだろうか。

「——リン、絶対無茶はするなよ？ 自分の身の安全を第一に考え——って、大丈夫か？ 顔色がよくないぞ」

「へ？ わ！」

俯いていたせいか、シグルドが突然膝を落としてリンの顔を覗きこんでくる。心配をかけてしまったと思ったと同時に、近くなった視線に心臓が大きな悲鳴をあげた。ポツと頬が熱くなっていくのを感じる。

「体調がよくないなら、囮調査の件断ったって——」

「だ、大丈夫です！ す、少し考え事をしてただけですから！」

顔の前で両手をぶんぶんと振り、問題ないのだと主張する。

「そ、それに、僕が囮となることで事件が解決するのなら、そうするべきだと思いますし」

リンは囮をすることが嫌だと思っているわけではない。気分がいいことではないのは確かだが、それで助かる人間がいるのならば骨惜しみなどしてはいられない。気分が悪いからと断るだなんて論外だ。

「はいはい。心配なのはわかるけど、いい加減邪魔だよ。どいたどいた」

「いて！」

フレイがシグルドの背中に向かって蹴りを入れた。シグルドは琥珀色の瞳を僅かに細めながらフレイを見上げ、大きく息を吐いてから立ち上がる。

「リンはわたしが絶対守るよ。鈍感な君と違って些細な状態変化にも気付いてあげられるから、体調の管理

も問題ないね」

「鈍くて悪かったな」

軽く顔を顰めるシグルドと、涼しい顔をしているフレイ。精悍な顔立ちに見合ったたくましい肉体の持ち主であるシグルドと、女性にしては高めの身長を持つスラリとした美人であるフレイは、誰の目から見てもお似合いの二人なのではないだろうか。加えて二人は同期であり、気心も知れている。――ズシリと心に重荷が乗せられたような錯覚を覚えた。

「十分気をつけろよ、リン」

「あ、はい」

最後にまたなと少し心配そうな色が混ざった笑みを浮かべながら、シグルドが去っていく。彼はこれから別の依頼があるらしい。ぼうっとシグルドの背中が見えなくなるまで、リンは見続けていた。

「――わたしとシグルドは、リンが気にするような仲じゃないよ？」

「!？」

シグルドがいなくなった後、フレイが突如呟いた言葉にリンはビクリと身体を震わせた。顔をあげると、楽しげに口元をつりあげたフレイと目が合う。

「わたしはシグルドのことを友人や仲間以上には思っていないし、シグルドも同じだね。むしろ、あいつはわたしのことを女だとすら思っていないんじゃないかな」

「……それはそれでフレイさんに失礼な気が」

フレイは確かにリンと同じく男物の服を着てはいるが、リンのように男に見られるということはない。重ねている年齢が高いのもあるのだろうが、男らしくあるようでどこか柔らかな雰囲気、彼女を女性だと知らしめている。

「あはは、本当にそうだよ。でもまあシグルドだから仕方が無い。あいつは友人としてなら文句はないんだけど――恋人とするなら正直ごめんだね。いくらなんでも鈍すぎる。苛々すること間違いなしだよ」

「……」

大仰に肩を竦めるフレイに、リンは何も言えなくなった。確かにシグルドは考えるよりも先に行動しようという人で、思考すること自体が苦手だと本人も認めている。しかし流石に言いすぎではないだろうか。鈍い、ということは曲げることのできない事実だが、シグルドとて気遣いができないわけではない。

「その……シグルドさんは優しい人ですし、いろいろ気にかけてもらったりしてますし……鈍いだけの人では……」

「それはきっとリンだから、じゃないかな。お前が囧をやれって真正面から言い放たれたわたしより、心配されてたリンの方がよっぽど脈があるよ」

「!？」

再びリンの身体がビクリと跳ねる。そして同時にボンと顔が真っ赤に染まった。

「そ、そそそそそれはフレイさんの、じ、実力をか、買っているからでは……！」

「まあそれもあるんだろうけど。あれは絶対、わたしも女だということが頭から抜けていたね。――ああ、これは鈍いというより、デリカシーがないと言った方が正しいかな」

フレイは本当にシグルドに対して容赦がない。しかしそのことについて反論もできなかった。彼女に対して失礼な発言であったことは確かである。

「まあ、あの鈍感男を振り向かせるのは大変だろうけども、直球で行けば多分なんとかなるよ。だからがんばれ、リン」

ボン、とフレイの手がリンの肩へと置かれた。一拍おいて、その言葉の意味を理解したとき、リンはぶわっと全身から熱を発しているかのような錯覚に陥る。

「む、無理です無理です無理です無理です！」

つまるところフレイは、シグルドに告白すればいいと言っているのだろう。そんなことができるわけがない。シグルドを前にするだけで心臓はバクバクと大きな音を立て、普通に接することすら困難だということに。

「うーん、流石に時期尚早か」

フレイが顎に手を添えながら、半泣き状態であるリンの頭をポンポンと撫でた。

「変なこと言ってごめんね。リンにはリンのペースがあるのだもの、焦らずゆっくりと、だね。まずはシグルドの前でも緊張しないようになることからかな」

「そ、そうですね……」

できるならば、シグルドと和気藹々と会話することができるようになりたい。彼に会う度にリンは飛び上がったり驚いたりしているため、きっと毎度心配をかけてしまっている。

そこまで考えてからふと、どうしてフレイはリンがシグルドに片思いしていることを知っているのかと気付いた。以前、一つ上の先輩であるダニエラにも見破られていたが、彼女もまた、リンの行動を見てわかってしまったのだろうか。

おそろおそろ聞いてみると、フレイはキョトンとした顔でとんでもないことを告げる。

「え、あれで隠しているつもりだったの？ シグルドの前でだけあんなに真っ赤になって慌てふためいて気付かない人間なんて、肝心のシグルドくらいだよ。わたしに限らずガルデア支部のみんな――シグルド以外の全員がとっくに知ってると思うよ」

ズガンと頭に重いものが直撃したような衝撃を受ける。別にシグルドの思いを秘密にしていたわけではない。だが、特に聞かれることもなかったし、リン自身も吹聴していたわけではないので、ガルデア支部で知っているのはロードとダニエラとデリハルトの三人くらいだと思っていた。それなのに、シグルド以外の全員が既に知っているだなんて。

「か、隠していたわけでは、ないんですが……そ、そんなにわかり易いですか、僕」

「ものすごく。だって普段とても落ち着いているのに、シグルドの前だと雰囲気一変するじゃない。究極の鈍感以外は気付くって」

己の行動を振り返る。シグルドの前だと落ち着かなくなったり、あたふたと慌てたり、赤くなったり。――これは確かに、わかり易いかもしれない。今まで意識していなかっただけで、少し客観的になれば、すぐにわかることだった。

「ああ、だからって、表に出さないようにしようとか考えなくていいよ。どうせシグルドは気付かないし、わたしはわたしで微笑ましい気持ちになれるしね」

「……それ、楽しんでいと言いませんか？」

「そうとも言うかな」

クスクスと楽しそうに笑うフレイに、リンはシグルドの前でも緊張しなくなるように頑張ろうと心に決めた。

「それにしても、こんなに賑やかな街なのに、ここには支部を置かないんですね」

リンはトレイディアの街を見渡しながらかつと思ったことを口にする。人が多く住んでいれば、その分依頼も集まるだろう。ギルドの支部がない街は、調教された鳥型の魔物によって書物を運んでもらうか、ディーラーに頼むという形で近くのギルドに依頼を出している。その手間を考えたら、この街にも支部を置いた方が便利ではないだろうか。

「うーん、それは難しいねえ。支部を置くには、まずSかSSランクの人間を派遣しないとイケないじゃない？ Sはまだしも、SSランクなんて限られた人数しかないしね。それにほら、シグルドやわたしみた

いに異動するのが嫌だからランクの昇格試験を受けないって人も結構いるだろうから余計にさ。……まあそれを含めても、シングルみたいにSSランク相当の実力の持ち主なんてそうそういないけど」

フレイが己の獲物に刻んでいるランクはAである。つまり彼女もまた、相当な実力者だ。だが、義兄やロードが言うには、フレイの本来のランクはSが相当であるらしい。

Aランクで既に達人やベテランの域であると言われているのに、更にその上を行けるのは限られた天賦の才の持ち主だけ。フレイは一見か細い女性であるが、男装に包まれた四肢は鍛え抜かれており、そこらの男性よりも力は強いだろう。

そんな彼女が何故Aランクに甘んじているのかと言えば、ワイドリジョンの支部が設けているある規定のためだ。

不測の事態が起きても解決できるよう、各支部には必ずSかSSランクの者が責任者として在籍している。しかし、S以上のランクを持つ者は、各支部で三人までと同時に人数制限もなされていた。SSランクを持つ者がいないときのみ特例として、Sランク四名の在籍が許可されるらしいが、SSランクの在籍者もまた、二名までと制限されている。

これは、各支部の戦力を偏らせないというのが大きな理由だ。SSランクに指定された魔物の大半は、突然変異で凶暴化したもの。同族や討伐しに来た人間を喰らい、強さを増してしまった魔物などだ。並の傭兵では全く歯が立たないどころか、逆に魔物の糧にされかねない。

そんな事態に対処するために、SやSSランクは支部に必ず配置されるのだが、そのような事態が起きることは滅多になく、大抵の依頼はBランクもあればこなせるものが大半である。無駄に多く配置したところで、メリットはほとんどないと言っていい。

だからこそ、貴重な戦力であるSやSSランクを一箇所に集中させるわけにはいかず、分散させるのだ。Sランク以上の者がいなかったせいで、支部の傭兵達が全滅してしまうという危機は絶対に避けねばならない。

大抵の支部は、SSランクが一人にSランクが二人という体制らしく、ガルデアのようにSSランクが二人にSが一人という状態は珍しいらしい。ガルデアはまだ作られてから五年ほどしか経ってはいない、比較的新しい支部であることと、責任者であるレニィやロードが（ロードについては具体的な年齢は不詳であるが）まだ二十代半ばの若輩だからだということもあるだろう。SSランク保持者の大半は、最低でも三十代を越えた百戦錬磨の猛者ばかりだと聞いている。

フレイがもしもSランクに上がった場合、Sランク以上の在籍者が四名となる。つまり、四人のうち誰か一人が他の支部へと異動となるのだ。そしてそれはシングルも同じ。彼の強さは既にSSの域にあり、もしもシングルがSSランクとなるならば、レニィ・ロード・シングルのうち三人が、異動することになってしまう。

「まあ、ガルデアともそう離れてはいないしね。のんびりと歩いても数時間で着く距離にあるんだし、作る必要はないって判断したんじゃないかな」

「……それもそうですね」

街の外の移動手段は、大抵が徒歩である。草食で大人しく、人や荷を運ぶのを手伝ってくれる四足で大型のドーサイルホースという魔物がいるが、ドーサイルホースは近年人の手で繁殖させて利用することが世界的な条約で可決されたばかりであり、数は未だ多くはない。そのため貴重なドーサイルホースは、ディーラーなどの荷運びが主な仕事である者達に優先して売られていた。一般人どころか、ほぼ身一つで移動できるような傭兵の足になるまでには時間がかかるだろう。当然、リン達もここまで移動は徒歩だ。

「さあて、待ち合わせの場所はこの辺の宿屋だったと思うけど……」

「あ、あそこじゃないでしょうか」

リンが示した先に、宿屋の看板が見える。書かれている名前と待ち合わせ場所として指名された宿の名が一致していた。

「ああ、あそこだね。よし行こうか」

「はい」

二人連れ立って宿屋の扉を開いた。カランカランと来訪を告げる鐘が鳴り、カウンターに立っていた従業員らしき青年がこちらを向いた。

「いらっしゃいませ。ご宿泊でございますか？」

「ええそうです。弟（・）と二人一緒に泊まれる部屋をお願いします」

「……！ はい、かしこまりました」

フレイがにこやかに告げると、青年の顔が僅かに強張った。しかしすぐさま笑顔に戻り、ご案内いたしますと中へと通される。リンはフレイの後ろに続いた。

「どうぞ、こちらです」

「ありがとうございます」

部屋へと着くまで、会話は一切生まれなかった。そして、案内を終わらせた従業員は、一度こちらに深々と頭を下げた後、緊張した面持ちで立ち去っていく。

コンコン。

自分達の部屋として案内された扉を、フレイは軽くノックした。すると扉が内側（・・）から開かれる。

「どうもこんにちわ」

「！ も、もしかしてワイドリジョンの……!？」

「ええそうです。たった今到着しました」

中から出てきたのは、リンと同年くらいの少年だった。背丈はフレイよりも僅かに高いといったところだろうか。彼は意を決したようにぐっと口を引き結ぶ。

「来てくれてありがとうございます……！ どうぞ中へ！」

緊張した面持ちの少年に招かれ、二人は部屋の中へと入っていった。

案内された部屋で待っていたのは、二人の少年だった。どちらも背丈はフレイよりも少し高いくらいの、まだ若い少年たち。リンと同年か、もしくは少し下かもしれない。

「あ、まずは自己紹介しますね。俺、今年パルジファルに入団したばかりの新米騎士、ネニックです！ で、こいつが」

「……トルーズ」

短くサッパリと整えられた明るい胡桃色の髪に、瑠璃色の瞳をキラキラと輝かせるのはネニックと名乗った少年。そしてうってかわって少年にしては少し長めの鈍色の髪とつりあがった深緑の瞳を持つ、どこか冷めた印象のあるトルーズと名乗った少年。見た目も対症的だと思ったが、中身も同じように対症的のようだ。

そしてパルジファルの入団の規定年齢は十五である。つまり、彼らはリンよりも一つ年下の十五歳だ。若いわけだ。

「わたしはフレイ。ランクはAだよ。で、こっちが」

「僕はリンです。ランクはC。貴方がたと同じく新米ですが、どうぞよろしくお願いします」

フレイが名乗ると、リンも続いて礼儀正しく名乗った。彼らはリンよりも年下だというのに、丁寧な口調は変わらない。

「それでは、今回の任務の段取りを教えてくださいませんか！」

輝く瑠璃色の瞳から、任せられた依頼への情熱を感じた。

彼らは自分で名乗った通り、パルジファルに在籍している神聖騎士である。しかし着ている服はパルジファルの隊服ではなく、普段着と思われる気楽なもの。彼らは己が神聖騎士の一員であることを隠しながら、この場所へと来たのだろう。フレイたちと同じように。

フレイが現在腰のベルトに括り付けている剣に、ランクは刻まれていない。それはリンも同じだ。何故、無印の武器を持っているのかと言えば、ワイドリジョンの傭兵であることを隠すためである。

今回囮調査を行うに当たって、フレイたちがワイドリジョンの傭兵だと知られるのはあまりいいことではない。それ故、ワイドリジョンの傭兵であることを示すランクの刻まれた武器ではなく、適当な得物を新たに見繕うことになった。

実際のランクよりも高いランクが刻まれた武器を所持することは厳禁であるが、下のランクや、無印の武器を持つことは禁止されてはいない。ランクの刻まれた武器を持たなければ、その人物がワイドリジョンの傭兵か否かを見極めるのは不可能だ。それだけ、ランクが世界中に浸透しているとも言える。

そしてパルジファルの彼らが所在を隠す理由もまた、依頼内容に順じていた。

「まあ実のところを言えば、こうして改まって話し合うことなんて特になんだけどね」

「えええー！　じゅ、重大な任務って聞いたので、もっと綿密な作戦を決めるのだとばかり……」

「重要は重要に違いないよ。君たちはわたしが探り当てた『証拠』を、ガルデアの支部にまで持ち帰らなければいけないんだから」

フレイが選ばれたのは、ある屋敷に潜入し、事件の裏がとれるような証拠を見つけ出すためだ。SSランクのレニィや同等の実力があるシングルドを選ばなかった理由はそこにある。

この美少年連続失踪事件に関与していると思われる人物を、シェードという男は既に目星をつけていた。それならば堂々と屋敷の中を調べれば良いと思われるが、その相手というのが厄介な人物なのである。

街々を移動し、人々に物資を提供する旅商人であるディーラー。彼らもまたギルドのように、所属先と

いう後ろ盾が存在した。

『商業連盟（コンマースユニオン）』。ワイドリジョンと同じく、利益を得るために設立された商業団体である。各町へと提供するための物資の収集、ドーサイルホースや護衛の確保。そして一人一人を派遣するルート設定などを行い、ディーラー達を補佐している。

商業連盟（コンマースユニオン）はワイドリジョンと同じく、人々に無くてはならない存在である。彼らが存在することにより物流は活発になり、彼ら無くして経済の発展はありえない。

そして今回の件で目星がついているというのが、チェスタジア王都ティボニアにある商業連盟（コンマースユニオン）支部の元重鎮の奥方、サドマーゼ・ウィッキテルスト婦人だった。

彼女の夫は、長年ティボニアの商業連盟（コンマースユニオン）で幹部として勤め上げていた商売人である。しかしここ二年ほど前に突如病に倒れ、快方に向かうことなくこの世を去ってしまった。

彼の後は別の人間が引き継いだらしく、商業連盟（コンマースユニオン）は今でも正常に機能している。そして残されてしまった奥方は、彼が築き上げた財を消費しながらの生活を送っていた。

彼は生来、仕事人間であり、趣味も仕事と言ってしまふような人物であつたらしい。そのため金は貯まる一方であり、減るといふことがほとんどなかった。婦人が毎日遊んでいても暮らしていける程の、莫大な財産が残されたという。

ウィッキテルスト婦人は夫の死後、彼が建てたトレスディアの屋敷で悠々自適な生活をおくっていると聞いた。使用人も多く雇い、貴族が主催するパーティや商業連盟（コンマースユニオン）の親睦会などにも顔を出し、広いコネを持つという。金を湯水のごとく使っているらしいが、未だ夫が残した財が潰える兆しはないのだとか。

今回フレイたちが所属先を隠している理由はここにある。商業連盟（コンマースユニオン）は魔物の部位を買い取ってくれたり、護衛として雇われたりと、ワイドリジョンのお得意様で、切っても切れない関係だ。もしもワイドリジョンの傭兵が彼女を疑い、探りをいれていることがバレてしまえば、協力関係に罅を入れてしまうだろう。

そしてパルジファルもまた、上流階級に顔が効く婦人になかなか手出しができないでいる。パルジファルを運営しているのはあくまで政務機関なのだ。活動費は税金から下りるが、貴族や彼女のような金持ちから寄付金を募っていたりもする。事実、ガルデアのパルジファルが設立されたとき、ウィッキテルスト夫君から多額の寄付があつたようだ。そのため、確実な証拠もなしに彼の妻である婦人を疑い、家を家宅搜索することは、恩を仇で返したと糾弾される原因となりかねない。そうなったら彼女と親しい貴族や金持ちもまた、寄付をするのを止めてしまう可能性もある。

政府はウィッキテルスト婦人を疑い、家を搜索することを厭うだろう。つまりこの件は、シェードの完全なる独断だった。その上、表向きは敵対関係にあるワイドリジョンにも協力を要請しているため、もしもバレたら糾弾どころではない。シェードは政府により、国を混乱に陥れたとして牢獄へと囚われることになるだろう。

依頼をこなしたフレイを待ち構えていたパルジファルの支部長、シェード・フィネル。ウィッキテルスト婦人の屋敷を調べてほしいという依頼に対して、当然ながら始めから乗り気になれるわけがなかった。いくらなんでも、相手が悪すぎると。

「どういった理由で、ウィッキテルスト婦人が怪しいと睨んだんです？」

確固とした理由もなしに、この男が行動に移すわけがない。シェードはその言葉を待っていたと言わんばかりにニヤリと口の端をつり上げた。

「いなくなった五人の少年達ですが……失踪したその日、街にウィッキテルスト婦人が訪れているのですよ。五回とも、ね……。おまけにその内の二名のご両親から、婦人自らお声をかけていただいたとの証言

もあります。――偶然にしては、出来すぎているとは思いませんか？」

彼女を疑うには十分な根拠だと、シェードは告げる。それに彼女には常に腕利きの護衛が傍にいるため、彼らを使えば子供を攫うことは容易であるとも。眼鏡が光を反射し、キラリと光った。

「そんな証言もあるのに、どうして堂々と彼女の屋敷を捜査できないのですか？」

共に詳しい話を聞いていたリンが、訝しげな視線をシェードへと向ける。そこまでわかっているのならば、自分たちの手を借りる必要などないのではと思ったのだろう。リンはまだワイドリジョンに入団してから日が浅いため、この件が商業連盟（コンマースユニオン）との関係悪化に繋がってしまうかもしれないという考えに、至っていないのかもしれない。

「証言はあくまで、声をかけられたというだけですからね。ただの状況証拠にしかかなり得ません。口惜しいことではありますが。そしてウィッキテルスト婦人は、そんな状況証拠のみで疑ってかけられる存在ではないのですよ。ヘタをすれば、パルジファルやチェスタジア政府が、商業連盟（コンマースユニオン）を敵に回すことにもなりかねません」

その言葉を聞いてリンは無言となった。同じことがワイドリジョンにも言えると理解したのと、そのせいでおっぴらに調査ができないことを歯がゆく思ったのだろう。表情に影が差し、口元を引き結んでいる。

しかし婦人の屋敷から確固たる物証が出たのならば、話は別だ。彼女が犯罪に手を染めていると証明できるならば、政府もそれを跳ね除けるようなことはしないだろう。もしもそんなことをすれば民衆から不満が募り、パルジファルに人が集まらなくなる。それでは本末転倒だ。

ウィッキテルスト婦人を捕まえ、少年たちを救う。ワイドリジョンが屋敷に侵入する手立てを講じて物証を見つけ、政界に口を出せるパルジファルのシェードが告発する。両組織の力がなければ解決できない案件だろう。だからシェードは、躊躇うことなくワイドリジョンに協力を要請した。

「持ち帰るだけ……お、俺の華々しい重要任務デビューが……」

「だから言っただろ。新人の俺たちに任せられる内容なんだから、大したことじゃないって」

がくりと肩を落とし、ずーんと落ち込むネニックに、トルーズが冷やかな言葉を投げた。その様子からして、あの食えない男から重要任務だと焚きつけられたのだろう。あながち間違いではないが、物は言い様である。

パルジファルは貴族の子弟が多く所属していることもあってか、ランクを強制する実力主義のワイドリジョンを野蛮だと快く思っていない。ワイドリジョンもまた、そんな彼らを好ましく思わない。

ガルデアに存在する二つのギルド。シェードのような型破りな支部長と、レニイのような細かいことを気に留めない、大雑把な責任者であったからこそ成立した、協力関係である。

レニイが言うには、金さえ払えばどんな依頼でも受けると掲げている理念に従ったまでのこと。それにこちらの支部はそれほど人数が多くないこともあり、レニイと同じくパルジファルのことを敵対視している者はいない。だが、パルジファル側までは流石にそうはいかないだろう。現にガルデア支部周辺でパルジファルの制服を着た人間を見たことは一度もなかった。

そしてシェードがこちらへ依頼をしにくる時は、必ず私服で訪れていた。それはパルジファルを纏めるべき立場である人間が、対立しているワイドリジョンに依頼を出すことを快く思わない者の方が圧倒的に多いということを示している。それに、政務機関にも苦言を言われることだろう。

今回、彼らのような新米が派遣されたのは、恐らくワイドリジョンに対して偏見を持っていない、あるいは敵対心がない者を選んだからであろう。事実、彼ら二人からフレイたちに対する侮蔑や不審の視線を、感じることはなかった。

「――わたしが見つけ出した証拠を持ち帰ることができれば、ウィッキテルスト婦人を合法的に捕まえることができるようになる。とても重要なことだよ。君たちの動きにかかっているからね」

「！ は、はい、がんばります！」

「……」

明らかに気落ちしているであろうネニックにやる気を出してもらうべく言葉を紡ぐと、彼はすぐに気分を浮上させたようだった。落ち込み易いが、同時に立ち直りも早いようだ。これが彼が選ばれた大きな理由かもしれない。頬が蒸気し、どこか恍惚の眼差しでこちらを見ていることは、気にしないでおこう。

そして隣にいるトルーズは嘆息しながらも、表情はどこか安堵している。相棒がやる気を取り戻したことに安心したのだろうか。

「……でも問題は、どうやって婦人と接触するか、ですよ」

名乗ってからずっと黙っていたリンが口を開いた。今回の話は急に決まったことであり、本来ならばリンが出る必要はない。フレイが屋敷に侵入し、探ればいいだけだ。

何故囷を使う必要があるのかと言えば、ウィッキテルスト婦人が構える屋敷は広く、そして本当に少年たちを攫っていたのなら、隠された部屋に幽閉していることだろう。そのような部屋を見つけるのは骨が折れ、時間がかかる。見つかるようなヘマはしないつもりではいるが、ただ隠れていればいいだけならまだしも、動き回らねばならないことを考えると精神的に消耗するものだ。時間がかかればかかるほど、負担は大きくなる。

だがリンが囷となれば、ウィッキテルスト婦人自ら、少年たちを隠しているだろう隠し部屋へとリンを連れていってくれる。時間や手間が大幅に短縮されるだけでなく、確実性が増すのだ。有用性が高いからこそ、シェードはリンを囷にすることを提案した。

「うーん、婦人が暴漢に襲われそうになってる所を助ける！ とか」

「……金持ちの婦人なんだ、外に出るときは必ず護衛を連れていけ。護衛が助ける上に、そんなところと出くわす確立なんてどんだけ低いんだよ」

「うぐぐ……」

ネニックが提案したことを、トルーズがにべもなく却下した。彼の言う通り、婦人が襲われているところに遭遇するなど、運に任せるようなものである。おまけにわざわざフレイたちが助けずとも、護衛がなんとかするだろう。

「婦人にリンを見初めてもらわないと困るんだよね。強いインパクトを与えられる方法、ないものかな」

リンは通常通りならば、ウィッキテルスト婦人好みであろう少女に見える美少年だ。だからといって、過信は禁物である。婦人から不審がられては困るのだ。いかに自然に、彼女に強くリンを印象づけられるか。簡単そうで難しい。

「別にわざわざインパクト残そうとか、しなくていいんじゃないか？」

頭を悩ませていると、トルーズが何故そんなに悩むのか理解できない、といった面持ちで、フレイたちを見据えている。

「あんたら傭兵なんだろ？ だったらー」

彼が告げた言葉に、フレイはきょとんと目を丸くした。

サンサンと降り注ぐ日差しは、夏の到来を予感させる。じわりと浮かんで来る汗を、ハンカチでパタパタと軽く指先を動かしながら拭った。

こんな日は、家の中を移動するのすら億劫だ。後で侍女に冷たい飲み物を持ってきてもらおう。扇いでもらうのもいいかもしれない。

特に用事もないのだ。たまにはこうして飾ってある美術品を眺めながら、リラックスして過ごすのも悪くは無い。柔らかい背凭れ椅子に背を預けながら、今日の夕食まで昼寝を決め込んでしまおうかと考える。

瞼を閉じて夢の中へと旅立とうとした直後、コンコンと扉をノックされる。タイミングの悪さに苛立ち

が募りながらも目を開けた。

「どうぞ」

このまま寝た振りを続けても、用があるならばまた暫くしたらやってくるだろう。ならば、今のうちに終わらせてしまえばいい。そして、夕食まで起こすなと命じておけば誰も安眠を妨害しようなどと思わなくなる。

「奥様、失礼いたします」

扉を開き、深々と頭を下げる侍従の男に一瞥をくれると、用件を言うように促す。慌てた様子がないことから、火急の用件が入ったわけではなさそうだ。ならば、とっとと済ませてしまいたい。

「ウィゼラ、一体何の用？」

彼の名前を呼ぶと、ウィゼラは下げていた頭をゆっくりと上げた。短く整えられた漆黒の髪の下から、切れ長の黒檀色の瞳が姿を表す。

「はい。実は先ほど、奥様に是非護衛として雇ってほしいという姉弟が訪ねてきまして……正確に言えば、護衛を希望するのは姉の方で、弟も一緒に面倒みてほしいのだとか」

「姉弟？」

己の噂を聞き、雇って欲しいとやってくる人間は多い。しかしいくら夫が残してくれた財産が未だ多く残っているとしても、何の役にも立たない人間のために貴重な金を使うことはしたくはなかった。護衛として雇ってほしいというのなら尚のこと。

「護衛なら、今のままで十分よ。彼らはよくやってくれているもの。用件がそれだけなら、もう下がりなさいな」

腕が効き、そして見目もいい護衛ならば、既に揃えている。これ以上必要だとも思わない。彼もまたそれが理解できないわけではないだろうに、何故わざわざ自分の所へと伺いを立てに来たのだろうか。

「――わたくしも、普通の間人だったならば門前払いをするところなのですが」

意味深に口の端をつり上げるウィゼラに、思わず目を瞬かせた。彼がこのような言い方をするときには、己にとって利益があるときだと知っている。今回は一体何が有益だというのだろうか。

「奥様に一目お見せするべきだと思い、こうして伺いました。――恐らくとても気に入られると思いますよ。とても見目麗しい姉弟でした」

「……！」

カッと両眼を大きく見開く。

自分は己の美意識に煩い方であると自覚している。それを熟知し、見極める目を持つウィゼラが気に入ると判断したならば、これは一度会ってみる価値はあるかもしれない。

「今すぐここへ通しなさい！」

気付けば睡魔は彼方へと吹き飛んでいた。椅子から立ち上がり、興奮した面持ちでウィゼラに命令を下す。御意という言葉と同時に一度深く頭を下げ、彼は部屋を後にした。

「わたしの気に入る子……一体どんな子なのかしら」

やってくるだろう相手に心を馳せる。思わずそわそわと落ち着かなくなり、椅子に座りなおすこともせず、うろうろと歩き回った。こうして待っている時間が、とてつもなく長く感じる。連れてこさせるのではなく、こちらから出向けばよかったらどうかと思いはじめた頃、再びコンコンと扉がノックされた。

「どうぞ！」

待っていたと思われるわけにはいかないため再び椅子へと座りなおし、ギイイと扉が開かれた。まずはウィゼラが入ってくる。彼に続いて少し背が高めの、まだ若い妙齢の女性が。短く整えられた灰色の髪が、動きに合わせてさらりと揺れた。

切れ長である藍色の瞳を縁取る長い睫に、僅かに両端が吊りあがった形のいい朱唇。纏っているものは男性用の服ではあるが、むしろそれが彼女の力強い意志を持った美しさを引き立てているのではないだろうか。女性らしい優雅なドレスもきつと似合うのだろうが、彼女が最も美しく輝くのは、腰に吊るされた剣を抜いたときだろう。藍色の瞳に宿る確固とした意志と、不敵な笑み。傍に置いてもいいかもしれないと思える美しい女性だ。自信に溢れたその姿から、実力の方もきつと申し分ないだろう。

姉がこんなに美しいのであれば、その弟もさぞかし美しいに決まっている。彼女の後ろに続いた少年を視界に入れたとき、己は口を小さく開けて固まることとなった。

襟首で揃えられた、明るい黒髪。幼さがありありと残っているやや丸い輪郭に白い肌。紫水晶のような色彩を持つ、理知的な光が宿った丸い瞳が特に印象的だった。その容貌はまるで少女のよう。そして露出がほとんどない服装からでもわかる、線の細さ。絵に描いたような理想の少年が今、目の前にいる。

(なんて可愛らしい……！)

名はなんというのだろうか。思わず熱心に少年を見つめ続けていると、姉の方を見ていた彼の紫色の瞳がこちらを向いた。視線がかけ合うと、彼はこちらに向けて軽くペコリとお辞儀をし、そして視線を姉へと戻した。可愛い。かわいすぎる。

「——ここは一度、護衛たちと戦わせてみせるのが一番かと。……奥様？」

「あ、あら、ごめんなさい。少しぼうっとしていたわ」

少年を見るのに夢中で全く彼らの話を聞いていなかった。ウィゼラは一度咳き込むと、もう一度詳しく説明をしてくれる。

護衛となることを希望している彼女の力量を測るべく、現在護衛を務めている者と手合わせをさせるという流れのようだ。

本当ならばそんな面倒なことをせずとも雇い上げたい気分であるが、そうすることで護衛を志願した彼女に不審がられてしまっては困る。己の腕に自信がある者は、見目よりもそこを評価されることに喜びを感じるのだ。それに何より、訝しがられて弟を連れて帰られてしまうのを避けたい。

「そうね、それが一番だわ。今から訓練場へ行きましょう」

「ありがとうございます」

護衛希望の姉が深々と頭を下げると、続いて少年もまた頭を下げた。少し緊張しているのか表情が少し強張っているが、そこがまた初心で可愛らしい。

(ああ……あの子をもっと眺めていたいわ)

己の足に合わせ、ゆっくりと訓練場に向かう最中、前を歩く少年の背中をじっと見つめ続ける。彼もまた剣を習っているようで、ベルトに細身の剣を吊っていた。彼が剣を振るう姿もまた、見て見たい。彼の姉の腕前など、もはやどうでもよかった。

確かに彼女も美しいが、美しい女性など別段珍しくもない。近年新たに雇い入れた使用人は、みな己が満足できるほど美しい容姿を持った者たちばかりなのだ。既に十分取り揃えている。

しかし美しい少年というものは、なかなかいるものではない。特に彼のような、少女のような愛らしさを持つ少年は、滅多にお目にかかることのできない存在だ。だからこそ、是が非でも彼を己の傍らへと置きたい。

訓練場では、護衛たちが鏢迫り合いをしながらお互い鍛錬をしている。自分が姿を現すと、彼らは一度こちらを向き、頭を下げた。

「それでは早速始めてもらいますが……よろしいでしょうか？」

「ええ。受けて立ちましょう」

暑苦しい訓練場から一步引いた位置に立っていると、ウィゼラが話を進めていった。鍛錬していた護衛

たちに話しかけ、その中の一人が彼女の相手をしようと刃が潰されている剣を手取る。気付けば、同じく刃を潰した剣を持った二人が、対角線上に立って対峙していた。

「はじめ！」

ウィゼラの声で、剣の打ち合いが始まる。少年を見れば、彼はどこかハラハラした様子で姉を見つめていた。姉が怪我をしてしまうことを心配しているのかもしれない。彼はきっと心根も優しい少年なのだろう。ほうと思わず少年に見惚れてしまう。

キインと一際甲高い音が鳴り響いた。その音に視線を少年から外すと、少年の姉が護衛が持っていた剣を弾き飛ばした姿があった。護衛は己の手を凝視した後、フルフルと震えながら徐に膝を床につく。どうやら彼女が勝ったらしい。

「護衛に勝ってしまうとは。なかなかの腕前ですね」

「ありがとうございます。――これで雇っていただけますか？」

「ええ、もちろんよ。貴方たち二人とも、わたしが面倒みてあげるわ」

まさか本当に勝ってしまうとは思わなかった。だが、これで彼女を雇っても不審がられることはない。

「そういえば貴方たちの名前を聞いてなかったわ。なんというの？」

「これはすいません、申し遅れました。わたしの名前はレイと言います。そしてそっちが弟の――」

「レンと申します」

少年が名乗った名前を心へと刻みつけた。レン。短くて言い易い名前だ。

「ふふ、これからよろしくね、二人とも」

レンの姿を瞳に焼き付けながら、満面の笑みを浮かべた。

案内された部屋は、そこらの宿屋よりも高価な素材で構成されているのが一目でわかった。床には複雑な模様が描かれたカーペットが敷かれ、テーブルや椅子といった調度品は、ところどころ艶を放っている。二人で使ってもなお余裕がある広めのベッドは、柔らかそうな布団が乗せられていた。

「この部屋を自由に使ってください。何か不備があれば、私どものような侍従に何なりと申しつけてくださいませ」

「ありがとうございます」

フレイがウィゼラと呼ばれたウィッキテルスト婦人の付き人に礼を言うと、彼は一礼して去っていった。扉をバタンと閉じ、周りにフレイ以外の誰の気配も感じないことを確認してから、

「さ、寒かった……！」

リンは床に膝をつかせ、縮こまりながら両腕を擦る。

「あの人ずっとリンのことを見ていたものねえ……おっといけない、ここではレンだったね。大丈夫？レン」

「……あまり大丈夫じゃない、です……」

婦人の前に立った時から、彼女はリンのことを熱心に見つめていた。恍惚の表情を浮かべながら。熱くそしてどこか薄ら寒いその視線を受け続けては、流石に平常心を保つのも一苦労だ。それに、一度目が合ったときは非常に焦った。機嫌を損ねることなく視線を逸らすことができよかったと思う。

「でも、作戦は成功だよ。あの人、既にレンに夢中だったもの。わたしのことなんてほとんど見向きもしていなかったし」

「あ、あまり素直に喜べません……」

今まで女性から好意的な視線を向けられることがなかったわけではない。だが、ウィッキテルスト婦人の持つ視線は、どこか強い欲望のようなものを感じられた。簡単に言うなら、喰われそうな視線だった。正直、彼女を相手にするよりも、そこらの魔物を相手にする方がよっぽど気が楽である。

これから暫くあの視線に晒されることを考えると、気が重くなってきた。

「それなら、レンは暫く休んでいて。わたしは屋敷の中を見回ってくるから」

屋敷の中を散策し、敷地内がどうなっているかを把握しておくことは必須だ。こうして無事に雇われたのだから、侍従の者に案内してほしいと頼めば、怪しまれることもなく了承してくれるだろう。

「……それなら、僕も行きます。屋敷の中がどうなっているか、お互いが把握していた方がいいに決まっていますから」

婦人と会うことを恐れるあまり、退路を把握しておくことを疎かにするわけにはいかない。もしもの時に備え、屋敷の構造を理解しておくのは必要不可欠だ。

「大丈夫だと言うのなら止めないけど……無理だと思ったらわたしの背中に隠ればいからね。人見知りだという設定を加えればいいだけだし」

「ありがとうございます、フ……レイ姉さま」

姉弟という設定のため、この囷作戦が続いている間は、フレイは『レイ姉さま』である。間違っても、フレイさんと本名を口走ってはならない。リンも今はリンではなく、レンだ。レンと呼ばれたのに反応しないということも避けなければならぬ。

これは名前で身元がバレないようにするために、急遽決めた偽名だ。できる限り、この件にワイドリジョンが関わっていると思われたくはない。凝ったものにするよりかは、あまり名前を改変しないほうが自然

だということで、フレイはレイに、リンはレンと名乗ることになった。

そう、トルーズが口にした案というのは、フレイが護衛として雇われればいいというものだった。Aランクならば、そこらの用心棒よりもよほど強いだろうと。そして、リンを弟として連れて行けば、婦人の目にも必然的に留まる、とも。

フレイもリンも、ワイドリジョンの傭兵であることを隠しながら婦人に近づくことばかりを考えていたため、最も傭兵らしい『雇われる』という選択肢を無意識に除外していたのだ。

ランクが刻まれた獲物は置いてきた。それならば名前さえ偽ってしまえば、フレイとリンがワイドリジョンの傭兵であることを婦人が知る術はなくなる。傭兵のように雇ってほしいと押しかけても、『安定した生活を求めて』という最もらしい理由をつければ、疑われることもない。

その案を早速実行すべく、フレイとリンは行動に移った。流れの姉弟と偽り、二人で安定した生活を求めるために雇ってほしいと。

婦人の元に案内されたと同時に感じた、熱くねっとりとした視線。その視線に耐えつつ、進んでいくフレイの雇用話には安堵したものだ。ここでフレイが雇われない方向に行ってしまったら、全てが水の泡だ。囨となった意味がない。

訓練場へと赴き、フレイを待ち受けていたのは、実際の婦人の護衛たちだった。服越しからみても、鍛え抜かれているであろう体躯がわかる。あくまでリンの見たてではあるが、彼らにランクをつけるならば、Aランク相当であろう。リンではまず勝つことなどできない猛者ばかりだ。実際対峙した男もまた、同様である。フレイの実力が実際はS相当だとしても、厳しい相手なのではないかとハラハラした。

しかし彼女は始終余裕の笑みを浮かべながら剣戟を繰り返し、そして僅かな隙をついて剣を弾き飛ばした。

立ち合いが終わった後、護衛の男は息を切らせて顔を歪ませながら膝をついたというのに、フレイは呼吸を全く乱していなかった。彼女がその気になれば、一瞬で勝敗を決することもできたのかもしれない。フレイの実力を垣間見て、リンはすごいと心の中で歓声をあげた。

フレイが勝利した興奮も、婦人の満面の笑みを見てすぐに冷めてしまったが。

リンは立ち上がって両拳をぎゅっと握る。もしも婦人に会ったとしても、目を合わせないようにし、やりすごそう。あれだけ熱心ならば、少しくらいの粗相は見逃してくれるかもしれない。

フレイが扉を開き、長く続いている廊下へと出た。屋敷の中は広い分、雇っている人間の数が多いのか、奥から歩いてくる使用人らしき人たちの姿をちらほらと見かける。こちらから挨拶をすれば、使用人たちは見知らぬ二人に首を傾げた。そして新たに護衛として雇われたとフレイが告げれば、激しくえっと驚嘆する。目の前の細い女性が、屈強な男と対峙して勝ったという事実は、なかなか信じられることではないだろう。

それでもこうして顔を覚えてもらいさえすれば、屋敷の中をあちこち歩いていても不審に思われず、見過ごしてくれる可能性が高くなる。そしてもう一つ、

「同じ年くらいの人でも使用人をやってるんだね。あなたはどのくらい前から働いているの？」

「ここ三年ってところかしら。長いっていったら長いし、そうでもないとも言える微妙な長さね……ああでも、奥様はしっかり働けばその分お給料出してくれるし、いい方よ」

「あたしはまだ一年の新米なの。奥様のお役に立てるよう、これからがんばらなきゃって思うわ。――それにしても、可愛い弟君ね。女の子みたい」

フレイが使用人の女性と会話を弾ませる。――おしゃべりが好きな女性ならば、婦人に関する情報を話してくれるのではないか。それを狙い、フレイは彼女たちと談笑を続けた。

「うん、そう。レンはこんな顔をしているからよく女の子に間違えられるんだよ。まあ、もう数年もすれば

そんなこともなくなるだろうけどね」

「それはそれでちょっと勿体無いかも……なんて」

リンもまた、彼女たちに合わせて愛想笑いを浮かべる。ぎこちない笑みだが、男なのに女の子みたいと言われて喜ぶ男はいないだろうから、ぎこちなくとも疑われることはないだろう。

「その首飾りも可愛いわね。お姉さんに買ってもらったの？」

「えっとこれは……」

まさか首飾りのことを指摘されるとは思わず、リンは思わず言葉を途切らせる。シングルドから貰った、大事な首飾り。これをどう説明したらいいだろう。咄嗟にいい嘘が思い浮かばない。

「ああそれね、以前世話になった人がくれたんだ。――残念ながら、レンのことを女の子だと信じて疑っていなかった人で、お洒落するといいつて言いながら、ね。それを売るほどお金に困っていたわけでもなかったし、人の厚意を無碍にするわけにはいかないからって、ずっとつけてるんだよ」

「あらそうなの。でも、レン君を女の子だと思っちゃう気持ちもわからなくはないわ。その首飾りを上げた女の人（・・・）も、きっと似合うと思ったからくれたんでしょうね。もし数年後に会ったら、その人ビックリするんじゃない？」

クスクスと使用人の女性たちが笑う。どうやらフレイの機転で首飾りをくれた人物を女性であると思いつ込ませ、怪しまれることはなかったようだ。どこか微笑ましげにリンを見ているのは、きっと気のせいであろう。

それに、フレイは決して嘘は言っていない。まず、女性であると言いつてはいないし、この首飾りはシングルドが厚意でくれたもの。全てを嘘で塗り固めるよりも、事実を混ぜた方が信憑性は増すものだ。リンの変わりに理由をつけてくれたフレイに、心の中で謝辞を述べる。

「それにしても、婦人――奥様は聞いていた通りのお金持ちで驚いたよ。わたしを雇うついでに、レンまで置いてくれることを快く承知して下さったんだから。おかげでこれから各地を放浪しなくて済んでほっとしてるよ」

「奥様の護衛を倒しちゃうくらい強いんだから、それくらい当たり前よ。それにレイって美人だからってのもあるわね。奥様、綺麗なものが好きだから、傍に置いておきたくなったのかもよ。レン君も可愛いし」

三年ほど仕えているという女性が、どこか羨ましげな視線をフレイとリンに向けた。そして新米である女性を見て軽く嘆息した後、何事もなかったかのように笑顔を見せる。フレイもそれに気付いたらしく、瞳を僅かに細めた。

「あらやだいけない。そろそろ持ち場に戻らないと……！」

「あ！ そうだった！」

「おや、引き止めてしまったみたいだね。ごめんよ」

軽く手を振って別れた後、フレイはふむと呟いてから顎に手を添えた。

「言われてみれば、使用人の人たちは皆綺麗な顔してるね。さっきの新米だという子も綺麗な顔をしてたし」

「……あまりこういう言い方はしたくはないですが、三年前からいると言っていた方は、普通の容姿だと思いました。あくまで、新米の方と比較するとですけど」

人の容姿の良し悪しを言うのはあまり良い事ではないと承知しているため気が進まないが、事件を解決するためには少しの情報も大事なものとなる。

改めて通りがかった使用人達を見れば、顔の造作が整っている者がちらほらと混じっているように思えた。

「婦人の護衛やった人も、みんな整った顔してたよ。もしかしたら、婦人は見た目を最優先で人を雇っているのかもね」

「……」

少し離れた位置にいたリンは、護衛の顔をまじまじと見たわけではないのでよく覚えてはいない。だが対面したフレイがそういうのであれば間違いないだろう。

「主人が亡くなったのって確か二年前だったね。あまり容姿にすぐれない人たちは主人が、存命の際に雇って、見目麗しい者達は婦人が好みで雇い入れたって考えてもいいかな」

「……先ほどの女性の表情からして、多少の臍負がありそうですね。給金は弾んでもらっているようですが」

「だろうね」

フレイや新米の女性を見て少し曇った表情は、その前に口にしていた言葉からして、己も麗しい容姿であればという願望からであると考えていいかもしれない。見目のいい者ばかりを雇っているならば、それ以前から働いている者からしたら全く面白くない状況であろう。

それを考慮して賃金を上げたのだろうか。

「婦人は綺麗なものが好き、か。少年たちを攫った理由としてはまだ弱いけど、今はとりあえず、屋敷の散策を再開しようか」

「はい」

屋敷の中を短時間で把握するには、広すぎた。まだ半分も行ってはいないだろう。本当に広いと思いつつ周囲を見渡ししながら、フレイと共に屋敷の中を歩いていく。

「――！　――！」

しかし途中、再び足を止めることとなった。少し離れたところで、何か揉めているような声がする。喧嘩だろうか。

「ど、どうしましょう、フ……レイ姉さま」

「うーん。どうしようか、レン」

ただの喧嘩ならば、言い方は悪いが気に留める必要はないだろう。そ知らぬフリをして、屋敷の探索をしたとしても、誰も咎める者などいはしない。

「気になるかい？　レン」

「……本音を言えば」

自分たちが今しなくてはいけないことと、喧嘩の仲裁は全くの無関係だ。だが、すぐ近くで激しく言い争いをしているところを無視できるような神経を、リンは持ち合わせてはいない。

「うーん……よし、少し様子を見てみよう。ただの喧嘩だったらこっそり引き返して、手が出るようだったら止めようか」

「あ、はい！」

フレイは一度ニコリと微笑み、声がする方向へと向かった。見つからないよう声を張り上げている者達を見遣ると、思わずぎょとんとする。

「――本っ当に鈍間だね！」

「ああもう、見てるだけで苛々する！」

「す、すみません……」

そこにいたのは二人の女性と一人の男性。そして二人の女性は偉そうに腕を組みながら男性を蔑んだ目で見ており、男性は杖を抱きしめながら縮こまっている。

(杖を持ってる……ってことは、彼は術士か)

古びた黒のローブを纏い、顔も俯けているが、か細く呟かれた声音は明らかに男性のもの。そして、術士の男性を詰っているのは、少し年嵩の使用人の女性たちだった。

ただの喧嘩ではないが、手が出るような雰囲気もない。怯えている男性は可哀想だと思うが、よくも知らない第三者が割り込んだとしても、逆に彼女たちを逆上させてしまう可能性もある。

フレイに視線を投げると、流石の彼女も考えあぐねているようだった。もしも詰られているのが女性で、詰め寄っているのが男性だったならば、迷うことなく止めに入っただろうに。

「ああもう、なんでこんなヤツが奥様のお気に入りなんだろうね!? 小奇麗なところか、野暮ったい見た目をしてるっていうのにさ！」

「ほんとだよ、全く。術士サマはお気楽で結構なことよ。あたしらみたく、あくせく働く必要なんてないんだから」

彼女たちは言葉を吐き捨てると、くるりと踵を返してのしそのしとその場を離れていく。姿が見えなくなり、気配も感じなくなったところでフレイと共に詰られていた男性の所へと近づいていった。

「大丈夫ですか？」

「！」

フレイが声をかけると、男性の肩がビクリと跳ねた。そして杖を握り締めながらガタガタと震えだす。

「……えーと、わたしは貴方のことを詰るつもりはないですよ。弟もです。ただ、先ほどの様子を見てたので気になっただけですから」

相手を刺激しないようにか、フレイが丁寧な口調で術士の男性を諭した。こちらに敵意がないと漸く悟ったのか、彼は安心したように大きくため息をつく。

「す、すみませんでした……」

「いえ、こちらこそ助けに入れなくて申し訳なかったですね。事情をよく知らないわたしたちが割り込む方が、余計に事態を悪化させてしまうかもしれなかったのです」

黙って見ていたことを詫げるフレイに、リンもペコリと頭を下げた。そして術士の男のフードで隠れた顔を見上げる。こうして近づくことにより、フードによって隠されていた彼の顔がよくわかった。

フレイより僅かに高めの背丈に、少し垂れ気味の細く茶色い瞳。ぼさとした感のある短めの赤茶の髪とぺしゃりと短い丸い鼻。四角い輪郭は至って平凡な容姿である。はっきり言って、婦人が好むような眉目秀麗な人間ではないだろう。着ているローブも、ところどころ擦り切れたところのある、使い古されたものだ。

リンは先ほど彼を詰っていた使用人の言葉を想起する。彼女たちの言うことが本当ならば、彼はウィツキテルスト婦人のお気に入りということだ。やっかみが多分に含まれていたことを差し引いても、婦人に目をかけられていることは確かだろう。そうでなければ、あんなに強く詰ったりはしない。

しかし疑問に思う。術士が魔物と直接立ち向かうような前衛を務める者のように、筋肉がついていないのはわかる。だが、後方支援を主とする術士であっても、背後から魔物に襲われないという確証はないのだ。だからこそ、後衛にも前衛と同じく魔物に立ち向かえる胆力が必要となる。

実際、ガルデア支部の術士たちは魔物と戦うことを一々怖がったりはしていない。攻撃手段に乏しいデリハルトでさえ、己の役割を理解した上で、毅然と立ちまわっている。

なのに、彼からはそんな気概を全く感じられなかった。確実に戦闘力は低いと言ってしまうもいいだろう。デリハルトのように、治癒や補助に特化した術士なのだろうか。

「ああ、申し遅れましたね。わたしはレイ。そして彼は弟のレン。今日付けで奥様の護衛として雇われることになりました。どうぞ、今後ともよろしくお願いします」

「あ、はい。わ、私はピケットと、い、言います。えっと……ご、護衛……ですか？」

彼はフレイをまじまじと見つめ、そして腰のベルトに吊られている剣を見る。細い瞳をぎょっと見開いた。

「あ、貴女のような女性が……剣を？」

「剣を持つことに性別は関係ありませんよ。わたしには守るべきものがありますから、強くならなければならなかった、それだけです」

フレイはリンに視線を向け、ニコリと微笑んだ。リンもそれにはにかむことで応える。姉弟という設定上、フレイの演技にできる限り合わせるのがリンの勤めだ。

「ピケットさんは術士ですよね。訓練場にはいませんでしたが、貴方も護衛ですか？」

「い、いえ私は……その……と、とある魔術をけ、研究してまして……」

穏やかな口調で訊ねているというのに、ピケットと名乗った男性の口調はしどろもどろだ。フレイに怯えているからではなく、生来人と話すのが苦手なのかもしれない。

「お、奥様にはその……研究を支援して、も、もらってまして……」

「ああ成程。資金を提供してもらおう変わりに、成果を提出してるんですね」

「……術士というより、研究者、なんですね」

成程、とリンは納得する。術士と言えば後方支援をしてくれる戦い慣れた姿ばかりを連想していたが、術に関する研究を行っている者もいることを失念していた。

例えば街を守る結界装置（シルトアプラテス）。これは『障壁の結界（ブロックシルト）』と呼ばれる、魔性のものから身を守る結界を一時的に生み出す補助魔術を研究し、編み出されたものである。そして初めて編み出されてから既に長い月日を経て、結界装置（シルトアプラテス）はあるのが当たり前になるまでに世界に浸透した。

この世界は魔術で文明が成り立っている。流れている川の水を清潔な浄水へと変換する装置や、それを街中の家々に自動的に届けられるような仕組み。発火性のある石を打ちつけることをせずとも、火を熾すことができる道具なども、一般の家々にも広まっている。

今では当たり前のような道具は、全て術士が魔術を研究し、利便性を追求したからである。彼らの存在無くして、現在の文明の発展はありえない。

「研究者は大体王都のような大都市に集められて、大勢で発明を行っているものだとばかり思っていました」

「まあ、大半はそうだろうね。でも、こうして個人的な研究をしたい人もいるだろうさ」

「そ、そそ、そうなんです」

個人的な研究がどんなものかはわからないが、婦人の好みに沿ったものなのだろうと結論づける。それならば確かに、利便性の向上とは無関係かもしれない。

「ピケットさん、よろしければ何を研究しているか教えていただいてもいいですか？」

「え!? えと……その……」

ウィッキテルスト婦人が支援しているという研究だ。確かに聞いてみる価値はある。それに『研究している』ということを知れば、何をしているかが気になるのが心情だ。訊ねることに何の不思議も違和感もない。

「も、もも、申し訳ないです……その、奥様から、ひ、秘密だと言われてまして……」

「……そうですか。それは残念です」

リンは訝しげに顔を顰めそうになるのを、寸で堪えた。口止めされている研究なんて、正直ろくでもないものの気配しかしない。同じことを思ったであろうフレイは表情を一切変えることなく、微笑みを浮かべているのは流石だった。こういった演技力なども、今後身に付けるべきかもしれない。

「ほ、本当にも、申しわけない……」

「いいえ、奥様が自ら支援されているのでしょうか？ なら、奥様が独り占めをしたいと思われるのは当然ですよ」

フレイの言葉に、ピケットは明らかに安堵の表情をした。これ以上の追求から逃れて安心していることを、隠そうともしていない。彼は明らかに駆け引きに不向きだ。

「それではピケットさん、わたしたちはこれで。またお話できたら嬉しいです」

「え、あ、はい！ また……」

軽く手を振ると、ぎこちなくはあったがピケットもまたフレイに向かって手を振った。

ピケットから聞きだしたいことは山ほどあったが、今のところは引いた方がいいだろう。話を聞くにしても、彼に警戒されたのでは話どころではなくなってしまう。

「……ピケットさんが手がけている研究、どんなものだと思いますか？」

「わたしもそこまで魔術に精通しているわけじゃないからわからないけど……平和的なものなら、宝石を生み出す魔術とかじゃないかな。婦人はじゃらじゃらと無駄に宝飾品を身に着けているから、あればあるほどいいのかもしれない。それに、宝石って綺麗だしね。――事件と関係性があるかまでは、流石に判断しきれないな」

「そう……ですね」

魔術で宝石を生み出すだけならば秘密にする必要はないとも思えるが、その恩恵を得るのは己のみでいいと考えているならば、秘密にしたとしてもおかしくはない。つまり、どちらともとれる解釈だ。

「それでも、彼から何かしら有益な情報は得られるかもね。お気に入りみたいだし。これからもし出会ったら、積極的に声をかけていこうか」

「はい」

ピケットの行っている研究が何かわかれば、婦人が行っている企みを知ることができるかもしれない。それを知ることができれば、失踪した少年たちの行方にも目処が立つ可能性もある。

「今は切り替えて、屋敷の散策を続けようか、レン」

「はい、レイ姉さま」

役の確認をするかのように言葉を交わし、再び広い屋敷の中を連れ立って歩いた。

「ねえ、お願いがあるのだけど」

いつからだろうか、彼女のその言葉を聞くのがとても恐ろしいと思うようになったのは。

昔から剣術には自信があった。己の腕前さえあれば、これで食っていくことも難しくはないと。

剣を活かす職として、きっと誰もがワイドリジョンに所属することを勧めることだろう。しかし、己は見知らぬ土地に足を踏み入れたいというような冒険心はなく、かといって、パルジファルのような規律を重んじる王立ギルドもまた、性に合わない。

それに、できれば誰かを守るような仕事をしたかった。つまりは護衛だ。ギルドでは魔物の部位を集めてきてほしいという依頼がよくあると聞かすが、そんなのはただのお使いとなんら変わりはないではないか。

己の剣は、誰かを守るためにある。だからこそ選んだ護衛という仕事は、まさに天職ではないかと心から思ったものだ。

剣を一本だけを持って故郷を離れた己が雇って欲しいと直談判したのは、ここいら一帯では相当の金持ちであると噂の老夫婦の屋敷。主である彼ら老夫婦の前で腕前を披露し、見事その腕を見込まれて老婦人の護衛役となった。それ以来、己の剣は彼女のためにある。

しかしそれは、あくまで彼女の身を守るためのものであったはずなのに。

「ねえ、お願いがあるのだけど」

彼女からそう言われ、何でしょうと特に気にすることなく己は応えた。彼女は長い付き合いである己に、旦那である夫君には内緒でこっそりトレイディアの街に出かけたいと口にすることが多々あった。それはときに、仕事で忙しい夫君のために何か贈り物をしたいと、己の足で持って贈り物を選びたいからと、お忍びで外に出たいという理由からだったから。

その言葉は、実に二年ぶりであったように思う。主である彼女の夫君が亡くなられてしまっただけからは、紡がれることはなくなっていた。

だから久しぶりに聞いて内心嬉しかったのだ。今度は己に何を望んでくれているのかと。しかしその思いは、彼女が告げた言葉によって冷たいものへと変わっていく。

「あなたの剣は、わたしのためにあるのでしょうか？」

全身から血の気が引いていくのがわかった。だが、彼女にそう言われて否やがいえるわけもない。

それにももし己が彼女の願いを断ったとしても、別の護衛に同じことを頼むだけだろう。一一己が手を下すことも嫌ではあるが、同僚であり仲間でもある彼らにそれを押し付けることになるのも、また嫌だった。

「一一了解しました、奥様」

変わり果ててしまった、彼女の『お願い』。それが口に出されるのは、主に別の街へと赴いたときのこと。街を見て回っている最中に目ぼしい『標的』を見つけたとき、彼女の『お願い』は発生するのだ。

だが、ある日その人物は屋敷に来た。来てしまった。

流れの姉弟だという、女性と少年。その少年の姿を視界に入れたとき、己は息が詰まるのを感じた。

あの少年は今まで『標的』にされた少年たちと似たような雰囲気を持っている。もしも彼女が街である少年を見つけたならば、間違いなく『お願い』されただろうと断言できるほどに。

そして彼女は案の定とでも言うべきか、この少年に完全に魅入っていた。もしも姉である女性を雇う話がなかったことになっても、きっとこの少年を手に入れるべく『お願い』をしてくるだろう。そしてもし姉を雇うことになったならば、彼女はいつでも好きに少年を手に入れられることになる。

(一一俺が彼女に勝てば、もしも命令されても逃がすことができるかもしれない)

もう嫌だった、彼女の『お願い』を聞くのが。護衛を志望している姉には申し訳ないが、大事であろう弟のためでもある。ここは心を鬼にして彼女の護衛入りを阻もうと決意した。しかし、物事は全くうまく進まない。

剣戟を何度も繰り返していたというのに、気づけば己の手の中に握られていた剣が存在していなかった。そして首元に突きつけられる、彼女の剣先。

(負けた……)

勝たなければならなかったのに、膝から力が抜けた。彼女に全く歯が立たなかったことよりも、己が負けたせいであの少年が標的となるだろうという事実がずしりとしかかる。

(どうすれば……いいんだ……)

初めに『お願い』の内容が変わったとき、やはり断ればよかったのだろうか。己の剣はあなたを守るためだけにあると。どうか考え直し下さいと。だが、最早今更なことだった。時が戻ることはありえない。

仲間たちが負けて落ち込んでいると思ってポンと肩を叩いて励ましの声を送ってくれるのも、全く耳には入らなかった。

「あー……暇だなあ……」

ネニックが部屋にあるテーブルに突っ伏しながら、気が抜けるような声をあげた。

煩いと注意することすら、既に億劫となっている。ここにこうして滞在してから、既に五日が経とうとしていた。しかし、潜入調査を始めた彼女たちからの連絡は、未だに入っていない。

「フレイさん、大丈夫かなあ……」

潜入調査をするフレイが危険だということには変わりはないが、囷となるリンとて同じく危険に身を晒している。むしろ、危険の度合いで言ったらフレイよりも彼女の方が高いだろう。それに、自己紹介のときに彼女はAランクであると明かしている。そこいらの人間では決して歯が立たないような実力者だ。新米で剣術においてはまだまだ自分たちが心配するようなことではない。

しかし、あえてわざわざそんなことを口にするほど、トルーズは親切な人間ではなかった。彼の呟く独り言を全て聞き流し、街で新しく買った本に注視する。

「フレイさんにかっこいいところ見せられたらよかったのに……うう、これじゃあ俺らただの暇人じゃないか」

ただの暇人だという呟きに、まあそうだろうなと内心同意する。自分たちの役目はフレイが見つかる証拠をガルデアに持ち帰ること。それまではずっと宿屋で待機だ。他にすべきこともなく、こうしてダラダラと時が来るのを待つしかない。ネニックのように緊張感が持てないのも、まあ無理もない話だろう。トルーズとて、こうして本を読んでいなければ、ネニックのようにすることが全く思い浮かばないのだから。

別に外出しても問題はないが、いつ彼女たちから連絡が入るかわからないため、必ず一人は部屋に残らなければならない。昨日までは交互に街を散策していたが、特産物や観光名所のようなところがあるわけでもなく、一人でぶらぶら歩くのにも飽き始めてきたところだった。

街の外に出て、魔物相手に特訓するという選択肢もない。トレスディア周辺に生息する魔物はDランクに指定されているものばかりで、こちらが剣を適当に振っているだけで逃げ出すような弱さだ。普通に素振りでもしていた方がましだというもの。しかしその素振りも、狭い部屋の中でやるわけにはいかず、外に行くのも億劫なため、結局は暇を持て余すしかなかった。

「ああ……それにしてもフレイさんって本当に美人だよなあ。さらさらショートヘアーのクール系美人……！ 恋人とかいるのかなあ……」

テーブルから顔だけをあげ、にへっと頬を緩める姿は能天気な馬鹿にしか見えない。実際その通りなのだが、その表情を浮かべているだけなら特に害はないので放っておく。

「なあトルーズ、フレイさんって恋人いると思うか？」

(俺がわかるわけないだろ)

内心毒づきながらも、そのまま伝えたらネニックはなんだよ酷いな、友達だろーと鬱陶しいことを言い始めるため、トルーズは一度大きく息を吐き出した。

「あれだけの美人だから、いるんじゃないのか」

本当のところはどうなのかはわからない。だが、無責任にいないと言ったら、実際にたときネニックは今まで以上に激しく落ち込み、暫く立ち直れなくなってしまう。

ならば、始めから希望なんて持たせず、ばっさり切ってやるのが一番楽であると長い付き合いからトルーズは知っていた。

「そ、そうだよな……フレイさん美人だから、引く手数多なんだろうな……」

幸せそうな顔をしていたのが嘘のように、するすると落ち込んでいっているのがわかった。ズーンと影を背負っているが、これはまだ傷が浅い落ち込み方だ。放っておけば勝手に回復する。

コンコン。

部屋の扉をノックする音が聞こえ、トルーズは本にしおりを挟んで机の上に置く。ちらりとネニックを見遣ると、彼はノックに気付いた様子はなく、どんよりとしたままだった。これではトルーズが出るしかないだろう。

軽く嘆息したのち、扉の方へと赴いてとってをひねった。ギィという音と共に扉が開く。

「こんにちは」

「あんたは……」

頭一つ分程下にある紫の双眸が、凜とした雰囲気と纏わせながらトルーズを見上げていた。彼は、いや彼女は現在『囷』として屋敷に潜入しているはずであるリンだ。

「漸く買い出しを頼まれることになったので、報告がてら寄らせていただきました」

「買い出し……ってことは、無事に潜入できたんだな」

「ええ」

トルーズが護衛として雇ってもらえばいいと提案したことを、そのまま実行することになった彼女たち。成功したのか否かもわからない状況が続いたが、この様子からして潜入はうまくいったようである。

「フレイさんは護衛との一騎打ちに勝利して、護衛の座を獲得しました。――僕のことどうやら気にしてもらえたようではあります」

肝心な部分を、彼女は視線を逸らしながら虚ろな色を瞳に宿す。彼女の様子はさておき、ことは順調のようだ。一息ついたところと言っていいだろう。

「フ、フレイさんは無事なのか!？」

「!？」

突如、背後から聞こえた大声に、ピクリと肩が震えた。若干血走ったように見える瑠璃色の瞳に、少しばかり恐怖を感じる。

「えっと……フレイさんは無事ですよ」

「！ そっかあ、無事かあ！」

ネニックは両拳を握り締め、二の腕を脇へと打ちつけた。リンがこうして報告に来ている時点で、彼女もまた無事なのだと検討くらいつくだろうに。

「護衛といえども、婦人が出掛けなければ用はないので、普段は他の護衛の人たちに混じって鍛錬してますね。――一応夜中に散策しているのですが、未だ隠し部屋のようなものは見つかってません」

侵入しただけですぐに見つかるようであれば、シェード支部長も苦勞はしないだろう。

「証拠を見つけるには、まだ時間がかかりそうです。――それよりも、先に僕がそこへと連れていかれる確立の方が高いですが」

紫の瞳がどこか遠くを見つめていた。

言っていることからして、彼女は作戦通り、婦人に気にいられたのだろう。なのにそんな表情をしているのは、年を食った同性に好かれても嬉しくもなんともないからだろうか。だが、それが彼女の仕事なのだから、ここはあえて何も言わないことにする。

「気にいられたのはいいとして……あんたよく一人で外に出してもらえたな。尾行とかされてないよな？」
「尾行されていたら大人しく買い出しをしようと思っていたのですが、そんな気配は感じなかったので、恐らく大丈夫だと判断しました」

「……それならいいか」

気配云々のことは、パルジファルに入団したばかりのトルーズにはよくわからない。しかし理知的な光を取り戻したリンがそう言うのであれば、大丈夫なのだろう。彼女とは一つしか年の差がないはずだが、歴然とした戦闘力の差がそこにある。

「とりあえず、一応は順調に進んでます。次に来られるのはいつになるかはわかりませんが」

「……初めにこんなに間が空いたからな。確かに次はどうなるかわからないな」

ヘタをしたら、次の報告は任務達成報告になる可能性が高い。婦人の家は使用人が多く、その分人の目をかいくぐるのは難しいだろう。トルーズでも、それくらいのことは予想できた。

「あ、あのさリン、一つ聞きたいことがあるんだけど……」

「何でしょう」

ネニックが緊張した面持ちをリンに向けている。彼女から何を聞きだそうとしているのかすぐにわかったトルーズは、思わず額に手を当てた。

「フ、フレイさんにこ、恋人っているのかな……!？」

予想通りすぎる答えに、蹴り飛ばしたくなったのを何とか堪えた。昔から惚れ易いところがあると知ってはいるが、今はそんなことは全く重要ではない。

「フレイさん、ですか？ そういう話は聞いたことがないですね。ご本人に直接訊ねるのが一番だと思いますよ」

こんなときに不謹慎だと怒るのではないかと思われたが、リンはさらりとした表情でネニックに言葉を返す。真面目そうな人だと思ったが、案外天然のようだ。

「そ、そうなんだろうけど……や、やっぱり直接聞くのは勇気がいるというか……」

「――それなら、帰ったら僕から聞いてみましょうか？ 次にお伝えするのはいつになるかはわかりませんが」

「ほ、本当!？」

あからさまにペアアと表情が明るくなるネニックに、ハアと嘆息する。もしもフレイに恋人がいた場合、がくりと深く落ち込む様が容易に想像がついた。

「で、できれば好みの男性のタイプも聞いてくれないかな……！」

図々しい要求をするネニックに、リンは構いませんよと軽く了承する。諸手を上げてうおおお！ と歓喜に震えるネニックがとても喧しい。

「……いいのか、簡単に了承して」

「フレイさんに聞けばいいだけですから、そう手間はかかりませんし。……それに」

リンが騒いでいるネニックを見つめた。少し微笑ましげな表情をみて、自分達より圧倒的に背が低くとも、年上なのだなと今更なことを思う。

「彼の気持ちも、わからないわけではありませんしね」

「……」

それは、彼女もまた身に覚えがあるということだろうか。惚れっぽいネニックとは違い、未だに『恋』というものをしたことがないトルーズには、よくわからない感情だ。

「あまり長居をするわけにはいきませんので、そろそろ失礼させていただきます」

「ああ、そうだな。わざわざ俺が言わなくてもわかってると思うけど、十分気をつけてくれ」

「ありがとうございます」

別に礼を言われることでもないのに、リンは軽く頭を下げる。片手を振って帰っていく彼女を見送って部屋の中に戻ると、トルーズは再び大きなため息をついた。

「フレイさんの好みの男ってどんなだろうな……できれば伸びしろのある年下が好きだと嬉しいんだけどな……」

ぶつぶつと呟いているネニックを放置することに決め、テーブルの上に置いてある本を手取る。

「ああ……年上のクールな女性ってかっこよくて素敵だなあ……」

妄想を呟くネニックの声を聞き流しながら、トルーズは読書を再開した。

頼まれた買出しを済ませて屋敷へ戻ると、玄関先で待ち受けていた人物がいて口元が引きつるのを何とか堪えた。

「おかえりなさい、レン。途中、変な人に襲われたりとかしなかった？」

ウィッキテルスト婦人、その人である。わざわざ婦人が直々に出向くとは思わず、心の中で笑顔、笑顔と呪文のように呟きながら、笑みを作った。

「はい、無事に全ての買い出しを終わらせました、奥様。心配してくださり、ありがとうございます」

詰まらないか心配した言葉は、意外にもすらすらと淀みなく出てくる。五日経過したことで、恍惚の眼差しを受けながらも、受け答えができるようになるくらいには慣れたということだろうか。あまり喜びたくはない事実である。

「うふふ、大変だったでしょう？　すぐに荷物を使用人に預けて、お茶にしましょう。今日もレンの好きな甘いお菓子を用意してあるわ」

フレイが正式に雇われてから今日まで、婦人からのこうした誘いは既に何回目だろうか。

雇われることとなったフレイとは違い、リンは実質タダで置いてもらうも同然だった。しかしながら、無償で置いてもらうというのは気が引けるし、何より外出手段を得られる機会がほしかった。パルジファルの二人と連絡を取り合うためには。

だからこそ、リンは婦人に自分にも仕事を下さいと申し出たのである。そんなことはしなくていいと彼女は言ったが、リンは首を振る。ここは是が非でも了承の言葉を得なければならないため、婦人の視線に怯えることなくまっすぐ見つめた。

それでも難色を示す婦人に付き人である男性が、リンの言葉に賛同してくれた。彼にやる気があるのなら仕事を与えてみてもいいのではと。

相変わらず婦人は渋い顔をしていたが、結局は頷いてくれる。それに心の中で拳をぐっと握った。言質をとってしまえばこちらのものである。

それでも婦人の身の回りの世話を任されることを覚悟してはいたが、思いの他、婦人絡みの雑事は少なかった。部屋や廊下の掃除や食器運びなどの雑用がメインで、そして今日になって漸く街での買い出しを任される。

恐らく付き人の男性が、わざとそうするように仕向けたのかもしれない。少年としてみると十代前半にしか見えないリンに、大事な婦人の世話を任せられるわけがなかった。そしてその反動なのか、婦人は食事などのプライベートな時間になると、リンも一緒にどうかと誘ってくるようになる。こうしてお茶に誘われたのも、一度や二度のことではない。初めは恐れ多いと断り、その次はフレイも同席ならばと条件を付けて、食事や茶会に呼ばれることとなった。何度も誘われて、断り続けるのには無理がある。

甘いものが好きなリンにとって、出される焼き菓子や甘いものに心が弾むが、それも婦人の熱の籠った眼差しによって全て台無しとなる。

一応何かしらの毒入りではないかと警戒したものの、フレイが先にパクリと口にしたのを契機に、リンも躊躇わずに食べた。フレイ曰く、リンに一服盛ろうとするならば、姉であるレイの目や耳が届く範囲では決してしない、と。つまり、フレイを同席させれば安心できるお茶会なのだ。

それでも始終熱い視線を送られて、出された菓子を堪能できるかと問われれば否である。リンにとって、婦人との茶会はあまり楽しいものではないが、婦人の機嫌をとるには必要なことであろう。苦虫を噛み潰したような顔にならないように意識しながら、にっこりと微笑みを浮かべることに尽力した。

「それは楽しみです、奥様。気を遣っていただいて、本当に嬉しく思います」

「いいのよ、気にしないで。わたしはレンのような子供には、楽しい思い出をいっぱい作ってほしいと思っているの。子供でいられる時間はとても短いからこそ、楽しいことをしなくちゃね」

リンが買ったものを、婦人の付き人の男性が無言で己に渡すように示してきた。リンは大人しく彼に買い物袋を預ける。付き人の男は、婦人に一礼した後屋敷の奥へと消えて行く。

「さあ、いらっしやい。美味しいお菓子が待っているわよ。レイは先に行かせてるわ」

「はい。とっても楽しみです」

いそいそと、茶会の準備をしているであろうテラスへと向かって行く。とても楽しそうな婦人とは裏腹に、リンの心はどっしりと重たい。婦人に聞こえないよう、ハアと嘆息した。激しく気が重い。

テラスへと着くと、フレイがリンに気付いて軽く手を振った。リンもまた軽く手を振り返しながら、テーブルに乗せられている菓子に目がいった。

「お帰り、レン。今日はドーナツだってさ」

「わあ……」

中央が空洞になっている、丸い形をした菓子。ふわりと柔らかそうなものもあれば、ぎっしりと詰まった生地のものもある。甘い香りが鼻腔をくすぐった。婦人と共に過ごすことさえ考えなければ、出される菓子は本当に素晴らしいものばかりである。

「奥様、申し訳ありませんが、少々お時間をいただけないでしょうか」

「あら、何かしら」

早速フレイの向かいにある席に座ろうとした婦人に、若い使用人の男が声をかけた。婦人に雇ってもらおうべく話を通してもらった男であり、リンにも仕事を与えたらどうかと進言してくれた人物でもある侍従の一人、ウィゼラだ。

ウィゼラは婦人の好みらしく、端正な顔立ちの美丈夫と言えるだろう。しかし彼の持つ黒檀色の瞳はどこか無機質で、近寄り難い雰囲気を持っている。彼が婦人に口添えをしてくれたとはいえ、あまり好きになれそうにない印象を持った。リンが働くのを勧めたのも、何か企みがあってこそではないのだろうかと思しんでしまう。

「実は……」

婦人の耳元に手を添えて、そっと話されてしまったのは内容は全く聞き取れないだけでなく、読唇もできない。ちらりとフレイを見ると、彼女もまた唇をむっと窄めていた。すぐさま元に戻したため、リン以外の誰にもその表情は見られてはいない。

「……その話、今じゃなきゃだめなの？」

「ええ。貴女様の楽しい一時を台無しにしてしまうことはとても忍びないことではありますが」

ウィゼラから話を聞いた婦人は、あからさまに面倒くさそうな顔をしている。そしてちらりとリンの方を見た。いつもならそのまま恍惚の表情でリンを見続けるものなのに、今回に限ってはひどく残念そうに首を横に振る。

「……しょうがないわ。わたしが行かなければいけないのでしょうか？ ーごめんなさいね、レン。せっかくのお茶会だけど、今回は中止よ。ああ、そのドーナツは部屋へ持って行って食べるといいわ」

「え、あ、はい」

婦人は名残惜しそうにリンをちらちらと見ながら、ウィゼラと共に立ち去っていく。

「ど、どうしましょう姉さま」

「うーん。奥様はこれを部屋に持ってっていいって言ったから、持って帰って二人で食べようか」

フレイが給仕の女性を見遣ると、彼女はてきぱきとドーナツを籠に入れていき、お盆にポットとティー

カップを乗せてくれた。二人は給仕の女性に礼を言ってから、宛がわれている部屋へと戻っていく。

「どうぞ、レイ姉さま」

「ありがとう」

ドーナツの入った籠をリンが持ち、ポットとカップが乗ったお盆をフレイが持つことになったため、リンが率先して部屋の扉を開ける。明らかに重いであろう、紅茶の入ったポットが乗ったお盆を自分が持つ、とリンは言ったが、フレイは可愛い弟に重いものを持たせるわけにはいかない、とリンの頭を撫でながら軽く笑った。そのやり取りを見た給仕の女性は、微笑ましげにクスリと笑う。

時折フレイは、こうして弟を可愛がっている姉を演じることがある。そして芝居に慣れていないリンでも自然に姉思いの弟に見えるよう、仕向けてくれる。そのおかげで、顔立ちがあまり似ていなくとも、姉弟だということを疑われたことはなかった。お互いが弟思い、姉思いの仲のいい姉弟だと、屋敷中に知れ渡っている。

五日もあれば、屋敷の中で働いている者達に二人の顔が知れ渡るには十分だった。すれ違うと必ず何かしら声をかけられることが多い。特に、フレイと同じくらいか少し年下であると思われる若い女性の使用人たちから。少し高めの身長ときりっとした意志の強い眼差しを持つフレイは、ここでも女性たちの憧憬を一身に受けていた。

与えられた部屋に戻るまでの、そう長くはない道のりの間も、使用人の女性たちから次々と声をかけられる。フレイはそんな彼女たちに対し、嫌な顔をするでもなくにこやかに会話をしていた。何かしら情報を収集できるのではないかという期待と、使用人達に嫌われてしまっただけで動けなくなってしまうという打算からだ。リンとしても、人と話すのは嫌いではないので、別段苦にはならない。婦人というほうがよっぽど神経がすり減らされるというものだ。

結果、自室へ戻るのにかかった時間は、婦人に玄関口からテラスまで案内されたときの倍以上。これも調査の一環であるから仕方が無い。

フレイがまずテーブルにお盆を置いてから、リンもドーナツの入った籠を乗せた。

「よーし、二人でお茶会を始めようか。今日は婦人の目もないから、レンもお菓子を楽しめるよ」

「あはは……」

リンは苦笑しながらも、ポットからカップにお茶を注いだ。時間が大分経っていたのにも関わらず、注がれた茶の表面からは、ほかほかと湯気が立ち昇る。

このポットもまた、魔術研究の開発により編み出された、保温効果のあるポットである。大体が飲食物を提供する店などで利用されているもので、こうして個人が持つ分までには生産に至っていない。後数年もすれば一般人にも広まるようになるだろうが、今の時点で個人が持てるのは、金に余裕のある裕福な者だけだろう。

「流石、ウィッキテルスト婦人だね。こうした嗜好品も手に入れているとは。おかげで温かいお茶がいくらでも飲める」

「そうですね……ここには驚くものがいっぱいあります」

フレイがカップに口をつけ、美味しそうに紅茶を啜った。リンもそれに続いてカップを手にとった。

「……心がとても落ち着きます」

「あはは。ドーナツも食べてみなよ。甘くてさくさくしてて美味しいよ」

この屋敷でした飲食は、ほとんど婦人が同席していた。そのせいで味を堪能するということができなかったわけだが、今回ばかりはリンも甘い物を十分に楽しめそうである。

「――っ、美味しい……！」

ドーナツを頬張ると、甘い味とほどよい食感、そしてバニラの香りが鼻腔をくすぐる。気付けばどんど

ん籠の中に手を伸ばしており、あっさりと籠の中身は空となってしまった。

「お、お腹いっぱいです……！」

「生地がつまってるから、結構たまるねこれ。夕飯入るかな」

あまりにも美味しかったために夕食のことを考えずに食べてしまった。思わずテーブルに伏していた身体を起こし、青ざめる。

「ゆ、夕食のことを考えていませんでした……！」

「別にいいんじゃない？ 夕食はまたきっと婦人と対面することになるだろうから、どうせあんまり食べられないよ。食べられるときにたくさん食べておくべきだね」

婦人との食事は、当然ながらあまり食が進まず、婦人に感づかれない程度に口に運ぶ程度だ。そんなことを続けていては身体がもたなくなるのは確実に、避けなければならないことでもある。

「まあ、それを抜きにしてもたまにはいいものじゃないかな。こうして甘いものでお腹いっぱいにするのも」

フレイはにこにこ優雅に紅茶を啜っている。つられてリンも笑うと、ふとあることを思いだした。
(パルジファルの二人に現状を報告したって伝えてない……！)

漸く得た外出の機会。とある使用人から買い出しを頼まれて、リンは快く引き受けた。それでももしものことを考え、尾行者がいなか常に気を配っていたが、そんな気配を感じることもなく。ならばと初日に簡単な段取りを行った宿屋へと赴き、待ちくたびれているであろう、二人の若い騎士に現状を報告したのだ。
「フレイさん、今日漸く外に出られたので、宿屋の二人に現状を報告してきました。一応順調に進んではいることと、それでも証拠を見つけるにはまだまだ時間がかかるということを」

彼らにはもう暫く、あの宿屋で待機をしてもらう必要があるだろう。つまりは暇を持て余すことを強いてしまうが、こればかりはどうしようもない。

「探索時間、限られてるからねえ……流石に雇われてる以上、真昼間から隠密行動するわけにはいかないし」

無駄に広い屋敷の中は、搜索するのはとても大変だ。ある程度場所に目星をつけて探索しているらしいが、全部外れだったという。

「一番怪しいのは、あのピケットっていう術士だけど……あれっきり姿を見ないからどうしようもないね」

使用人たちにそれとなく彼のことを聞きだしたことはあるが、彼について詳しい情報を得ることはできなかった。婦人に頼まれてある研究をするためずっと部屋に籠っているらしい、ぐらいだろうか。あまり屋敷に姿を現すことはなく、あってもずっと俯いていたり、声をかけてもひどく怯えられるため、使用人たちは彼のことをあまり気にかけてはいないようだった。食事の方はどうしているのかと問えば、婦人の信頼が最も厚い付き人の男性に、作った食事を預けているとのこと。間違いなくウィゼラのことであろう。婦人だけでなく、彼の身の回りの世話もまた、ウィゼラが行っているらしい。

「あの生真面目そうな付き人さんから話を聞くのが一番よさそうだけど……隙が全くないからなあ」

「そうですね……」

婦人の信頼が厚いということは、それだけ知られてはまずいような情報も知っている立場と考えていい。そんな重要な立場におく人間を、口が軽いような者にするわけがなく。

「ウィゼラさんが軽々しく口を開くとは思えないから、やっぱり順々に探していくしかないかな」

「フレイさん、睡眠時間の方は大丈夫ですか？ 寝静まった後探してますけど……」

「それは大丈夫だよ。ちゃんと休息はとってるしね」

にこにこ笑うフレイの表情に、疲れは全く見当たらない。ならば彼女の言う通り大丈夫なのだろう。少しの休息で十分休めるよう、身体が慣れているのかもしれない。

「――ああでも、一つだけ気になることがあったな」

「何ですか？」

「婦人の護衛役。わたしが戦った人を覚えてる？」

「遠目だったので……どんな方だったかはあまりはっきりとは覚えてないです」

鍛えられた身体と、どこことなく顔立ちが整っているかくらいか。しかしそれはきっと、残りの護衛たちと共通する特徴かもしれない。

「改めて顔合わせしたときなんだけど、まあ女のわたしが護衛につくわけだから、あんまりいい顔されなかったんだよね。でも、何だかんだで剣を合わせていくうちに少しずつ打ち解けて、今じゃ大分話せるようになったんだ。あの日わたしに負けた人を除けば、ね」

「……フレイさんに負けたことが、そんなに悔しかったのでしょうか」

剣を弾き飛ばされ、フレイに負けた直後の護衛は確か表情を歪めていたように思う。毎日鍛錬に励んでいるようであるし、いとも容易くフレイに負けたことが、彼の中で自信を崩壊させてしまう程の出来事だったのかもしれない。

「そうかもしれないし——別の何かかもしれない」

「別の何か？」

「あくまで勘でしかないんだけどね、どうにもそれだけとは思えなくて、詳しく知ろうにも、話しかけてもろくに応えてくれないからどうにもならないんだよね……他の護衛仲間は最初の試合を引きずってるんだとしか思っていないみたいだし。まあ、気長に探ってはみるけど」

フレイが物憂げに息を吐いた。肘をついて手の甲に顎を乗せている姿にも関わらず、絵になるような美しさだ。

(あ、フレイさんに恋人がいるかいないか聞かないといけないんだっ)

それはフレイのことを気に掛けているパルジファルの少年に、リンから進言したこと。頬を赤く染めている少年の姿を微笑ましく思い、大した手間でもないと言ったのだ。

ネニックの方から頼まれたならともかく、以前のリンならば決してそんなことを口にしたりはしなかっただろう。色恋の話に興味はなく、自分から首をつっこむこともしたくはなかった。

なのにその言葉が出てきたのは、恋した相手に意中の存在がいるのかどうか気になる心理が、リンもよくわかるようになったから。

リンもまたネニックと同じように、ある人に恋情を抱いている。彼のことを思うと心が浮き足立ち、落ち着かなくなるのは、どうしようもないことなのだ。知りたいと思ってしまう心も止められない。

リンの救いは、シグルドに恋人の影が全く存在しないということだろうか。本人から直接聞いたわけではないからわからないが、ロードやダニエラから、女性に声をかけられても、持ち前の鈍さで幻滅されるらしいと聞いたことがある。フレイもシグルドにそんな相手がいるわけがないと断言していた。

シグルドの鈍さにやきもきすることもあれど、助けられている部分もあることも確かで、リンは何とも言えない気持ちになった。

フレイもまた、恋人の存在がいるようには思えない。だが、実際はどうか聞かなければわからないだろう。

(うーん……どうやって聞きだそうか)

問題はそこだ。聞きたがっている人物がネニックであるということのを隠しつつ、本題を切り出さなければならぬ。リンにそんな器用さはなかった。それに、好みの異性のタイプも聞くようにも頼まれてもいる。さて、どうしようか。

「フレイさん、不躰なことかと思いますが、一ついいでしょうか」

「うん？ どうしたの改まって」

「フレイさんには、恋人はいらっしゃいますか？」

「ぶっ」

紅茶を噴出しそうになったのを寸で堪えたフレイに、やはり突拍子もなかったかと謝罪を口にする。彼女はごぼごぼとむせながらも、気にするなと言わんばかりに手を軽く振った。

「げほっ……で、何で突然そんなことを知りたいと思ったのさ」

「えっと……名前は言えないのですが、とある人が知りたがってまして」

ネニックの名前を出さなければ問題なだろうと、ありのままを伝えることをリンは選んだ。察しのいいフレイのこと、相手が誰なのかわかってしまう可能性もあるが、ネニックの態度は明らかにわかりやすかったため、既にもう感づいているかもしれない。ならば今更わかったところで、大人な彼女は気付かないフリをしていてくれるだろう。

「なーるほどねえ……恋人と呼べる人はいないよ。残念ながら、生まれてから一度も出来たこともないね」

「……そうなんですか」

少々以外だった。フレイは確かに男性より女性に人気のある人ではあるが、男性から見ても彼女は美人だと映るだろう。実際ネニックがそうだったように。冷静で大人な雰囲気纏っているからこそ、そうした経験もあるのではないかと勝手に思っていた。

そしてもう一つ聞かなければならない、フレイの好み。こちらも変化球を加えるような言い方など思いつくはずもなく、口に出したのは直球な言葉。

「その人から、フレイさんの男性の好みを聞いてほしいとも頼まれたのですが、教えてくださいませんか？」

「……」

流石にこれは不躰だったか、フレイが押し黙った。藍色の瞳を軽く伏せた後、どこか遠くを見るような眼差しを横へと投げる。

「わたしの好みねえ……そんなもの、わたしが一番知りたいよ」

「はい？」

「いや、何でもない」

ボソリと呟かれた言葉は上手く聞き取れなかった。しかしフレイは何事もなかったかのようにニコリと笑う。先ほどのどこか哀愁を漂わせた雰囲気は既に霧散していた。そしてニヤリと口の端をつりあげる。

「その人にはこう返すといいよ。『フレイさんの好みを知りたかったら、直接聞きに行けばいい』ってね」

「あー……」

不敵な笑みと共に、もっともなことを言われて、今度はリンが視線を横へと投げる番だった。

確かにどうしても知りたいのなら、自分で直接聞くのが一番である。そして彼女は、ネニックに直接聞く勇気がないと判断した上で、そう答えたのだろう。つまり、フレイは彼の想いに応える気はないのだ。

「それじゃあ仕方がないですね。今度会ったときにそう言います」

ネニックには酷なことかもしれないが、フレイにその気がないのならば仕方が無い。次にいつ彼らと会えるかはわからないが、そのときはこの結果をそのまま伝えよう。変に希望を持たせたままではいいに違いない。

「さて、お茶も十分堪能したし、籠やカップを返しに行こうか」

「はい、そうですね」

空になった籠とティーポットをそれぞれ手に持ち、二人は部屋を出た。

がたごとと揺れる馬車の中、隣に座っている、どこか物憂げな眼差しを外へと向けている婦人を注視すぎないように目をやる。

視線を婦人から前方にいるローブを纏った青年に向けると、彼は一度肩を軽く跳ねさせた。また驚かせてしまったらしい。こちらをおどおどびくびくと見つめる様は、まるで己が悪人か何かになったかのよう。(……こんな臆病な人が行ってる研究って、一体何なんだろうねえ……)

フレイは心の中で嘆息すると、斜め前にいる表情を全く崩すことのない付き人の青年、ウィゼラに目をやった。彼の黒檀色の瞳は真っ直ぐ婦人に向けられているようで、その実どこを見ているというわけではない。出発してから誰も言の葉を紡がせることもないため、馬車の中は走る音が大きく耳に響いていた。

ピケットにもう一度会えたらという機会は、翌日あつという間に訪れた。何でも、これから彼の研究で必要だというものを離れた街まで買いつけに行くらしい。ならば何故わざわざ婦人が出向いているのかと言えば、それは滅多に市場に出回る品ではなく、婦人自らが出向かなくては買うことができない一品なのだそうだ。昨日、茶会を中止した理由はきっとこれだとフレイは確信する。

夕食のとき、リンのおまけで呼ばれたフレイは、ウィゼラから遠出することを聞かされた。日帰りが可能な距離ではあるが、その間護衛として婦人と行動を共にするようにと。当然断る権利も理由もなく、フレイは素直に返事をする。

ちらりと婦人の様子を見れば、彼女はやはりじっとリンを見つめていた。しかしいつもの恍惚の眼差しではなく、どこか残念そうな顔をしている。茶会で別れたときと同じように。

「ねえ、やっぱりレンも連れていっては駄目かしら？」

「申し訳ありませんが奥様、奥様の乗る馬車は四人乗りで、わたくしとピケットと護衛のレイで丁度満員です。彼の乗るスペースはありません」

「そう……やっぱり駄目なのね……」

どうやら婦人は、買い出しにリンを連れ出せないことに対して、酷く落ち込んでいるようであった。(連れて行きたかった……ってことは、その間リンが狙われるってことはないか)

その日一日リンから離れることに若干の不安はあるが、連れていきがっていた様子から察するに、リンの身柄を拘束する算段を立ててはいないだろう。

ウィゼラは何を考えているのか読めない所があるが、婦人は商人らしさのかけらもなく、駆け引きを得意としているようにも見えないどころか、己の感情に正直だ。これならばリンの身を案じる必要はないだろう。その日に帰ってこれられるというのならば、屋敷の探索時間を削られるということもない。

がたごとと揺れる馬車は、一般のものと違って振動があまり座席に響かない造りになっているらしく、座り心地はなかなかのもの。同乗者が気の会う人たちであったなら、さぞ楽しい旅路だったに違いない。しかしこんな沈黙が続くのでは、その座り心地のよさも無用のもののように思える。

(ウィゼラさんの目と耳があるうちは、余計なことを口に出さない方がいいな……)

護衛であるフレイに、場を盛り上げようとする話題を提供する必要などなく、誰もしゃべらない以上同じく無言を貫いている。できれば他の護衛仲間と同じように、馬車の外の守りにつきたかったが、彼らの中で一番実力があると抜擢されてしまった以上、それは叶わない。一番強い者が婦人の守りにつくのは必然である。こうなるのであれば、少し手を抜けばよかったかと今更なことを思った。

(それにしても……リンにあんなことを聞かれるなんて思わなかったな……)

昨日、自室で婦人に貰った菓子を二人で楽しんでいたときのこと。突然真顔で恋人はいるのかと聞かれ

たのには驚いた。その手の色恋の話は多少の揶揄が混じるものだろうに、彼女は至極真面目に聞いてくる。そのギャップのせいもあって、飲んでいた紅茶を嘔き出しかけた。からかってくるような聞き方だったならば適当な返事をしただろうが、理由を聞いてああと納得する。

リンの言うところとは、事情から察するにパルジファルから派遣された新米であるネニックのことだろう。彼はフレイのことを、熱の籠った目で見ていたからすぐにわかる。

ネニックが直接聞きに来たのなら、恋人がいるフリでもしただろうが、リン相手ではそうはいかない。それに、リンがこんなことをわざわざ聞くのも、自分がシグルドに好意を抱いていることもあって、ネニックのことを他人事のように思えなかったからだろう。

リンは本当に人がいい。そこは義兄であるレニィを彷彿とさせた。彼は大雑把なところはあれど、根っこの所はリンと同じくお人よしだ。困っている人を放っておくことができない。犬猿の仲と言われるパルジファルの依頼を受けていることから、それが伺える。

(人のことを心配してる場合じゃあなかろうに……まあ、あの脳筋バカに恋人が出来るとも思えないから、のんびりしてても問題ないだろうけど)

リンが想いを寄せているシグルドは、色恋の話にとことん疎い鈍感王だ。

彼との出会いはフレイがガルデア支部に入団したときのこと。フレイよりも数週間先に入団していたシグルドとは、同期なのもあってか討伐の依頼などで行動を共にすることも多かった。

背中を預ければ、これほど心強い相手もなかなかいない。だが日常生活では、細かい作業は不得手、買出しを頼めば何かしら買い忘れをする、伝言する内容を間違えていたなどなど、抜けているところが多い。後から入団したフレイがそのフォローをした回数は数知れず。

今では流石にそんなことはなくなったが、嬉々として体を動かすところと、色恋に疎いところは全く変わってはいない。

フレイはリンの首に下がっている首飾りを思い出す。

あれは四年ほど前、シグルドと共にあるディーラーの護衛の依頼を請け負ったときのこと。恰幅と気前のいいディーラーは快活なシグルドをいたく気に入って、道中彼のことをとても気にかけていた。簡単に言えば、共に行動しているフレイを恋人なのかと勘違いしたのだ。何とも失礼な話である。当然二人揃って否定した。こいつは絶対ありえないと。

そんなシグルドに、彼はフレイに気付かれないようこっそりとあるものを渡していた。気になる子ができたら、それを渡すといいと耳打ちされながら。あまり離れた距離ではなかったために全てが聞こえていたフレイは脱力したい気分だった。隠すなら、もう少し上手く隠してくれと。

そして肝心のシグルドは渡されたものの意図を全く理解せず、『特別な報酬』として貰ったのだと思いきみ、依頼達成後いらぬからやると手渡された。お節介なディーラーの言っていたことを聞いていたフレイは、その首飾りを受け取る気にはなれず、自分もいらぬから、他の誰かにあげるなり売るなりするといふに止める。なかなか凝った造りをした首飾りであるから、売ればそこそこの値がつくだろう。だからきっとシグルドはこの首飾りを売るかして処分したのだとずっと思っていた。リンと会うまでは。

新人として紹介されたリンと挨拶を交わした後、どこか既視感のある首飾りを下げていて、思わず首をひねった。どうしたのかと彼女に問われ、思わずその首飾りが少し気になったと言えば、彼女は白い頬を突如真っ赤に染めて、俯いた。そしてポツポツと詳細を語ってくれる。

なんでも、シグルドが四年前に姉を亡くして泣いていた自分にくれたものだと。それが姉の死を乗り越えるきっかけになったため、とても感謝しているとも。真っ赤な表情は、シグルドに感謝以上の気持ちを抱いていると示すには十分だった。そして、処分したのだとばかり思って忘却していた記憶が蘇る。

(す、捨てたんじゃなかったのか……こうなるんだったら、始めから捨てるか売るか強く言うておくべき

だった……！)

そのせいで、可愛い後輩がすっかり誑かされてしまった。首飾りを渡した本人に全くその気がないことが、余計に腹立たしい。

シグルドがリンに首飾りを渡した詳しい経緯はわからないが、シグルドは絶対深い意味など考えてはいないと断言できる。嵌め込まれたガラス玉と同じ色彩の瞳を持つ彼女に、その首飾りがとてもよく似合っているのが、また何とも言えない気持ちを掻き立てる。

フレイはシグルドの鈍さに泣きを見た女性たちを、何人も見ているのだ。新たに入ったリンにも、同じように傷ついてほしくはない。しかしフレイに出来ることといえば、傷が浅いうちに目が覚めることを祈るだけだろう。恋愛感情というものは、他人がとやかくいってどうにかなることではないと、身をもって知っている。

しかし今回ばかりはそれが杞憂で済みそうであると、フレイは思った。何故ならあの気遣いやデリカシーと無縁の男が、リンに対してはそれとなく気に掛けているのだ。それに、顔を合わせる度に頭を撫でたり、肩に触れたり。他の女性に対してはそんな風に触れることなどないにも関わらず。本人は絶対無自覚なのだろうが。

(リンが告白すれば状況は変わるだろうけど……それはそれでシグルドに都合がよすぎて腹が立つな)

そんな事実があるからこそ、フレイはリンに想いを告げてはどうだと進言してみたのだ。無責任に言ったわけでも、からかうつもりで言ったわけでもない。流石の脳みそ筋肉バカも、真正面から伝えられた想いに気付かないなんてことはないだろう。

だが、今のリンにその気持ち的余裕はないようである。間髪を入れずに無理だと返ってきた言葉は、とても必死なものだった。思えば、リンにそんな度胸があれば、とっくに想いを告げているだろう。行動力は元々ある子なのだから。

(うーん、やっぱり様子見が一番だね。……まあ、わたしも人のことを心配している場合じゃないのは一緒だし)

周りに聞こえない程度に軽く息を吐きながら、脳裏に浮かぶのはある人物の姿。

どうして彼に惹かれてしまったのか、正直今になっても全くわからない。好みだからかと問われたら、迷わず首を横に振る。確かに彼は端整な顔立ちをしているし、過去見惚れたことは何度もあるけれど、それだけが原因とは思えない。性格か、と言われてもしっくりこない。ならば雰囲気だろうか。否、やはりそれも違う。

(でも……この気持ちはきっと『好き』なんだろうな。鈍いのは論外だけど、分け隔てなく優しいっていうのも考え物だよな……)

そう、彼は全ての女性に平等に優しい。本人が女好きを公言しているのもあるが、女性陣に対し常に気を配り、些細な体調の変化にもよく気付く。今日も可愛いやら綺麗やら、褒め言葉なんてすらすらと口から出て、街で困ってる女性を見かけたら必ず手を差し伸べるし、それは支部の女性たちに対しても同じだ。

彼らしいと思うときもあれば、苛立ちを覚えるときもある。自分だけにそれを向けてほしいと浅ましい願望を抱いたりもした。

その度に何故彼に惹かれてしまったのか悩み、彼に惹かれた理由を考えては首を振る。そして残るのは、彼のことが好きだという事実だけ。

(リンよりもわたしの問題の方が深刻だ……あの人は、わたしのことをどう思っているのやら)

彼との付き合いもそこそこ長いものとなったが、彼が特定の女性と深い仲になったという話を、フレイは一度も聞いたことが無い。初めはそれに安堵していたが、次第におかしいと思うようになった。そして、彼の行動を振り返って、ある核心を得る。

彼は女性を誉めそやす言葉は多々口にするし、からかい混じりに顔を覗きこんできたり軽く触れたりしてくることはあれど、本気で口説き落とそうとする所は一度も見たことがなかった。女好きを公言しているにも関わらず。

彼は特定の女性と恋仲になるつもりがない。それがフレイが導き出した結論だった。その理由までは流石にわからないが、彼の行動から推測するに、決して間違っていないだろう。

(……それでもおおよその検討はつくけどね。あの人の過去を思えば)

彼があのような口調をしている理由も、きっとそこに理由がある。ガルデア支部で再会する以前の彼は、普通に男性のしゃべり方をしていたのだから。

備え付けられた窓に視線を移すと、少し離れた位置に、壁で覆われた区画が見える。街だ。漸く辿り着くのだろう。特に凶暴な魔物に襲われるという事態も起きず、実に退屈な馬車の旅であった。大きく伸びをしたいのを堪え、心の中で安堵するに止める。

門の前で一度止まり、そして街の中へと進入する。街についてもまだ目的地は随分と離れているらしく、そのまま馬車に乗ったまま街の中を移動した。まだ解放されないのかと思わず口元を歪めたくなる。

いつ着くかわからないためにこれ以上は思考に耽ることもできず、早くつけと頭の中で呟き続けた。とりあえず早く手足を伸ばしたい。退屈極まりなかった。

「――奥様、そろそろ見えてきました」

「あら、本当？」

ウィゼラが口にしてから少しして、馬車は減速し始めやがてピタリと動きを止める。颯爽とウィゼラは馬車から降り、婦人に向かって手を差し出した。婦人はウィゼラの手に自分の手を置いて、ゆっくりと馬車から降りていく。やっとかと小さく嘆息した後、フレイも立ち上がる。婦人に続いて降りようとして、馬車の中にはもう一人乗っていたことを思いだした。前方に座ってはいたが、同じく無言を貫いていたためほとんど存在感がなく、忘れていた。

「ピケットさん、先に失礼します」

「え、あ、はい！ どうぞ！」

彼よりも先に降りてはまずかっただろうかと声をかけるが、彼は別段それを気にした風はなく、いつもの通りおどおどとしている。これならば問題あるまいと、フレイはそのまま馬車を降りる。外の空気が妙に新鮮に思えた。

「ピケット、何をしているの、早く降りてらっしゃい。貴方がいないと魔石の良し悪しがわからないじゃない」

「は、はい！ た、ただいま！」

(魔石……？ 目的の物って魔石だったんだ)

魔石とは、鉱山などで発掘される鉱魔石から不純物を取り除き、魔力が帯びている部分のみを残した石のことを差す。主な利用法は結界装置(シルトアプラテス)の燃料だ。大粒のものは術士の魔術の威力を引き上げるため、杖として取り付けられたりもする。加工がしやすい大きさのものは、剣などの武器に埋め込み、特殊な効果を発揮させる魔剣を編み出したり、研究用に使われることも多い。

ピケットが何を研究しているのかは知らないが、研究に魔石が必要となるのは特になんの不思議もないことだ。魔石は魔術に関して様々なことに利用される。値段の程はピンからキリまであり、魔力の含有量が多ければ多いほど高い。大きさは無関係であり、小さな粒でも莫大な魔力を秘めていることもあれば、大きいが大して魔力が含まれていないものもある。一般的に安く売られている杖に使われているのは、そういった魔石ばかりだ。

金に糸目をつけない婦人が金を出すのであれば、魔力含有量が多いに越したことはないだろう。

(うーん、何の研究をしてるか検討がつけばいいなーとか思ったけど、手がかりとなりそうなものはないな)

魔石の用途は多種多様。更に研究用というのならば尚更だ。

(それにしても……個人が魔石を購入するなんて、本当に凄まじい財の持ち主だなあ、婦人は)

魔石は基本的に研究所や魔剣を製作する武器工房など、纏まった団体に対して売られるものである。魔石は貴重品であることから、流通ルートは極端に制限されており、個人で入手するには相当なコネと大金が必要とされる。商業連盟(コンマースユニオン)の上層部で夫が働いていた婦人ならば、両方合わせもっているだろう。

「レイ、貴女は常に奥様の傍に控えていて下さい。もしものことがないようにお願いします」

「はい、もちろんです」

ウィゼラの言葉に頷き、レイは婦人の斜め後ろへと立った。婦人直属の護衛として抜擢されたからには、全うするつもりはある。特定の人物に狙われているというわけではなさそうだが、恐喝目的など、襲われる可能性はいくらでもあるのだ。

ウィゼラが馬車に積んであった荷から、ケースを下ろした。それを残りの護衛仲間に持たせる。そしてほぼ同時に、目的地である建物から一人の男性がやってきた。婦人の存在に気付くと、彼は両手を重ね合わせながら、にこにこ満面の笑みを浮かべた。

「ウィッキテルスト婦人、ようこそ！ 本日は遥々おいで下さり、まことに嬉しく……」

「挨拶はいいから、早く魔石を見せてちょうだい」

「おっと、失礼いたしました。ご案内いたします」

彼が今回の取引相手らしい。適度に着飾った風貌と人好きのするような笑顔は、正しく一般的な商人そのものである。急かす婦人の言葉に機嫌を悪くすることもなく、付き添いであるフレイたちにもまた、愛想のいい笑みを浮かべていた。

「それではこちらでお待ちくださいませ。すぐにお持ちいたしますので」

通された客室の豪華な椅子に、婦人が堂々と腰をかけた。元々金持ちのみを相手にしている商人なのか、客室に置かれている調度品の数々はパッと見ただけでも豪華だった。敷かれた白い絨毯はシミ一つなく、テーブルや椅子の縁は金色に輝いている。ピケットが落ち着きなく部屋の中をきょろきょろと見回していた。恐らく高価な雰囲気気圧に気圧されたのだろう。一方、付き人のウィゼラといえば、やはり動じた様子はなく、背筋を伸ばしたまま直立不動でまっすぐ前を向いている。両極端な反応は、見ている分には少し面白いかもしれない。

フレイ以外の護衛たちは、ウィゼラに持たされたケースを置いたあと、一礼して部屋を出て行った。彼らは外から邪魔物が侵入してこないよう、見張りを勤めるらしい。彼らに会釈をすれば向こうからも同じように返ってくるが、やはりいつもの一人はフレイに一瞥もくれることなく退出する。

「大変お待たせいたしました。こちらが品物でございます」

少しした後、商人の男が横幅の広い箱を持ってくる。テーブルの上に置くと、そこには色形が様々な美しい石が入れられていた。

(うっわー……これ全部魔石だ)

ある程度魔術を嗜んでいるものならば、石が帯びている魔力を感じることができるだろう。全ての石が相当な魔力を含んでおり、箱から妙な威圧感を感じた。

「今回の魔石も素敵ね……惚れ惚れしてしまうわ」

「ありがとうございます、奥様」

綺麗なものが好きな婦人らしく、箱の中の色様々な魔石をうっとり見つめた。フレイも帯びている魔力の圧力がなければ、綺麗だなあと純粋に感動できたかもしれない。

「ピケット、判断して下さい」

「は、はひ……！」

ウィゼラに促され、ピケットはビクビクと怯えながらテーブルに近づいた。そして魔石の一つ一つに向かって手を伸ばしていく。

(ああ成る程。だからピケットさんが呼ばれたわけか)

魔石の魔力含有量を確認するには、直接触れるのが一番である。特に魔術に精通している者が触れば、より具体的な含有量を感じとることができる。安い買い物ではないため、ピケットに秘めている魔力がどれほどのものか調べさせ、紛い物や魔力があまり含まれていないものを避けようとしているのだろう。

(少し離れたところでも圧力感じてるってことは、相当魔力が含まれてるって考えていいな)

魔術を専門としていないフレイでさえも魔力を感じるということは、含まれた魔力が多いことを示している。商人の男の方を見遣ると、彼はにこにここと、視線を婦人から外すことがない。

「す、素晴らしい……！ 全てに膨大な魔力が詰まっている……！」

ピケットから感嘆の声が上がった。いつもおどおどしている姿とは思えないほど、キラキラと熱の籠った眼差しを魔石に注いでいる。

「全部いいもののようね」

「貴女様との取引で、粗悪品を扱うわけには参りませんからね。こちらでも質が高いものを厳選いたしました」

商人の男は口調は静々としていたが、視線にはしっかりと得意気な色が浮かんでいる。己が扱っている商品に自信があるからこそその表情だ。

これだけの魔石なのだから、値段は気が遠くなるようなものとなるだろう。婦人はウィゼラを促し、護衛たちが持ってきたケースをテーブルの上に開かせる。その中に入っていたものを見て、フレイは思わずぎょっと瞠目した。

そのケースには大量の金塊が入れられていた。数本、なんて数ではない。幾本もの太くずしりとした金塊が、ケースを埋めつくしている。これだけの金塊があれば、大勢の人間が数年は食うに困らないであろう。

婦人やウィゼラだけでなく、商人の男もまたその金塊を見ても動じることはなかった。むしろ商人の男は冷静に本数を確認、提示した通りの額ですと満面の笑みを浮かべる。

(ウィッキテルスト婦人の旦那さんは、どれだけ稼いでたんだ……)

同じくぎょっとしているであろうと思われたピケットは、魔石に夢中で商人に渡された金塊の存在に気付いていない。この中で一般的な感覚を持っているのは、フレイだけのようだ。

(……早く帰りたいな)

金持ちの感覚についていけなくなったフレイは、進行される取引を直視することなく、できるだけ視界に入れないよう務めた。

(流石にそう何度もお使いを任せてもらえないか……)

婦人がほぼ丸一日いないと聞いてまた抜け出せるだろうかと思ったが、今日は買出しはいいから、庭の草むしりを手伝ってくれと言われた。強く願って不審がられるわけにはいかないと素直に頷き、リンは屋敷の中と同じく広い庭の一角で、黙々と草をとっている。強い日差しが注がれ、額から汗が伝い落ち、腕で拭った。

「レンー、ちゃんと水分補給するのよー？　ここにお水置いておくからね」

「あ、はい。ありがとうございます」

使用人の女性が、庭に設置されているテーブルに水差しを置いた。熱い日の水分補給は大事である。リンは一度作業の手を止め、水差しの所へ向かった。グラスに水を注ぎ、ゆっくりと飲み干していく。

(冷たくて美味しい……)

冷えているだけでなく、ほのかな果実の甘さが加えられていた。スッキリとした味わいのある甘さに、人心地つく。

(よし、がんばろう)

気力が大幅に回復したリンは、草取りを再開する。小さく取り易いものから、太く根の張ったものまで、一つ一つ丁寧に抜いていく。そのせいでスピードは遅かったかもしれないが、リンのいた一角は大分綺麗になっただろう。

ある程度草が溜まったら、大きな紙袋へと詰めた。後で纏めて火にかけて燃やすらしい。それならばその場でリンが炎の魔術で燃やしてしまった方が早いかもしれないが、今のリンはフレイの被保護者だ。できる限り、無力な少年であると思われた方がいいということで、術を使うことは禁止されている。

「あら、大分綺麗になったじゃない。小さいのに、よく働くねえレンは」

「お世話になっている身ですから」

寝床や食事を無償で提供してもらうことに対して抵抗があるのも確かだが、何もせず日がなぼ一っとしているのも憚られた。実際、こうして仕事を手伝うこと以外にやることがない。屋敷の手伝いはいい暇つぶしでもあった。

「これから皆で休憩してお茶にするんだけど、レンもどう？」

「お茶……お菓子はありますか？」

「——もちろんあるわよ」

使用人の女性がニヤリと不敵に笑った。抜かりは無い、とその顔が語っている。

「まあ、奥様専属のパティシエが作った菓子に比べたら、当然味は劣るけどね。でもトレイディアでそこそこ有名な焼き菓子だから、美味しいのは間違いないよ」

「それは楽しみです。是非参加させて下さい」

甘いものがあるというのなら、参加しない理由はない。それに、婦人の熱視線を受けずに済むのだから、菓子の味をじっくり堪能することもできる。

使用人の女性に案内され、彼女たちがいつも休憩室として利用しているという部屋へと赴いた。

「あら、レンじゃない」

「せっかくだから、レンも誘っちゃった」

「いいわね。こんなときでもない誘えないだろうし」

こんなとき、というのは、婦人が留守にしていることを指していると考えていいだろうか。既に屋敷中

にリンが婦人のお気に入りだと広まっている。毎日茶会に呼び、食事を共にしているのだから、知られていないことの方がおかしいだろう。そんなリンを、婦人を差し置いて自分たちが誘うことに抵抗があったのかもしれない。

(この屋敷では、婦人の言葉が絶対なんだろうな……)

屋敷に身を置いてから数日間、婦人に対する悪態や雑言を聞いたことがなかった。それは彼女を心から尊敬しているからというよりも、恐れからくるものではないかとリンは推測する。事実、留守を預かる使用人たちの顔はいつになく朗らかだ。

(婦人は見るからに自分の気持ちに正直だ。そんな彼女の機嫌を損ねれば、きっとその時点で解雇されてしまうからかもしれないな……)

不況を買うことを恐れてばかりでは仕事にならないだろうが、誰しもクビにされるのは嫌なもの。婦人の外出は、そういった緊張感から解放される唯一の時間なのだろう。

「うわぁ……美味しそうです」

テーブルの上には、たくさんの焼き菓子が広がっていた。大きい皿が三つほど並び、その全てにたくさんの焼き菓子が乗せられている。

「さあ、人数も揃ったし始めましょうか」

リンは席に座ると、置かれていたカップに紅茶が注がれた。ほかほかと立ち上る湯気から、仄かな甘みのある香りがする。

「アップルティーよ。飲んだことある？」

「いえ、初めてです」

リンはあまり嗜好品をよく知らない。姉と二人で暮らしていたときは生活するだけでも一苦労したため、嗜好品を買う余裕などなかったのだ。

そんなリンが甘いものを知ったのは、レニィがきっかけだった。恋人であるキキョウに会いに来るとき、差し入れとしてよくあるものを持ってきてくれた。それがケーキなのである。彼はリンを遥かに越える甘いもの好きで、持ってくるケーキは三人で食べるには明らかに多い、ワンホールのものばかりだった。だが、差し入れのケーキはレニィが帰る頃には、必ずなくなっている。リンとキキョウの二人で全体の三分の一ほどを、そして残す三分の二を、レニィが一人で完食していたからだ。

甘いものが好きなリンでも、流石にホールケーキの大半を食べるのには無理がある。しかしレニィは、その気になればホール丸ごと全部食べられるというのだから恐ろしい。それを知ったキキョウはドン引きしていた。

レニィのように一度にたくさんは食べられずとも、甘いものは好きだ。だから、ケーキという存在を教えてくれたレニィにはとても感謝している。

和気藹々と、茶会が始まった。用意された焼き菓子は種類が様々で、どれを食べても美味しい。次は何を食べようか、あれもこれもいいなと迷ってしまう。使用人の女性たちは遠慮しなくていいと、リンの小皿にあれこれ置いてくれた。アップルティーからも甘い匂いが漂い、香りを楽しませてくれる。

「そういえば、レンは今までずっとお姉さんのレイと各地を旅していたのよね？ どうして奥様に雇ってもらおうと思ったの？」

会話に花を咲かせ、話題はいつの間にかリンのことへと変わっていた。これはいつか聞かれるかもしれないからと、フレイと相談して決めてある。

「幼い頃から姉さまと各地を回っていたのですが、やはりまだ子供である僕を連れた旅は大変でした。姉さまだけでなく、僕のことまで置いて下さるような懐深い方をずっと探していて、漸く奥様に出会ったんです」

既に大人の女性であるフレイだけならともかく、少年として見ると十代前半にしか見えないリンまで置いてくれる、というような好条件を満たす人物は少ないと思われる。だからこそ婦人を選んだのだと、自然な風に見せることができるだろう。

「苦勞してきたのね……ほら、これも食べるといいわ。まだまだあるからね」

「お茶、もう一杯飲む？ おかわり淹れるわよ」

「あ、ありがとうございます」

使用人の女性たちが、空になった皿に菓子を置き、カップに茶を注ぐ。どうやら彼女たちの同情心を買ってしまったらしい。それでも菓子は食べたいため、彼女たちの厚意に素直にあやかる。

そこでふと、リンはあることを思いついた。こうしてリンに彼女たちの注意が向けられていることと、婦人がこの場にいないこと。この二つが揃うことはなかなかないだろう。リンは務めて自然な風を装って、『苦笑』してみせた。

「僕は姉さまとなら、ずっと旅を続けていてもよかったんですけどね。でもここ最近、近辺の街で僕と同年くらいの男の子たちが行方不明になったって聞いて心配してくれて。根なし草の旅よりも、どこかに身を寄せた方が安全だろうって」

少し危険な賭けかもしれないが、この言葉に彼女たちがどう反応するか知りたかった。婦人が少年たちを攫っていることを、知っているか否かを判断するために。これを知ることが大事なことである。そして聞くのは今しかない。

「そういえば、そんな噂聞いたわね……なんでも、美少年ばかりが続けて失踪してるって」

「え、何それ。あたし知らない」

「わたしは前にお使いで、別の街に行ったとき聞いたことあるわ。……確かにレイが心配するのもわかるわね」

笑みを絶やさないう、しかし彼女たちの言動を見逃さないよう注意深く観察する。数人は失踪事件のことを知っていたが、それに婦人が関わっているとは思っていないような態度であった。中には、事件自体を知らない人もいた。むしろ、知らない人間の方が多いかもしれない。トレイディアの街では失踪事件は起きてはならず、全て他の街のできごとである。リンもシェードから聞いて初めて知ったように、他の街の情報を耳にすること自体、なかなかないものだ。

そして全員が全員、自然体でリンの言葉を軽く流すようなことはありえないため、彼女たちは婦人の行動を全く知らないとみていいだろう。

(つまり、大半の使用人たちはこの件について無関係……婦人がたった一人で全ての犯行を実行するのは無理だから、確実に協力者はいるだろうけど……一番怪しいのは、やっぱりあのウィゼラさんって人だな)

にこにこ笑いながらも、頭の中では状況を整理していく。フレイを見ているうちに、リンもまた演技力が身につけてきたのかもしれない。

その後は特に話題を持続させることもなく、他愛ない会話に花を咲かせた。一番話題にあがるのは、やはりというか婦人のことである。彼女のことを悪くいうのではなく、彼女のように金持ちと結婚して優雅な暮らしをしたいという、願望の吐露だ。それらについては彼女たちもリンに返答を求めることはなかったのも、相槌を打ち続けるに止めた。

(フレイさんは何か情報が掴めたかな……)

婦人の護衛として、共に馬車へと乗っているフレイのことが気になった。目的地である街までの道のりに湧き出る魔物はDランクまたはCランクであるため、道中に何か起きるという事態はほとんどないだろう。身の安全を心配する必要はない。

リンが知りたいのは、婦人が買おうとしている物である。出掛ける前、リンはピケットの行っている研

究に必要だという話しか聞いておらず、それがどんなものなのか、具体的には聞いていないのだ。

(何を買ったかわかったら、少しは進展するかな……)

淡い期待を抱きながら、リンは小皿の上に乗せられた焼き菓子を口の中へと放り込む。甘く幸せな味に舌鼓を打ちながら、未だに続く茶会の光景を眺めた。

いいものが揃った。婦人が購入した色とりどりの魔石を再び眺める。

大きさこそ最大でも掌で覆えるほどしかないが、その分中には膨大な魔力が秘められている。これだけあれば、暫く実験をするに困らないだろう。

(潤沢な資金に満足していく環境。こんなに研究に専念できる環境はそうそうない……！)

宛がわれた研究室で、同じく婦人を買ってもらった魔力計算機に、魔石を入れた。計算機が導き出した数字を紙にメモをとり、そしてまた別の魔石の魔力含有量を測っていく。

(ああ……！ やっぱりすごい！ これだけあれば、余裕で二桁は実験をすることができる……！)

己が極めようとしている研究は一応成功を収めてはいるが、まだまだ無駄に魔力を食うばかりで、改良が必須である。しかしこれだけの魔石があれば、僅かな魔力でも成功に導けるようになるかもしれない。

わくわくと胸が高鳴った。己が最も生き生きとするのは、やはりこうした研究をしているときののだと実感する。

ウィッキテルスト婦人には本当に感謝をしている。彼女のおかげで己の研究は進んだだけでなく、完成が見え始めたのだ。

(魔石から計算機……更に実験体(……)まで提供してくれるんだから、婦人には頭があがらないな……)

何から何までいたせりつくせり。こんな環境は、魔術開発の最大手であるオリフィールのスペレーでも不可能であろう。かの魔術開発都市は魔石の集まりは随一であろうが、婦人のように実験体までは提供してくれないのだ。こうして今、十分な魔石が己の手にある以上、かつて異端として追い出されてしまった過去など、どうでもいいことのように思える。

コンコン。

突如、研究室の扉がノックされた。思わずビクリと肩が震える。

ここを訪れる人間は、たった二人しかいない。研究を支援してくれている婦人本人と、己が婦人と知り合うきっかけを作ってくれた、もう一人の恩人――

「私です。入りますがいいですか？」

「ど、どどど、どうぞ」

案の定、入ってきたのは恩ある婦人の付き人の青年だった。彼が己を見出してくれなければ、今の環境は手に入らなかったであろう。感謝していると同時に、とても恐れ多いことだとも思っている。元々他人と言葉を交わすことを苦手としているため、つい声がどもりがちになってしまうことを申し訳なく思う。

「どうです？ 実験を行えるだけの魔力はありましたか？」

「じゅ、十分なほど、あ、あります……！ 奥様のおかげです……！」

これだけあれば、暫く魔石は必要ないことを説明する。すると彼は口の端をつりあげ、僅かに瞳を細めた。

「それならば、奥様にいい報告ができそうです。――近々実験体をまた一人提供しますので、そのおつもりで」

「ほ、本当ですか！ た、助かります！」

彼らには本当に世話になりっぱなしである。ただただ感謝の言葉を青年に伝えた。

本当に己はとても恵まれている。早いうちに実験の目処まで立ってしまった。これでまた、己の研究が更に進むだろう。

「いえ、こちらと貴方の利害が一致したまでです。貴方の実験の成功こそが、奥様が求めていることですから」

「あ、ありがとうございます！」

利害の一致。素晴らしい言葉だ。彼が研究室を去った後も、じんわりと胸にその言葉が広がっていく。

「よし、次はもっと効率のいい魔力変換式を……」

彼らのためにも自分のためにも、更なる進展を目指し、早速研究に乗り出す。

一度没頭してしまえば、彼の頭にあるのは己の研究のことのみだ。

扉をノックすると、どうぞと既に聞き慣れてしまった声が入室を促した。扉を開けた後、胸に手を当て、恭しく室内にいる主に向かって頭を下げる。

「ピケットの様子はどうだった？」

まるで年若い女性のように、純粋にキラキラと瞳を輝かせる姿は、一見無邪気なように見えるだろう。だが、実際は己の欲望に忠実であるだけの、本能の塊。

「ええ、奥様が買い与えた物のおかげで、実験をするのに十分な魔力があるそうです」

ニコリと微笑みながら、婦人が最も望んでいるであろう言葉を紡いだ。

「本当……！ やったわ、これでまた実験ができるのね……！」

嬉々として喜ぶ姿は、老齢の女性とは思えないものである。生前のウィッキテルスト夫君は、婦人の変わらない無邪気な姿に惹かれていたらしいが、今彼女が楽しみにしていることを知ったら、どう思うだろうか。

(無邪気とは時に恐ろしいものですわね……)

夫君が生きていたときは、流石の婦人も夫に多少遠慮することはあっただろう。このように、己の欲望が赴くままに財を使ったりはしなかったはずだ。今のような使い方をしていたならば、とてもではないが財産が溜まるわけがない。ブレーキ役を失い、更に莫大な金が残されているのであれば、それを湯水のごとく使うことに何の遠慮があるだろうか。ある意味夫君の死が、婦人の暴走を招いたとも言えるかもしれない。

「次の被験者はどうなさいますか？」

わざわざこんなことを告げずとも、相手は最早決まっているようなものだ。わかっている、あえて婦人に問いかける。

「もちろん、『あの子』に決まってるじゃないの！」

「——はい、承知いたしました」

興奮気味にカッと開かれた瞳には、熱が多量に籠っている。あの少年がその眼差しを怖がっていることは知っているが、己自身に向けられているものではないため、特に何とも思いはしない。

「あ、そうだわ、『彼』にも話をしておいてちょうだい。このことを知ってるの、ウィゼラとピケットを除けば彼しかいないでしょう？ 彼に服装選びを手伝ってもらいたいのよ」

「了解しました」

今まで『実験体』を集めるために、『彼』の力を借りていた。少年の姉が来るまでは彼が一番の腕利きで、周囲の目を盗びながらことを運んでくれていたのだ。しかし、今回に限っては彼の力を借りるわけにはいかないだろう。

「ところで、『彼女』の処遇はどうしいたしましょう？ 大事な弟君がいなくなれば、じっとしてはいないと思えますが」

あの少年が次の被験者であることは、大分前から決まっていたこと。だが、問題なのは彼の姉。他の街から無理やり攫うならば、家族の意思などあってないようなもの。しかし、彼女は無視することのできない存在だ。もしもこのことが知られてしまえば、怒り狂うであろうことは目に見えている。知らずにいても、大事な弟がいなくなったとあらば、探すために護衛を辞めるだろう。どちらにせよ、婦人の下から離れるであろうことは変わらない。

「あの子は別にどうなってもいいわ。元々護衛は足りていたのだし、あの子がいなくなっても特に不都合はないもの」

「――畏まりました。それではこちらでどうか致します」

婦人にとって、彼女の強さなどどうでもいいことらしい。こちらにとっては好都合だ。欲しかった言質を得て、婦人に向けて頭を下げる。

彼女は腕が立つ。ウィゼラが立ち会った試合で、一番腕利きの護衛を息を乱すことなく勝利を手にした姿は記憶に新しい。更に言うならば、彼女はあのときの試合で実力の全てを出し切っていないだろう。余力を十分に残して護衛を制した。見過ごすことなどできない腕前。彼女の相手をするのに、あの護衛では明らかに力不足だ。

(強者と対峙しなければならなくなる状況を、一応は考えておくべきでしたね。彼ら(・・・)の中にも、彼女と渡り合えるものはいないでしょうし。彼女に中途半端な策略は無意味……始末するにしても、一筋縄ではいかない相手ですね)

下手を打てば、逆にこちらが返り討ちを食らうだけだ。慎重に物事を運ぶ必要がある。(……ああ、わざわざ彼女と対峙する必要はありませんね。大事なのはあくまで『あの少年』を誰にも怪しまれずに実験体にする事なのだから)

彼女がすぐさま駆けつけることができない場所にまで、少年を引き離す。これならば彼女と戦うことなく彼を手中に収めることができるだろう。

(感づかれないようにするには……やはり『彼』にも手伝ってもらいましょうか。足止め程度には役に立つでしょう)

確実に少年の元に彼女が駆けつけないよう、『彼』には役に立ってもらわなければならない。元々彼は婦人のしていたことに難色を示していたが、既に五回も力を貸したのだ。今回もまた否やを言うことはないだろう。

(さて、彼ら(・・・)にも協力を仰ぐとしましょうか。戦力にこそならずとも、痕跡を残すことなくあの少年を攫うには、彼らが最も適任です)

元々、あの少年に対して婦人が何か問題を起こしたと勘繰られないよう、常に婦人の傍近くに置いておくようなことは避け、他の使用人と同じ仕事を与えてきた。その中の一つに、彼が一人で屋敷を離れるものがある。それを利用しない手は無い。

これで少年がいなくなった場合、周囲の人間から婦人に疑いが向かずに済む。婦人の視線を怖がっていたことを知っているであろう姉は疑うかもしれないが、確証は得られないはずだ。

彼が婦人のお気に入りであることは周知の事実ではあるが、彼のことを熱い眼差しでもって見つめているのを知っている人物は、極端に限られている。こちらはいくらでも白を切れるのだ。

「それでは彼を誘い出すための策を実行すべく、今から行動に移そうと思いますので失礼いたします」

「ええ、頼んだわウィゼラ」

己に向ける婦人の表情は、屈託のない満面の笑み。そこに罪悪感や後ろめたさなど微塵もなく、ただ純粹にこれからのことを喜んでいるだけ。

「ああ……ついにあの子にも永遠(・・・)を与えられるのね……！ その日が待ち遠しいわ」

うっとりとして呟く婦人の言葉を背に、部屋を退出する。彼女はこれから少年にしようとしていることを、悪いことだと微塵も思っていないのだ。

(まあ、私には全く関係のないことですが)

婦人が彼をどうしようとも、己はただ、そんな彼女の願いを叶えるだけ。

「さあ、忙しくなりますよ。いつもの仕事(・・・・・・)と同時進行で、特殊任務をこなしてもらいます」

その言葉に、己の前に黒尽くめの格好をした人間たちが姿を現す。そして彼らは同時に一礼すると、音もなく再び姿を消した。

コツコツと歩くウィゼラの足音だけが、冷んやりとした空気を持つ廊下に響き渡った。

トレイディアの街はいつ来ても賑やかだ。この街を散策するのは三回目であるが、そこかしこで商人が売買を行い、人々は興味の湧いた店を覗きこんでいる。

(改めて見なくても、すごい量だなあ……)

買って来るようにと渡されたメモには、ビッシリと買う物が記されている。物量が多いというより、種類が多いというべきか。それでもリンだけで全て持てるかどうか、疑問が残る。

(これ全部買って帰るだけでも日が暮れそうなんだけど……)

リンはトレイディアの街に詳しくない。買う種類が多いということは、その都度店を探さなければならず、その分時間がかかるだろう。

(急ぐ必要はない、ゆっくりでいいとは言われたけど……)

脳裏に過るのはリンに買出しのメモを渡した使用人の女性の姿。僅かに頬を紅潮させ、どこかうっとりとした表情で言った言葉が耳から離れない。

『さっきウィゼラさんに、よければこれも一緒に買って欲しかったら頼まれちゃってね。手が空いてるのレンしかいないし時間かかっても大丈夫らしいから、頑張っ行ってきて欲しくないかしら。あ、お昼ご飯代も含まれてるから好きなもの食べてくるといいわ。はいこれ、手提げ袋』

このメモの大半は、ウィゼラによって買って欲しいと指示されたもの。思わず強張りそうになった表情を押さえ、笑みを浮かべながらわかりましたとリンは承諾した。

(一応、対策(・・)はしておいたけど……)

リンはどこか遠くを見ながら人ごみの中を歩き続ける。これから起こるであろうことを想像すれば、誰だっていい気分はしないだろう。

ため息ばかりついていても仕方が無いため、リンはメモに書いてあるものを改めて見直す。できれば近くにあるものから買っていきたいと思うが、地理に疎い状態でそれは不可能だろう。ならば、面倒ではあるが上から順に買っていくしかあるまい。

一つ一つ、時には人に尋ねながら店を探していく。広い街中を歩き回することは苦にならないが、頭上から注がれる日差しの強さには些か参る。今日は特に気温が高く、まだ昼前だというのに、少し歩いているだけでも全身から汗が滲み出ているのを感じた。

買い出しを続けていくと、手提げ袋の中が大分膨らんでいた。嵩張るだけで重みはあまり感じないのが唯一の救いか。しかし、買い出しは未だ半分も終わってはいない。これから更に重みが増していくだろう。

(……ちょっと飲み物でも買って休憩しよう)

トレイディアは少し歩けば、飲食できる店や売店をすぐに見つけることができる。周りを見れば、氷を使った出店が近くにあった。

やはり考えることはみな同じなのか、その出店には既に両の指では足りない程の客が並んでいて、貼り付けられているメニューをじっと眺めている。リンもまた迷うことなくその列の最後尾に並び、順番が来るまで待つことにした。

「次はボクね。何がいい？」

リンの番が漸くきたとき、売り子の女性が爽やかな笑みを浮かべながらメニューを指差す。たっぷりと入った氷に果物の絞り汁を入れたドリンクは、どれも美味しそうだ。

「じゃあこの、ブルーベリーで」

「わかったわ。ちょっと待っててね」

注文した後、リンは懐から普段使っている財布を取り出した。この中に買い出し用の所持金が入ってはいない。駄賃代わりとして昼食代も含まれているようだが、婦人の屋敷から与えられたものを私的に使う

気にはなれなかった。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

代金を払って少しすると、注文したブルーベリーのドリンクを手渡される。邪魔になってはいけないと、すぐさま出店から離れた。伸びているストローに口をつけて啜ると、冷たく甘酸っぱい味が口の中に広がっていった。暑いこともあって、とても美味しく感じる。

(……ちょっと休もうか)

できれば、落ち着いた場所で飲みたいと思った。涼しい場所で冷たいものを飲めば、気力が大分回復するだろう。人が少ない、ゆったりとした場所だったらなおよし、だ。

まずは人が少ないところを探すため、小路に入って行く。大通りは人の行き来はとても活発だが、一本小さな道に入るとたちまちそれは途絶えてしまう。

どこか座れるような場所を探すが、そう都合よくは見つからなかった。そして小路を抜けて大通りに出れば、再び人の波が待ち受けている。

何度か別の小路に入っては出てを繰り返すうちに、漸く座れそうなところを発見した。木製の、簡素なベンチが設置されている。荷物をまずベンチの上に乗せ、その隣にリンは腰掛けた。

(うん……涼しいな)

時折吹く風が頬を撫でた。じわりと汗ばんでいた身体にはとても気持ちがいい。膝の上に手を置いて、大きく息を吸い込んで吐き出した後、手に持っていたドリンクのストローに口をつけた。喉が潤うと共に、暑さで火照っていた身体が冷えていくのを感じる。

気づけばドリンクはなくなって、下の方から鈍い音を響かせていた。氷だけになってしまった容器を荷とは反対側に置き、リンは壁に凭れ掛かる。

建物の影になっているせいか、日差しが差し込まない小路はひんやりとしていて心地がよかった。できればずっとこうしていたいという気持ちが沸いてくるが、もう少し休憩したら、買い出しを再開せねばならないだろう。

(体力には一応自信あったんだけど……帰ったら鍛錬増やした方がいいかな)

もっと鍛えれば、暑さに負けない身体になるかもしれない。

(まあそれはおいおい考えるとして……今は……)

リンは思考するのを中断し、ベンチから立ち上がろうとそっと腰を浮かせた。すると、頭上から複数の迫る気配をはっきりと感じとる。上を見上げたくなる衝動を抑え、固まることなく自然な動作で立ち上がる。ザッ。

一瞬の間に、リンの周りに複数の黒尽くめの人間が立ちはだかった。リンは今度こそ顔を上げると、同時に口元に布のようなものを押し当てられる。

「ん……！」

腕や足を振って抵抗を試みるも、力が次第に抜けていくのを感じた。そして同時に、意識が遠のいていく。

(睡眠薬か……！)

嗅がされた薬品が何か悟ったと同時に、リンは意識を失った。

完全に眠りに落ちた少年を、黒尽くめの人間の一人が肩に担いだ。そして素早い身のこなしでその場から立ち去り、人目を避けるように進んでいく。この場に少年がいたことを証明するのは、置かれた手提げ袋と水になりかけている氷の入った容器だけ。

「……やっぱり行動に移したか」

そして、ポツリと呟いた言葉を拾う者もまた、すでにいない。

建物の物陰の合間合間を颯爽と縫っていく複数の黒い影。彼らの足は速い方ではあるが、決して追いつけない速度ではなく、更にこちらは一人だ。容易に彼らの後をつけることができる。

(これでやっと本業に入れるよ……それにしても、まさかあの人が協力してくれるとは思わなかったな)

ずっとリンの動向を隠れながら見守っていたフレイは、朝方のことを思い出す。

婦人が外出した昨日と違い、今日もまたいつも通り他の護衛たちと共に鍛錬に励む予定だった。リンが鍛錬場に来るまでは。

「姉さま、実は今日買出しを頼まれたのですが、買う物がとても多くて……恐らく帰るのが遅くなってしまうと思うんです。だから、もし時間がかかったとしても心配なさないでください」

その姿は、姉を心配させまいとする可愛らしい弟の姿だ。護衛仲間が微笑まじげにリンを見ている。フレイはリンに近づき、ポンと頭を撫でた。

「わかったよ、レン。でも、できるだけ早く帰っておいでよ？ レンが部屋にいないとわたしが寂しいからね」

「はい、わかりました、姉さま。――恐らく、裏で婦人が手を引いていると思います。ウィゼラさんが関わっているようなので」

リンは素直に頷いた後、笑顔のままフレイにしか聞こえない声量でここを訪れた本当の理由を語る。フレイもまたにっこりと微笑んだ。

「行ってらっしゃい、レン。気をつけて行くんだよ。――適当に理由をつけて追うから、後は任せて」

「はい、行って来ます。――お願いします」

鍛錬場を出て行くリンを見送った後、フレイは笑顔を貼り付けたまま思考する。もちろん、この場をどうにか抜けて、リンの後を追うために。

(仲のいい姉弟って伝わってるからとりあえず……量の多い荷物を持ってやろうとついていく……うん、不自然じゃない。これでいこう)

フレイはわざとらしく顎に手をあて、リンが去った方向をじっと見やる。こうしていれば、きっと護衛たちがどうかしたのかと声をかけてくるだろう。それを待つために。

「――レイ、少しいいか」

「へ？」

しかし、声をかけてきたのは――フレイのことをいつも避けているはずの男だった。まさか彼が真っ先に声をかけてくるとは思わず、間の抜けた声が出てしまう。

「長く時間は取らせない。こっちへ来てくれ」

「え？ あ、うん。いいけど」

一体フレイに何の用があるのだろう。彼は鍛錬場を出ると、キョロキョロと周りを見回した。誰もいないことを確認しているかのように。

彼は今までフレイがどんなに話しかけても、ああ、やそうか、としか言わず、すぐに会話を終了させてしまう。手合わせも、一番初めに戦ったあとは一回もしてはいない。フレイに負けて自尊心を傷ついただけとは思えない避けられっぷりを、訝しく思うことはあった。だが、会話を成立させることができなかったため、詳しい理由を知ることもしばしばできなかった。

それなのに彼の方から話があるのだという。本当は今すぐリンを追いたいところだが、彼の話の内容も気にかかる価値はある。余計な勘繰りをされないよう、不思議でたまらないといった表情を顔に貼り付けた。

「レイー—今すぐ弟を追いかけろ。大事なんだから？」

「はい？」

突拍子も無いとはこのことだった。彼の言葉は渡りに船ではあるが、いくらなんでも突然すぎる。レイがもしも婦人の事件を追っていなければ、言われている意味すらわからないだろう。

「どうしたのさ、突然」

「いいから行くんだ。早く行かないと——取り返しのつかないことになる」

「……」

彼の目は真剣そのものだった。だが、心なしか不安で揺れている。その目を見て、フレイはある確信を得た。

(そうか……知ってるんだ、婦人がしてることを)

思い返せば、彼がフレイを見る目は負けたから悔しいといった視線ではなく、どこか後ろめたいようなものだった。婦人のしていることを思えば、狙われるのがわかっている弟を連れている女性と、親しげに話すのは無理だろう。今までずっと罪悪感を抱えていたために、素っ気無い態度でフレイに接していたのかもしれない。

「あいつらには、俺が適当に話をつけておく。だから——」

「わかった。レンの後を追うよ。君の言っていることはよくわからないけど、買い物の量、とっても多いみたいだから、あの子が一人で全部持てるか実は心配だったんだよね」

そうとわかれば、ありがたく厚意を受け取るだけだ。彼はフレイの言葉を聞いて、肩の力が抜けたような顔をした。心の底から安堵している。リンのことをずっと気にかけてくれていたのだろう。心の中でありがとうと謝辞を述べた。

フレイはすぐさまリンの気配を探し、誰にも気づかれないよう彼女の後を追う。彼に言った通り、荷物を持つのを手伝うのではなく、気配を消して誰にも気づかれないようひたすらリンを見守り続けていた。黒くめの彼らが行動を起こすまで。

少し離れた前方を進む黒影達は、追跡者に気付いている様子はない。もちろん、気付かれてしまったのは困るのだ。そうなってしまったら、リンを囮にしたことが水の泡となってしまう。

(しかし末恐ろしい子だなあ。追跡者に気づいていた上で平然と買い物してたよ。休憩場所を人気のないところにしたのも、回りに迷惑をかけずに攫われるためだろうなあ。……いや、本当に末恐ろしいのは、リンに戦い方を仕込んだっていうお姉さんの方か)

フレイの姿こそ捉えることはなかったが、リンは何度か、彼らが潜んでいる場所をちらりと見遣っていた。一度だけなら偶然だろうが、二度三度と続けば確信を得るには十分である。

彼らとて、決して気配を絶つことを怠っていたわけではなかったが、甘かった。リンが十代前半の子供だと思ったのと、人ごみの多い街中であると油断したのかもしれない。

(あらゆる魔術を習得している上に、治癒術まで使いこなして、気配の読み方から消し方まで教えて、更に暗殺者の剣技にも精通してるって、どんな超人なんだろう。一度お目にかかりたかったな)

リンが扱う剣筋は、通常のものとは一風変わっていた。彼女は剣を抜いても、何度も振りかざしたり、剣戟を与えたりはしない。相手の攻撃を全て避けるか受け流すかした後、そして確実に致命傷を与えられるというときや、確固とした目的意識があるときのみ刃を振りかざす。闇雲に剣を振るうということを決してしないのだ。それ故に動きに無駄が無い。

こうした無駄のない動きをするのは熟練の剣士か、もしくは暗殺を生業としている者である。一撃で標的を仕留められるよう、急所を的確に打つことを教え込まなければ、こうした動きをこの年齢でできるようになるのは不可能だ。

それでも、小柄なリンにとっては力づくの戦い方よりも、よほど有用な戦法であることも事実。ただ強くなるのではなく、必ず生き残ることができる剣技として、キキョウと呼ばれたリンの姉は剣を教えたのかもしれない。

(キキョウさんって人も、元暗殺者だったのかな……わたしと同じで)

フレイが隠密行動を得意としているのは、それが大きな理由である。

かつてフレイはとある暗殺集団に身を寄せていた。今からもう、六年以上も前の話である。

幼少期、フレイは優しい両親と大勢の使用人に囲まれて過ごしたお嬢様だった。ふわふわひらひらとしたドレス、美味しい食事、綺麗な物を回りに集めた生活が当たり前で、当然のものだと思っていた不自由のない、誰もが羨むような暮らし。

だが、その幸せは永くは続かなかった。

それは六歳の頃、突如起きた。昼寝の時間としてすやすやと眠っている時分に、悲鳴が聞こえたのだ。驚いて跳ね起きたフレイは、続けざまに聞こえてくる悲鳴に身を竦ませる。

「フレイ！」

血相を抱えた母が、フレイの部屋の扉を開けた。一体何が起きたのか聞こうとする暇なく、母はフレイを抱きかかえ、部屋の外へと走り出す。

「お、お母さま……？」

「大人しくしていて、フレイ。あなたは、私が絶対守ってみせるから」

尋常ではない母の様子に、フレイは聞くことをやめて母親に抱きついた。長い廊下を過ぎ、広間を駆け抜ける。その間、周りから聞こえる悲鳴が、段々と近づいてきていることには気付かないフリをした。

「早く、外へ……！」

エントランスまで来たとき、冷たい空気が頬を撫でた。そしてエントランスを飛び出て外へと出た途端、母の身体が前へと傾いでいく。フレイを抱きしめている腕はそのままに。

母の腕がクッションとなり、倒れたときの衝撃はそれほどでもなかった。地面にぶつかった拍子に母の身体が僅かに横に向いたため、押しつぶされることもなく。だが、フレイの身体を抱きとめていた腕からだらりと力が抜け、母がピクリとも動かなくなってしまった。

「お母さま……？」

恐る恐る母の顔を見上げると、彼女の肌は異様な青白さを放っていた。瞳は半目の状態で、すぐ近くにいるフレイすら見てはいない。

「……」

頭上に影が差したことに気付いて視線を向けると、二人の傍に一人の人間が立っていた。

年の頃は十を超えたばかりの、フレイより年上ではあるがまだ幼いとも言える子供。背中まで流れている藍色の長い髪に、こちらを見据えている丸い闇色の瞳。白磁器のように白い肌は、漆黒の衣装を纏っていることもあって、どこかぼんやりとしていた。

(きれい……)

その子供はとても美しかった。光が宿っていない闇色の瞳がこちらに向けられる。

子供の手には、不釣り合いな長剣が握られていた。剣先から青白い光がゆらゆらと立ち上っており、さらにそこから冷たい空気も感じられる。

暫く子供のことを凝視していると、子供は闇色の瞳を軽く伏せた。そしてフレイの傍をすたすたと歩いて通り過ぎて行く。慌てて母の腕から抜け出し、すぐに立ち上がるが、既にそこには誰もいなかった。倒れている母とフレイ以外、誰も。

そしてフレイは漸く我に返った。倒れている母を起こそうとして改めて母を見て、ヒッと息を詰まらせ

る。彼女の背中から首筋まで、刃物で抉られたような痕があり、そしてまるで瘡蓋のように、その傷跡を透き通った氷が覆っている。変わり果ててしまった姿に、フレイはペタリと座りこんだ。

「おか……おかあ、さま……！」

そっと顔に触れると、彼女の肌は恐ろしいほどに冷たかった。パッとすぐに手を離してしまうほどに。

「み、皆は……」

屋敷の中には、父や使用人たちが大勢いたはずだ。彼らに助けを求めようと抜け出た屋敷の中へと戻るが、そこは更に凄惨な場所に変貌していた。

どの部屋に行っても、生きてそこにいる者は誰もいなかった。全ての人間が母と同じように氷で覆われた傷跡を体に刻み、横たわっている。一縷の望みをかけて父のいる部屋へと辿り着くが、彼もまた胸部を貫かれ、完全に絶命している無残な姿と成り果ててしまっていた。

「おと……さま。おかあ……さま」

一番初めの悲鳴が聞こえてから、然程時間は経ってはいない。そんな短時間の間に、フレイは全てを失っていた。優しくした両親は、二度とフレイのことを抱きしめてくれることも、笑顔を見せてくれることもない。寂しくなったとき、一緒に寝てくれる両親は、もういないのだ。

「……さっきの、子……！」

冷気を放つ剣を持っていた、初めて見た子供。あの子供がフレイから全てを奪ったのだと想像するのに、時間はかからなかった。ただ綺麗だと思っていた姿が、憎悪により歪んだ姿へと変わっていく。

（ゆる……せない！）

何故優しい両親や使用人の皆が、こんな酷い仕打ちを受けなければならないのか。皆をこんな無残な姿にしたあの子供を、このままにしておくわけにはいかない。

しかしあの子供は既に屋敷から去ってしまった。仇を討ちたくともあの子供がどこに向かったかはわからない。それでも、沸々と湧きあがる憎悪は止むことを知らず、ゆらゆらと立ち上っていく。

「――生き残りか」

「！」

突如背後から声がし、振り返る。そこにいたのは複数の人間であった。黒い装束は先ほどの子供を連想させるが、彼らはその子供と違い、顔に仮面をつけている。ぞろりと狭い部屋の中に複数の見知らぬ人間に押し寄せられて、フレイは身体から血の気が引いていくのを感じた。

「あの『氷の死神』が、標的の一人を見逃したというのか……なかなか興味深い」

声の高さからして男だと思われる一人の人間が、フレイの方を見据えた。無機質な仮面は何を考えているのかサッパリわからない上に、どこか不気味な印象さえ持つ。何ともいえない恐怖が、フレイに押し寄せる。

「小娘、この屋敷をこんな状態にした子供はどこに行った？」

「……！ あの子のこと、知ってるの？」

「質問をしているのはこっちだ、小娘」

あの子供の行方を知りたいのは、フレイも同じだ。しかし強い口調で言われてしまえば、身体が竦んで反論なんて出てくるわけがなく。

「し、知らない……！ あ、あの子、さっき出て行ったから……！」

フレイのすぐ傍を通り過ぎて行った子供。今思えば、母はあの子供から逃げようとしていたのかもしれない。だが結局間に合うことなく、母は命を奪われてしまった。

「成る程……一足遅かったというわけか」

そう漏らすと、彼らは互いの顔を見合わせ、くるりとフレイに踵を返した。ぞろぞろと部屋から出て行

こうとしている。

「ま、待って……！」

彼らのことは恐ろしいが、フレイもまた、あの子供のことを聞きたいと思っている。今帰られてしまったら、あの子供についての情報が手に入らない。

「あ、あの子のこと、知ってるなら、お、教えてください……！」

縋る思いで彼らに声をかけると、彼らの動きがピタリと止まった。そして徐にこちらを振り返る。

「ヤツのことを知ってどうするつもりだ、小娘」

無機質な冷たい声音は、ただそれだけで恐ろしいものだった。だが、怯んではいけない。

「かたきを……みんなのかたきを、とりたい！」

仮面に包まれた彼らの頭部をじっと見つめると、彼らはボソボソと話しを始めた。

『氷の死神』を討つための、囹程度にはなるか……」

仮面を被っている上に小さな声で話されてしまっは、フレイの耳に内容は全く届かない。不安でドキドキと大きく高鳴る心臓の音が、耳に煩かった。

「――ヤツを、『氷の死神』を討ちたければ、我らと共に来るがいい。お前にあの化け物と戦う術を教えてやろう」

「！」

彼らがフレイに下した決断は、願ってもないことだった。皆の仇であるあの子供を倒す術を与えてくれると聞いて、頷かないわけがない。フレイはすぐさま行くと返事をし、彼らの後を追った。

これがフレイが暗殺者になるに至った経緯である。彼らの元で、フレイは戦う術と、そして『氷の死神』と呼ばれる稀代の暗殺者のことを知った。

『氷の死神』は、フレイが拾われた組織と敵対している組織に属する暗殺者なのだという。まだ十代前半の幼い子供ながら、既に数多くの人間をその手にかけた、非凡な才を持つ少年であると。

彼が仕留めた標的は、必ず傷口が氷に覆われているという共通点がある。そして彼の持つ白磁器の容貌も相まって、『氷の死神』の異名を持つまでに至ったらしい。

そんな名うての暗殺者を倒すのは、容易なことではない。フレイは血が滲むような特訓を歯を食いしばりながら耐え、己の糧へと変えていった。皆の仇を討つ、その思いがたった独り残されてしまったフレイの、壊れそうな心を支えていた。

挫けそうになったとき、心に浮かぶのは全てを奪った憎き少年の姿。長い藍色の髪を靡かせた、白く美しい少年。絶対に倒すのだと誓う度に、身体に力が湧いてくる。

それから八年という永い月日が経った。幼い子供でしかなかったフレイの手足はすらりと伸び、そこに当時の面影は既がない。

元々筋がよかったのか、フレイは組織の中で次第に頭角を見せ始めた。同じ組織内の人間同士の模擬戦の大半を勝ち星でしめている。忍びこんで情報収集を行う仕事も任せられるようにもなった。『氷の死神』との戦いに備え、様々な任務をこなしていく。確実に、強く成長しているのを実感した。

それでも現状に満足してはいけない。確かに当時とはもう比べるべくもないが、あの少年もまた月日を経て強くなっていることだろう。確実に仕留めるためには、ただひたすらに強くなるしかない。

より一層鍛錬に励むフレイを見て、組織の人間はこれならば『氷の死神』に通用すると判断してくれたらしい。『氷の死神』の情報を集め、仕事を終えた所を狙えと指示を受けた。逸る気持ちを抑え、組織が示した具体的な指示通りに動いていく。

辿り着いた場所は、周囲からほのかな冷気を感じた。瞳を伏せ、気配を辿るが彼もまた気配を絶っているのか、人の気配を全く感じない。だが、フレイには全く問題はなかった。

(……気配はなくても、この冷気がお前の存在を示しているぞ『氷の死神』)

フレイは迷うことなく冷気の流れを辿った。身につけられるものは何でも身につけたおかげで、気配以外のものを辿ることなど造作もない。音もなく走り続ければ、望んでいた存在が視界に映る。

背中まで覆われている藍色の髪に、黒で統一された衣装。そして白い手に握られている長剣からゆらりと立ち上っている冷気。間違いない、彼が『氷の死神』だ。

彼はフレイの存在に気付いてはいない。フレイは剣をすらりと抜き放ち、『氷の死神』の背後に迫る。首筋を狙って剣を振り下ろした。

キィン！

しかし、フレイが振りかざした刃は、途中で受け止められてしまう。

「！」

『氷の死神』はこちらを向いてはいなかった。握っていた長剣を頭上に掲げ、フレイの一撃を受け止めたのだ。

「そんなに殺気を放っていたら、いくら気配を絶っていても意味がないな」

「……！」

気付かれていた。いや、それどころか渾身の力を籠めた一撃を、いともあっさりを受け止められてしまったことに驚愕を隠せない。

「チッ……！」

フレイは一度距離をとった。そこで漸く彼はこちらを向いた。かつての白磁器の美貌をそのままに、低めの声を聞かなければ女性ではないかと思紛う、美しき死神がそこにいる。

(本当に……『氷の死神』だなんてよくいったものだ……！)

剣先から漂わせている冷気が白い肌を浮かび上がらせ、まるで氷でできた彫像のように思える。

剣を構え直すが、彼はフレイをじっと見据えるだけで、獲物を構えもしなければ魔術の詠唱を始めることもしない。それなのに、彼から全く隙が伺えなかった。どこからどう攻撃しても、彼を倒せる気がしない。

(……っ怯んでいられるものか！)

漸く巡ってきた好機なのだ。この日のために今まで鍛錬してきたのではないのか。相手が化け物じみた強さを持っていることなど、想定範囲内であったではないか。

フレイは考えるのをやめ、『氷の死神』から距離をとったまま走り出す。そして足先に意識を集中させた。

ヒュオ！

足元で風が舞った。身体が次第に軽くなっていくのを感じる。

魔力を術として使うのではなく、己の身体に風として纏わせたもの。そうすることにより、通常の何倍も早く動くことができるのだ。この男と対峙するためだけに編み出した、魔術の応用。

タッ！

フレイが力強く地を蹴ると、瞬きの後には『氷の死神』の眼前へと迫っていた。彼の喉を狙い、剣を振り抜く。

ガキンッ！

「！」

反応できるはずがない速さの剣戟は、まともや『氷の死神』に届くことなく阻まれた。冷気が溢れ出ている長剣が、喉元をギリギリの位置で防いでいる。

「速いだけじゃ、俺を仕留めることはできないよ、お嬢さん」

「っ」

またしても受け止められ、フレイは再び距離を取ろうとする。が、足が動かない。

「なっ、足が……！」

気付けば足に、透き通った氷の塊が纏わりついていた。これでは距離をとるところか、この場から一歩も動くことができない。足に力をいれるが、氷の塊はびくともしなかった。

「風属性の力を纏うっていう発想はよかったけど、そのおかげで、君の風の中に俺の冷気を混ぜ込むことができた。風と氷は相性がいいから、互いを相殺しないんだよ。覚えておくといい」

「……！」

見下ろしてくる闇色の瞳は、狙われた者とは思えないほど穏やかな光を宿していた。それがまた憎らしく、忌々しさが募る。

そして『氷の死神』は、身動きがとれなくなったであろうフレイを殺すでもなく、視線を周囲にめぐらせていた。

「それにしても酷い連中だ……俺を殺すために、君もろとも罠に陥れようとするなんてね」

「な……！」

それはどういう意味だと問い質そうとした刹那、半径数十メートル離れた先から幾多の魔力を感じ取る。身体だけ振り返ると、点在してる魔力が段々と膨張しはじめ、一つになろうとしているのがわかった。

「何故……！ わたしに任せるって……！」

「君が俺と戦うことで、この場所に縫い止める役割を果たしているんだろう。――さて」

『氷の死神』が剣を地面に突き立てると、足を覆っていた氷に亀裂が走った。パリンと音を立てて氷が砕け散るが、ずっと冷気に冷やされた足は悴んでしまい、思うようには動かない。立っただけで精一杯だ。

「――大人しくしていてくれよ、お嬢さん」

「!？」

彼はフレイが動けないのをいいことに、膝の裏に手を添えてフレイを持ち上げた。いつの間にか、剣は鞘の中へと戻されている。そして彼はフレイを抱えながら、軽快な足取りで大きく跳躍した。

その場から離れた直後、天空がピリリと光りを発し、そして真下に向かって太い光の柱が打ちおろされる。もしも彼がフレイを抱えていなければ、フレイは今の雷属性の魔術に全身を焼かれていただろう。

続けざまに、巨大な火炎球が幾つも落下してくるのが見えた。ゾッと全身に悪寒が走る。この男が言っていた意味を漸く理解した。

(……あの組織にとって、わたしはただの捨て駒だったわけか)

彼らは元々こうするつもりで、あの時フレイを拾ったのだろう。より確実に『氷の死神』を始末するために。

気付けば物静かな場所まで移動してきていた。ハウハウと鳴く梟の声や、虫の騒めきが響いている。

「ここまで来れば、魔術に巻き込まれることはないか」

「！ 離せ！」

安全地帯まで来て、フレイは『氷の死神』に抱きかかえられたままであることに気付き、身体を激しく動かす。すぐに手は離れ、フレイは彼から距離をとった。悴んでいた足も動くようになっていく。

これで邪魔が入らないというのなら、むしろ好都合だ。これで再びフレイは戦うことができる。『氷の死神』を討つことができる。手に持ったままであった剣を、彼に向けた。

「……君の組織は君を見捨てた。なのにまだ、俺を狙うのかい？」

「組織なんて知ったことじゃない！ あいつらは、わたしがお前に復讐するために利用させてもらっただけだ！」

そう、彼らはあくまで皆の仇をとるために、利用していただけだ。向こうがフレイを利用したというの

なら、フレイもまた同じ。彼らとは、『氷の死神』を倒すという利害が一致したに過ぎないのだ。

「成る程……君が裏の道へ入ってしまったのは、俺のせいというわけか」

「ああそうだ！ 八年前、わたしの家族や仕えてた人たちをお前が皆殺した！ 今ここで、仇を討たせてもらう！」

「八年前……？ ！ まさか君は……」

「死ね、『氷の死神』！」

今度は風を纏うことはせず、己の持つ筋力のみで『氷の死神』に斬りかかる。しかし、彼は寸前のところを一步後退して避けた。何度も剣を振るい続けるが、その全てをいとも容易く避けていく。

「――悪いが、少し眠っててくれ」

「！」

突如背後をとられ、フレイは身を硬くした。そして頸部に痛みを感じると同時に、意識が途切れていく。
(やっと……会えたのに！)

追い求めていた仇を目の前にして、フレイは意識を手放すこととなる。

そしてフレイが次に目覚めたのは、見知らぬ部屋であった。あまり寝心地がいいとは言えないベッドの上。ゆっくりと身体を起こすと、すぐ近くに置いてあったテーブルの上に、フレイの剣が置いてある。

「ここは……」

覚醒しだした意識が鮮明になるにつれ、何故自分が眠っていたのかを思い出す。

(『氷の死神』はどこだ!?)

ベッドの上から跳び起きるが、部屋の中にいるのはフレイだけ。

強制的に眠らされたのだ。相手はとっくにフレイの預かり知らぬ場所へ逃げたと考えるべきだろう。気配を辿るといふ初歩的なことも思い付かず、誰もいない部屋を見回したところで、他に誰かがいるわけもない。

そんなとき、ギィと部屋の扉が音を立てた。

「ああ、目が覚めたか」

「お前は……！」

扉を開けたのは、探していた『氷の死神』本人だった。武器ではなく、籠のようなものを手に持つ姿に、思わず瞠目する。

何故逃げたのにわざわざ戻ってきたのだ、この男は。いやそれだけではない。彼はフレイが斬りかかったときから、攻撃を受けることはあれど、フレイに対して攻撃を一切仕掛けてはこなかった。それだけでなく、組織の人間が仕組んだ上級魔術の集中砲火から、わざわざ動きを封じたフレイを魔術の及ばない場所まで移動させた。

――助けられたのだ、この男に。

「何で……何でわたしを助けたんだ『氷の死神』！」

仇である人物に助けられたなど、皆に合わせる顔がない。

それ以前に、今まで鍛えてきた力の全てを彼にぶつけたにも関わらず、その全ては受け流されてしまった。僅かな切り傷すら与えることもできず、やりきれない思いがこみ上げる。

(わたしでは、絶対この男に敵わない……！)

実力をつけたからこそわかる、彼と己との間にあるはっきりとした力の差。フレイがどうあがこうとも、彼にフレイの刃は届かない。絶対的な実力差がそこにあった。

「……組織の人間から聞いてなかったのか？ 『氷の死神』は、絶対に女性を殺さないって」

「は……？」

「女性を手にかけることはしないと決めているんだ。例え依頼されても。だから、君を見殺しにすることもできなかった。それが理由の一つだ」

持っていた籠をテーブルの上に置いてこちらを向き、何を言いだすのかと思えば、それに『女性を殺さない』などと、心ざけているにもほどがある。

「お前……わたしの目の前で母さまを殺したくせに、何を……！」

首筋から背中までを挟られた、無残な姿となった母の姿は、未だに鮮明に思い出せる。そして母だけではなく、使用人の女性たちもまた、同じように殺されていた。それでいて『女性を殺さない』とは、フレイを馬鹿にしているとしか思えない。

「――そうだ。決めたのはそのときからだ。最後に手にかけた女性が娘を守ろうと、息絶えても娘を離さなかった姿に衝撃を受けてね……なんて意志の強さだろうと」

「……！」

それはフレイを守ろうとした母のことを言っているのだと、すぐにわかった。そして彼が暫くフレイたちのことをじっと見つめていたことも思い出す。

「そして無垢な君の瞳を見たとき心に決めた。もう女性を手にかけるのは止めようと。だからあの日以来、俺は女性が標的となる依頼は一切受けていない。――でも、俺が君から全てを奪った憎き仇敵であることに変わりはないな」

最後の言葉に、フレイは顔を上げて『氷の死神』を見上げた。すっかり丸みがなくなり、切れ長となった闇色の瞳が、フレイの姿を映している。

「――君には俺を殺す正当な理由がある。だから今ここで君に殺されたとしても、俺としては一向に構わないが――」

「な……」

殺されてもいい。願っても無いことであるはずなのに、何故か愕然としている己がいることを感じた。そして『氷の死神』は、フレイの様子を気にも留めずに軽い調子で言葉を続ける。

「こうして人を殺して生きているんだ。誰かに殺される覚悟くらい、できているさ。それが綺麗なお嬢さんが相手だというなら、寧ろ大歓迎だ。最期に見るのがむさ苦しい男の顔だというのは、絶対嫌だからね。――でもその前にまず、質問をさせてくれ。君は、俺を殺して仇を討った後、どうする？」

「え？」

まさか彼からそんなことを聞かれるとは思わず、フレイは面食らう。

「な、何でお前にそんなこと言わないといけないんだよ！」

「返答次第で、俺の命を差し出そう。だから答えてくれないか」

「……！」

返す言葉によって、彼を殺すことができる。――本当だろうか。何故そう簡単に、己の命を引き合いに出せるのだ。何か企んでいるのではないのか。

「――俺は何も企んではないよ。ああ、返答するまでは逃げないと誓うから、ゆっくり頭の中を整理してくれ」

「……」

表情を読み取ったらしい言葉に思わず口元を引き結ぶ。本当に、彼は何を考えているのだろうか。八年前に比べれば明らかに饒舌になったはずなのに、全く彼の考えていることを読むことができない。

(ウソだろうけど……考えてみるか)

この男は、逃げようと思えばいつでも逃げられるし、フレイを殺そうと思えばいつでも殺せる。その圧倒的実力差の前では、テーブルに置いてある剣を取ったとしても、容易く止められてしまうだろう。癪に

障るが、この男の言葉通り、仇を討った後のことを考えてみた。

(こいつを殺したら、わたしは……！)

沈黙が続いた。フレイは顔を俯かせながら両の掌を握り締める。

何も考えてはいなかった。この男を倒した後のことを。

今まで彼への憎悪を募らせ、仇を討つためだけに生きてきた。それ以外のことを考える余裕などなく、仇を討ち終った後のことなんて、今まで一度も考えたことすらない。

「そしてもう一つ聞かせてほしい。――君は人を殺めたことを、生涯背負って行く覚悟はあるのか？」

「――！」

問われた言葉に、思わず息を呑んだ。皆の仇を討つということは、仇を殺すということであり、人を殺すことと同義である。――知っていたはずだ。

「君はまだ、人を殺したことがないだろう？」

「なんで、それがわかる……！」

引き取られた組織に従属することになり、技を磨いて力をつけた。フレイ自身も相当な実力をつけたと自負しているし、組織の者も世辞なしに実力を認めてくれていただろう。

だが、一度として暗殺の任務をフレイが受けることはなかった。フレイに任される依頼はあくまで情報収集。忍びこんで標的を暗殺するのに有利な状況を作り出す、主にサポートをメインとした任務。何故実力も確かなフレイに暗殺の任務を任せなかったのか、今まで特に疑問に思ったことはなかった。しかしこうして改めて考えると明らかに不自然である。何故彼らは、フレイに標的の暗殺を一切命じなかったのだと。「目を見ればわかるさ。――君の瞳は未だ濁りのない綺麗な色をしている。一度でも人を手にかければ、そんな瞳を持つことは無理だ」

「目……？」

ここ数年、ろくに鏡など見てはおらず、自身がどんな姿をしているかなんて意に返したことはない。己の瞳がどのような光りを宿しているのかさえも、知らないまま。

「彼らが君に暗殺を要請しなかった理由は最早知る由もないが――だからこそ、今からでも遅くは無い」

「な、何が……」

「君は、明るい日差しの中で生きるべきだ」

この男は何を言っている。確かにそれはフレイが本来あるべき世界だった。だが、フレイがこうして闇の世界に身を落としたのは、他でもない目の前のこの男が原因であるというのに。

「お前が……！ わたしから光りを奪ったお前が、それを言うのか！」

「……ああそうだ。君から光りを奪ったからこそ、責任持って君を光りの世界へと戻したい。今なら、それができる」

苛立ちを露に吼えると、『氷の死神』は闇色の瞳をまっすぐフレイに向ける。それはフレイを揶揄するような思いが全く込められていない、真摯なもの。そんな瞳を向けられて、フレイは思わず押し黙る。

「まあ、これはあくまで俺の自己満足だけだね。――君が闇の世界で生き続けると固く誓っているのならば、それを俺が止める権利はない。約束通り、この首を君にあげよう。だけどそうじゃないというのなら、残念ながら、あげることはできないな」

『氷の死神』の首をとることは、八年前のあの日からフレイがずっと望み続けていたことである。彼の息の根を止めることで、家族達の無念を晴らすことができるのだ。

だが、その後は？

「君の実力なら、無所属でも仕事は舞い込むと思うよ。――ああでも、俺を殺したことは吹聴しない方がいいな。俺の敵が、そのまま君の敵になってしまう。組織の名を上げようと刺客に狙われる可能性も出てく

るだろうし、それだけはしない方がいい」

彼に言われずとも、『氷の死神』を倒したなどと、誰かに誇って言うつもりは毛頭ない。天へと上ってしまった家族だけが知れば、それでいい。

問題はその後、フレイは闇の中で生き続けることはできるのだろうか。組織に所属していたときは、暗殺の依頼は一切任せられなかった。情報収集だけならお手の物である。だが、これからはそうはいかないだろう。全く望まずに、己の手を必要以上に染めることもしなくてはならなくなる。そうなったとき、己は耐えられるだろうか。

(わたしは……人を殺しながら生きることを、望んでない……)

己の心を改めて問うて気付いた事実。フレイがこうして戦闘技術を高めたのも、全ては『氷の死神』のみを倒したかっただけであり、他の人間を殺したかっただけではない。

仇を討つことばかりを考えていたのも、余裕がなかったからではなく、他のことを考えたくなかったからではないだろうか。

そして確実に言えるのは、フレイはこのまま闇の世界で生き続けることはできないということ。いくら相手が極悪人だとしても、己と全く無関係の人間の命を奪うことに、耐えられるとは思えなかった。

「……その様子だと、闇の中で生きることは無理みたいだね」

「っ……！」

凶星をさされ、反論できない。闇の世界で生きることができないことは、それはこの場で仇を討つことができないことを示していた。

「……お前はわたしを光りの世界へ戻すって言ったけど、どうやって戻すつもりなんだ」

せめてもの抵抗として、闇色の瞳を睨み付ける。大分背は伸びたはずなのに、背丈もまた、彼の方が圧倒的に高かった。それがまるで己と彼の实力差を現しているかのように思える。

「——それはこの小屋の扉を開けたままにしておけばわかるよ。君が意識を失っている間に、いろいろ準備を整えておいたからね」

「は？ それは一体どういう——」

ことかと言葉を続けようとした際、ぐうと緊張感のない音が鳴った。それはフレイの腹から発生した音である。あまりにも場違いな音に、フレイはカッと顔を紅潮させた。

「ハハハ……そういえばあの日から随分と日が経っているから、身体も栄養を求めているんだろうね」

「う、うるさい！」

『氷の死神』は、フレイの腹の音を聞いてクスクスと笑みを零した。元々彼の持つ美貌もあってか、柔らかくなった表情に思わず魅入ってしまう。男のくせに、暗殺者のくせに、何故こんなにも美しい容貌をしているのだ、この男は。

「この籠の中の果物を摘むといいよ。どれがお嬢さんの好みかはわからなかったから、いろいろ用意しておいた」

「……」

彼が置いた籠を再び手に持ち、フレイに差し出した。確かにそこには色鮮やかな果物がたくさん入っている。先ほどまでは注視していなかったため、籠に何が入っているかまでは考えてはいなかった。

すぐには手を伸ばさず、じっと果物を睨み付けるかのように見つめる。空腹を自覚したのも相まって、とても美味しそうに見える。が、この男に恵んでもらうという事実が、手を伸ばすのを躊躇させた。

「……心配しなくても、毒は入っていないよ？」

元々そんな心配は微塵もしてはいない。毒などに頼らずとも、この男はその気になれば簡単にフレイを殺せるのだから。しかしあえて何も言わず、睨み付けるに止めた。そうして困惑すればいい。せめてもの

意趣返しである。

「――ここに置いておくから、気が向いたら食べるといい」

彼は一つ嘆息して、籠をテーブルの上へと戻した。苦笑する姿もどこか様になるのが癪に障る。フレイは頷くこともせず、視線を彼へと戻した。

「――お前はわたしを光りの世界に戻すのに、お前自身は光りの世界に身を置かないのか」

そしてふと湧いた疑問を思わず口にする。口にしてから、頭の中で次々と疑問が浮かんだ。

八年前に出会った彼は、どこか人とは違った浮世離れした雰囲気を感じていたと思う。だが、今日の前にいる男は、同一人物とは思えないほど人間臭い。彼ほどの強さがあれば、闇の世界から足を洗ったとしても、命を狙う刺客を追い払うことなど造作もないだろう。だが、彼からは人間臭さと同時に、死臭もまた感じられる。つまりは、相当な実力があるというのにも関わらず、未だに足を洗うようなことをしていないことを意味していた。

「――確かに光りに対する憧れはある。けど、多くの命を奪ってきた俺が光りを浴びるのは、痴がましいとは思わないか」

「……」

フレイが知るだけでも、彼はフレイの両親とそして全ての使用人の命を奪った。暗殺者として生きてきたなら、既に数えることも億劫なほど、手に血を染め続けてきたのだろう。

「わたしを光りへ戻そうとするのは、贖罪のつもりなのか」

「……ああそうだ。だからといって許しを乞うつもりもないし、許してほしいとも思ってない。さっきも言っただろう？ 俺が君を助けようとしてるのは、ただの自己満足さ」

そうやって浮かべたのは、自嘲気味の笑みだった。同情するつもりなどさらさらなのに、胸の奥がわずかばかり曇っているのは何故なのだろう。

「さて、そろそろ俺は行かないといけない。名残惜しいが、ここでお別れだ」

「わたしは全然惜しくないけどね」

彼を殺すことができなくなった以上、これ以上『氷の死神』と一緒にいる意味はない。しっしと追い払うように手首をふり、退出を促した。

「俺に言われたくはないとは思いますが……もう、闇の世界とは関わらない方がいい」

「本当に言われるまでもない。わたしはお前みたいに、無差別に人を殺すなんてことは絶対にしない」

そうだ、フレイの手は未だ人の血で染まってははいない。ならばそれを己の誇りとし、これからを生きていこう。人を殺める術を学んだ身であるが、この手は決して汚れてはいないのだと。

「それじゃあ元気に暮らしてくれ」

「お前はさっさと死ね」

「ははは、そうなるよう祈っててくれよ」

彼は無駄に颯爽とした足取りで部屋の扉を開けて出て行く。藍色の長い髪で覆われた背中を睨み付けながら見送った。

(あいつはそのまま扉を開いておけばわかると言ってたけど……)

彼が置いていった果物に手を伸ばし、口へと運んだ。初めて食べるものであるが、しゃりしゃりとした歯ごたえとサッパリとした甘さがとても美味しい。用意した人間が彼でさえなければ、きっと感謝していたことだろう。

果物を食べながら、彼が去っていた扉を潜る。すると扉の外側がもう野外であり、ここは小さな小屋なのだ気付いた。

(どこだろう……ここ)

そして周りは森林が広がっていた。すでにどこにも『氷の死神』の姿はなく、完全に消えうせてしまっている。彼が出て行ってからそれほど経たずしてフレイも外に出たにも関わらず。それに対してもまた苛立ちを感じる。どこまでも気に入くない存在だ。

(静かだ……小屋以外にはなにもないな)

木々や草花が生えてはいても、他に生き物の姿は見えない。

どうして『氷の死神』はこんなところにフレイを置いていったのだろう。彼に対する苛立ちが沸々と混み上げてきた。

「……！」

刹那、こちらに近づいて来る気配を感じた。あまり早いスピードではないが、徐々にこちらへと確実に近づいてきている。

フレイは一度小屋の中へと引き返し、テーブルに置いたままとなった己の剣を手を取った。そして扉を開けたまま、すぐ横の壁に背中を張り付け外の様子を伺う。

少ししたら、近づいてきた人間の姿がよくわかるようになった。背中まである緩くウェーブがかかった桃色の髪に、膝下まであるワンピースを身に纏った、フレイと同年代の少女。手には武器のようなものを持ってはおらず、あるのは網目状の籠。そしてその中にあるのは薬草と思われる草花だ。

「あら……？ 小屋の戸が……」

「！」

少女は小屋の方に視線を向けると、不思議そうに首を傾げた。恐らくこの小屋は、暫く使われていないものだったのだろう。それをあの男が勝手に利用したということだろうか。

彼女は小屋の方へとやってきている。この狭い小屋の中では、隠れるところなどありはしない。

(ど、どうする……!? 入ってきたところを気絶させようか……)

動揺していたせいでそんな物騒なことを考えていると、少女は小屋の前までやってきていた。そして部屋の中を覗きこみ、壁に背中を貼り付けているフレイを視界に映す。長い睫に縁取られた紅く丸い瞳を、大きく見開いた。

「フレイ……？」

「え……？」

少女の口から紡ぎだされた己の名前に、今度はフレイが藍色の瞳を大きく見開く番であった。何故彼女は、フレイの名前を知っているのだろう。

「やっぱり、フレイでしょ！ 覚えてない!? あたしイルロッド！ 小さい時、何回か一緒に遊んだ……！」

彼女の言葉に、とある小さな姿が重なって見える。それは目の前の彼女と同じ、緩いウェーブのかかった桃色の髪と紅い瞳を持った幼い少女。今までずっと忘れ去っていた記憶が、呼び起こされる。

優しかった両親には、友人や親戚が多かった。同い年くらいの子供たちとはよく遊ぶ仲でもあり、中でも二つ年上の桃色の髪の少女には、たくさん可愛がってもらった記憶がある。

「イル……お姉さま？」

「！ そうよ、あんたのこと、妹のように可愛がってたイルお姉さまよ！ ああもう……八年もあんた、どこで何をしていたの……！」

紅い瞳に涙を浮かべたイルロッドは、そのままぎゅっとフレイを抱きしめる。当時は彼女の方が圧倒的に背が高かったのに、今では同じ位の背丈になっていた。

「ずっと心配してたのよ……！ フレイのご実家の人たちが皆あんなことになってしまって……でも、あんたの姿だけはどこにもなくて！」

イルロッドの言葉が、心に染み込んでいくのを感じる。『氷の死神』への憎悪のみで生き続けた八年間、こうしてフレイのことを心配してくれる人の存在を、考慮していなかったと思い知らされた。組織の人間について行くと決めたとき、どうしてそんな簡単なことにも気付かなかったのだろう。久しぶりに感じる人の温かさが、とても心地がいい。

「ごめんなさい、イルお姉さま……」

フレイはイルロッドの背中に腕を回し、ぎゅっと抱きしめる。目尻が熱くなり、一滴の雫が頬を伝い落ちた。

一頻り抱き合って泣いた後、フレイとイルロッドは小屋の中のベッドに腰掛けて、今までどうしていたのか語りあった。ずっと後ろ暗いことをし続けていたことを吐露する怖さはあったが、ずっと心配してくれていたであろうイルロッドに嘘を吐くこともできず、真実そのままを告げる。

イルロッドは真剣な顔をしながらフレイの話にずっと耳を傾けてくれた。時折手を強く握り締めてもらうことはあれど、彼女の口からフレイが今までしてきたことを批難する言葉は出てこない。

「目の前でお母様を殺害されてしまったのだから……その仇を討ちたいと思うのは当然のことだわ。大事な人を殺されて、憎らしく思わないわけじゃない」

全て話し終ると、イルロッドはフレイを一度抱きしめる。今度はそう長い時間抱き合うことはせず、彼女はフレイを離すと今度はイルロッドが今までどうしていたかを語ってくれた。

フレイの屋敷を訪れたとき、身体の一部が凍結しているフレイの母親の姿を見つけて驚愕したこと。屋敷の人間全てが無残に殺されてしまっていることに皆気落ちしたが、その中にフレイの姿だけないことが気がかりだったと。殺されてしまったならば遺体があるはずなのに、それもない。ならば、どうしてフレイだけが屋敷から姿を消してしまったのか。今も生きていいのか死んでいるかもわからない状況の中、一縷の望みをかけて今までずっとフレイのことを探し続けてくれていたらしい。

「全然見つからないんだもの……もう諦めかけてたのに。まさかあんたの方からあたしの家に来てくれるとは思わなかったわ」

この小屋を含めた一帯は、イルロッドの両親の私有地であるらしい。イルロッドは魔術師の家系であり、魔術の実験や薬品を調合するための薬草が多く自生しているこの敷地を、長年重宝していると。そしてこの小屋は、父がまだ若いときに夜遅くまで薬草を採るために散策した後、仮眠をするために建てられたもので、今現在は使うことはほとんどなかったのだという。だから扉が開いていることを不審に思ったのだ。「フレイ、これからどうするとか、決めてる？」

「いえ……それが全く」

今までずっと『氷の死神』を倒すことしか頭になく、それ以降のことを何も考えていなかったことを素直に明かした。

「なら、あたしの家にいらっしゃいよ。お父様もお母様もフレイのことを心配してるわ。それに部屋なら余ってるし、フレイ一人増えても何の問題もないしね」

「イル姉さま……」

イルロッドがニコリと微笑むと、彼女の幼かった頃の姿が再び重なって見える。彼女のその笑みは、フレイが昔から知っているものと全く同じものだった。

「ありがとう、イル姉さま」

口の端が自然とあがっていくのを感じる。久しぶりに浮かべた笑みは、きちんと笑みの形を作っているだろうか。

(そうか……わたしは全てを失ったわけじゃなかったんだ……)

八年前、幼いフレイは母を目の前で失ったことで、己の全てが闇に葬られたと錯覚してしまった。もし

もあのとき、組織の人間についていかなければ、きっとイルロッドの家に保護されていただろう。それは今からでも、遅くは無い。

そしてフレイはイルロッドの屋敷で世話になることになった。彼女の両親もまた、フレイが無事でいたことをとても喜び、もう一人の娘としてフレイのことを向かえてくれた。空白の時間を埋めるかのような温かい時間が続く。

光りを取り戻すことができたフレイは二年後、十六になったときにイルロッドから所属しているギルドにこないかと誘いを受け、新設されたばかりのワイドリジョンのガルデア支部に入団するに至る。親愛しているイルロッドだけでなく、面白く楽しい人たちが揃っているガルデア支部のことを、フレイはすぐに気に入った。

――数ヵ月後、『彼』と再会することになるとは露にも思わずに。

新たに入団するとして、レニィがある日突然連れてきた人物にフレイは目を疑った。背中を覆うほどある藍色のさらりとした長い髪と、長い睫に縁取られた切れ長の闇色の瞳。纏っている服装こそ黒の装束ではなかったが、二年前とあまり変わらない彼の姿に、思わず息を呑む。それは相手もまた同じだったようで。「フレイ……？」

彼の口から呆然と出た己の名前を聞き、フレイは我に返った。

「……なんであんたがここにいるのさ」

「あはは……うん、話せば長いことになるんだけどね」

低い声で彼に問いかけると、彼はまるで女性のように口元を抑えながらほほほと苦笑した。その姿に口元が引きつる。

「――お前ら知り合いだったのか」

レニィが二人の間に流れる微妙な空気を感じ取ったらしい。彼は大雑把な人種ではあるが、シングルと違って鋭敏であるため、気付いてしまったのだろう。恐らく他の仲間達も何かしら気づいたに違いない。

「レニィ、ちょっとこの子と二人で話させてもらってもいいかしら？」

「!？」

『氷の死神』の口から出た言葉に思わずぎょっとした。二人で話す、というところではなく、口調がどこからどう聞いても女性のものだったからである。フレイの記憶が正しければ、彼は普通に男性の口調だったはず。声音も少し高めになっており、元々持っていた女性的な美貌も相まって、ハスキーボイスな美女にしか見えなくなっている。

雰囲気を感じた仲間たちによって、その場に彼と残された。事情を知っているイルロッドは、少し心配そうにフレイを見ていたが、フレイもいろいろ動揺していたため、それに応える余裕がない。

「……一応、久しぶりとでも言いましょうか」

「その口調止めて。気持ち悪い」

「そう？ あたしは結構気に入っているのだけど……」

人差し指を顎に当てる姿に違和感を覚えなことが、恐ろしく感じた。この男、絶対自分の見た目が女に見えることを理解してやっている。

「女に見える顔してるとは思ってたけど、まさか本当に女になってるとは思わなかった」

「あら、別に本当に女になったわけじゃないわよ？ せっかく表の世界で生きることになるんですもの、昔の自分を脱ぎ捨てようと思って」

その昔を脱ぎ捨てた結果がこれなのか。つっこみたい所はたくさんあるが、このままでは話が脱線すると思い、フレイは表情を引き締める。

「多くの命を奪った自分が、光りの世界で生きるのは痴がましいんじゃないの？」

「……ずっとそう思っていたのだけどね」

彼は闇色の瞳を軽く伏せる。そして何故ギルドに入団するに至ったかまでを語りだした。

今から数ヶ月程前に、彼はとある組織からレニィの暗殺の依頼を請け負ったのだという。そして依頼を遂行するため、レニィと対峙することになったのだと。

しかし、標的となったレニィは今も元気に生きている。そこから導きだされた結果はただ一つ。

(レニィさん、こいつに勝ったのか……！)

彼は二十代前半の若造ながら、既にSSランクの境地へ達した非凡の才能の持ち主である。流石の『氷の死神』も、己を越える才能を持つ相手には歯が立たなかったに違いない。

「レニィに負けて、殺されることを覚悟したんだけどね。なのにレニィったら『お前は暗殺者にしておくのは惜しいな。どうだ、その腕を活かすためにギルドに来ないか？』って軽い調子で誘ってきたのよ」

(じ、自分を殺しに来た相手を誘うって……！ レニィさんらしいと言えたらしいかもしれないけど)

二人の間でどのようなやりとりがあったのかまではわからない。それでも、彼がレニィに負けたことが、闇の世界から足を洗う何よりのきっかけとなったのだろう。

「レニィに負けた後、『氷の死神』は深手を負って死んだと思わせるために、最近までずっと身を隠していたのよ」

その理由は、一時期とはいえ裏の世界に身を置いていたフレイにはよくわかった。『氷の死神』は、闇に身を置く者からしたら決して無視できない存在である。どんな標的であろうとも、圧倒的な強さで振り伏せる最強の暗殺者。そんな彼に変わりに依頼する組織もあれば、商売敵として命を狙う組織もある。そんな状態でギルドに身を置いたら、所属している者達にも被害が及ぶ可能性が高い。彼の命を狙っているのは、フレイが所属していた組織だけではないだろう。

だからこそ、『氷の死神』が完全にこの世からいなくなったと思わせる必要があった。今思えば、彼が表の世界へと生きることができなかつたのは、大きくなりすぎたネームバリューのせいもあったかもしれない。

そしてこうして無事に表の世界に現れたということは、完全に『氷の死神』は死んだと裏の世界で広まったということだろうか。

「……でも、ここのギルドに入るのはやっぱり止めておくわ」

「え？」

「自分の仇が同じギルドにいるって、居心地よくないでしょう？ レニィには他の支部を紹介してもらうから、すぐにここを去るわ。安心して」

どこか寂しげな色を宿した闇色の瞳が、フレイを見据えた。その瞳に、どこか既視感を覚える。

(ああそうだ……二年前にもこんな目をしていたんだ、この人は)

彼に復讐することしか頭になくて、当時は彼が瞳に宿していたものを深く考えたことがない。それでも確かに覚えていた。お別れだと言った彼の瞳が帯びていたのは、寂しげなこの瞳であったと。

「……別にいいよ」

「え……？」

「レニィさんのこと、気に入ってこの支部に来たんでしょ？ なら余所にいく必要はないよ。わたしは別に気にしないし」

さらりと己の口から出た言葉に、彼は瞳をぎょっと見開く。

長年の仇敵である彼が目の前にいるのに、フレイの心は荒れ狂うどころか、とても凧いでいるのがわかる。彼と出会って動揺したのは、二度と会うことはないと思っていた相手と再会した上に、妙な口調で話すようになったからだ。

「お、俺は君の仇じゃ……」

「確かに赦してはいないけど。――でも、今はそこまでお前のことを憎んでないのも、事実なんだ」

フレイが彼の存在を認めることは、完全に想定外だったのだろう。口調や声音が以前のものに戻っている。やはり女口調よりも、そちらの方がフレイにはしっくりきた。

イルロッドと出会い、彼女と彼女の家族が与えてくれた優しい時間は、彼への憎しみを和らげてくれるものであった。彼らからもらった温もりのおかげで、当時は全くわかっていなかったことが、いろいろと見えてくる。

「お前がわたしの家族を殺したのは――依頼されたからだろう？ 暗殺者は基本的に、依頼なしに人を殺すことなんてしない」

そしてフレイの家族を殺害するよう依頼した組織も検討がついている。そうでなければ、ああもタイミングよくフレイの屋敷に彼らが訪れるわけがない。『氷の死神』が屋敷の人間全てを殺した後の隙を、つこうとしたのだと。あくまで推測でしかないが。しかし当時の彼でさえ、そんな小手先の策が通用するとは思えなかった。

「悪いのはお前だけじゃない。――それに、二年前にお前と対峙してなかったら、わたしはまだきっとあの組織にいいように利用され続けていたとも思う」

一度落ちてしまえば、なかなか抜け出すことができないのが闇の世界である。彼があのとときイルロッドの家の敷地内にまで運んでくれなければ、今こうして、ギルドに所属することもなかったと断言していい。――そこまではあえて口にはしないけども。

「何だかんだで、今じゃこうして毎日楽しく生きてる。だからさ、もうわたしのことを気にする必要はないよ。――わたしを光の世界に戻すために、随分長い間手間をかけたみたいだしね」

「……」

彼は口元を引きつらせながら、気まずそうにフレイから視線を外した。その行動は、まさしく凶星を指されたと示している。

二年前に再会したよりも前から、彼もまたきっとフレイの行方をずっと追っていたのだろう。そうでなければ、フレイを気絶させた僅かな時間の間に、交友関係のあったイルロッドの家の敷地に連れて行ったりはしない。先ほど彼がフレイの名を口にしたことで、その推測に確信を得た。何故ならフレイは彼に一度も名乗ってはいないのだから。自分で調べたからこそ、彼はフレイの名を知っていたのだ。

「今は『氷の死神』以外に、別の名前があるんでしょ？ 教えてよ。さっきは驚いてて聞いてなかった」

「――ロードだ」

素である低めの声音から聞き出せたことに満足し、フレイはロードに向かってにっこりと笑みを向けた。

「それじゃあこれからよろしく、ロードさん」

これは決して作り笑いなどではなく、自然に浮かんだものである。かつて殺したい程憎んだ相手に、笑みを向けている。どこか不思議だと思いつつも、悪い気分ではない。

両親を奪ったことを赦したわけでもない。だが、そのことに心を囚われ続けるのを止めたのだ。それだけ、心にゆとりを持つことができるようになったということでもある。フレイを愛してくれた両親も、きっとそれを喜んでくれている。前を向いて歩き続けていることを。

(それでもまさか、あの人を好きになるとまでは流石に思わなかったけど)

初日以降、ロードが再び素に戻ることは一度もなかった。初めは彼の女口調に辟易したものだが、それもすぐに慣れてしまった。今では多分、彼の素の口調に違和感を覚えてしまうかもしれない。慣れとは時に恐ろしいものである。

そんな彼だったからこそ、暫くは己の中に眠る好意に気づかなかった。ただ、女性に分け隔てなく接す

る彼を見て、自分もその大勢の中の一人なのだという事実を、寂しく思っていたくらいで。

「それ……ロードさんに恋してるのよ、フレイ」

「え？」

教えてくれたのは、姉貴分のイルロッドであった。

確かに彼に対する憎しみはほとんどない。それでも、ロードに対してそんな感情を抱くなど露にも思っ
てはおらず、冷水をかけられたような衝撃を受けた。

「……自分だけに特別な眼差しを向けて欲しいと願うのは、その人を好いている証拠よ。そうでなければ、
そんなこと思わないもの。事実、シグルドや他の人にはそんなこと思わないでしょう？」

「うん、全く思わない」

優しく楽しい仲間たちではあるが、彼らに特別な目で見たいと思ったことは、当然ながら一度もない。
不特定多数の一人であるのが嫌だと思ったのは、ロードに対してだけだ。

「でも……どうしてあの人に……」

今の彼にも、昔の彼にも、恋情を抱くようなきっかけがあったとは思えない。一体いつから、フレイは彼
に惹かれていたのだろうか。

「……誰かを好きになるのに、具体的な理由なんていらないわ。気付かないうちに惹かれてたりするのが恋
だもの、理屈じゃないし」

確かに理屈で語れることではない。イルロッドは二年前再会したときのように、フレイの両手をぎゅっ
と握り締めた。

「過去はどうであれ、今のあの人ならあたしも構わないと思うわ。押すも引くも、あなたの心に従いなさい。
——でも、絶対後悔をしない選択をして。フレイにはあたしみたいたいになってほしくはないから……」

「イル姉さん……」

彼女はとある人物に恋情を抱いていた。その想いは結ぶことなく、想いを相手に伝える前に潰れてしま
う結果となっている。それは彼女が悪いわけでも、相手の男性が悪いわけでもない。ただ、彼女が彼を好い
たときには既に、彼の心の中には特別な存在が住んでいたのだ。彼の心は、その人物が亡くなってしまっ
た今でも全く変わっていない。ロードにもいずれ、そんな人物ができるのだろうか。

(それは……嫌だなあ)

もしもロードにそんな存在ができたとき、フレイは素直に祝福できない自信があった。そう判断できる
くらい、彼のことを好いている己に驚きもする。未だに惹かれた理由もわからないままだというのに、想
いだけが募っていく。

(……今は仕事に集中しようか)

フレイは音もなく進んでいく影たちに、真っ直ぐ視線を向けた。今はリンの剣技のことも、好意を抱いて
いる彼のことも後回しだ。フレイならやり遂げてくれると期待してくれたレニィの期待に応えるべく、前
方に集中する。

やはりというべきか、遠回りはしたものの影たちの目的地は婦人の屋敷であった。当然表の門を通るこ
とはなく、裏手へと回る。どこから屋敷の中に入るのか伺っていると、リンを背負っていない一人の影が、
屋敷を覆っている壁に手をついた。

「我、汝の機密を守る存在なり」

聞こえてきたのは、古風な言い回しの言葉であった。その言葉が紡がれた直後、壁がカッと光りだし、文
字が浮かび上がる。

(あ、特殊インクで描かれた魔法陣……！ だから見つからないわけだ)

先ほどまで、壁は特に変わった様子のないものであった。それが、呪文を唱えることにより光りを放ち、

姿を現す。それならば、こうして実際直視しない限りは、どこに隠し部屋があるか、判別するのは不可能だ。魔術に造詣が深い者であるならば、発動直後の魔力の残滓を感じ取れるかもしれないが、それも時間が経てばできなくなる。まさに、人目を忍ぶのにうってつけの方法であろう。

影たちはポッカーリと道を作った壁の向こうへと消えていった。直後、壁は何事もなかったかのように元の壁へと戻っていく。浮かび上がった魔法陣は消え、完全に文字すら見えなくなった。フレイは回りに人の気配がないことを確認した後、その壁の元へと近寄った。

「王侯貴族が財産を隠すために編み出させた特殊インクを使うなんて……流石、莫大な財を築いたウィックテルスト家とでも言おうか。これは婦人が作ったと考えるよりも、旦那さんが隠れて取引をするためや自分の財産を守るために作ったと考えるべき、かな」

そして恐らく、このような見えない魔法陣は、屋敷の中にも複数存在するだろう。扉がここ一つだけであったなら、流石に不便すぎる。婦人も隠し部屋を利用していることを考えると、彼女の部屋にもこの魔法陣は描かれているかもしれない。

「さて……」

フレイは開いた所に手を置き、スウと息を吸った。

「我、汝の機密を守る存在なり」

聞いた言葉をそのまま紡ぐと、先ほどと同じようにブワッと壁に魔法陣が浮かび上がる。そして壁が扉のように音を立てながら開き、地下へと続く道を表す。

「さて……リンはどこに放り込まれたかな」

開かれた道は奥深く続いている。小さな音が響きそうな通路を、フレイは無音で進んで行った。

体がだるい。浮上していく意識を感じたのが、全身の倦怠感であった。頬に感じるひやりとした感触が、どこか気持ちよかった。堅さからして、どこかの建物の中に寝かされているのだろう。少しずつ目を開く。(……鉄格子？ 牢屋、かな)

ぼんやりとする視界に映ったのは、細く長い棒が幾つも連なっている姿だった。頭の中で、自分の身に起きたことを整理する。

買い出しを頼まれ、フレイに後のことを任せる旨を伝えた後、屋敷を出たところまではよかった。だが、その直後から感じる不穏な視線。その視線は買い物をしている最中、ずっと続いていた。

リンを攫うとするならば、買い出しのときが一番確立が高いと以前からフレイと共に話し合っていた。パルジファルの二人への状況報告は早々に諦めることにし、追跡者の存在に気付かないフリをしながら、手っ取り早く攫ってもらうため、自然とリンが一人になる状況を作り出す。そしてその目論見は見事に成功し、リンはフレイが隠れて見守る中、彼らに囚われることとなった。今頃、フレイはこの場に辿り着いているだろうか。

(できれば早くフレイさんと合流したいけどー！?)

リンは思考を途中で打ち切る。コツコツと足音が耳に響いてきたのを感じて。それは徐々に大きくなってきていることから、こちらに誰かが向かっているのだとすぐに判断できた。そしてこうして足音を立てるのは、隠れる必要のない相手であろう。つまり、フレイ以外の者が、リンに近づこうとしていることになる。

開いた瞳を、再び閉じた。意識を取り戻していることを悟られるよりも、いまだ眠っていると思われた方が相手は油断するだろう。それにどちらにせよ、身体があまり効かない今、リンが使える手段はない状態だ。ならば余計な警戒心を相手に抱かせない方がいい。

「お疲れではありませんか？ 奥様」

「大丈夫よ。それよりも本当にあの子を手中に収めることができたのか確認したいわ」

「はい、こちらでございます」

聞こえるのは二人の男女の声。内容から察するに、ヴィゼラと婦人であろう。リンを捕えた者が二人に報告し、様子を身に來たというところだろうか。

足音は、リンの傍までくるとピタリと止んだ。そして同時に響くのは、老齡女性の歓喜の声。

「ああ……！ 本当にレンが手に入ったのね……！ これでやっと彼にも永遠をあげることができるわ」

「はい、奥様」

婦人が叫んだおかげで、澄まさずとも内容は耳によく聞こえた。そして彼女の口から飛び出した、ある単語が気にかかる。

(永遠をあげるってどういうことだろう……)

永遠。永久。限りなく続く無限の時間。それをただの人間が贈呈するのは、はっきり言って不可能だ。永遠に生き続ける生物は存在せず、みな平等にいつかは死が待っている。

だが相手は何を考えているかわからないウィッキテルスト婦人である。ウィゼラも底が知れない。こうして婦人と共にリンの様子を見にきたことからして、無関係ではないことが証明された。

「ああでも……この首飾りはいらないわね。安物の剣も。彼にはもっと相応しい装飾品があるわ。ウィゼラ、後で捨てておいてちょうだい」

「承知致しました、奥様」

(……！)

婦人の言葉に、リンは思わず息を呑む。

ギイと扉が開く音がした。そしてリンの傍に誰かが近寄る気配がする。心臓がどくどくと大きく鳴り響いてやまない。

まず、腰につけていた剣がとられる。続いて、首に手袋をつけた人間の手が触れ、ビクリと体が動きそうになるのを寸で堪えた。留め具を外す音が聞こえると、鎖がリンの首を離れ、床へと落ちた。それを拾い上げるような気配を感じると、コツコツと足音がリンから離れていく。

(首飾りが……！)

止めてほしいと懇願するのを堪えるので精一杯だった。シングルドから貰った首飾りが、リンの元を離れていく。あの日、彼に首にかけてもらってから、毎日リンの胸元を飾り続けてきたもの。四年前のあの日から、ずっと失くさないよう気をつけていた、大事なお守り。

だが、ここでリンが目覚めていると知られてしまったら、後々悪い方向へと物事が進んでしまうかもしれない。それでは自分が囷となった意味もなく、またフレイを危険な目に合わせてしまう可能性も高くなる。だからこそ、それだけは避けなければならなかった。

足音が遠ざかり、気配を何も感じなくなったところで、リンは再び瞳を開く。胸元を見ると、やはりそこには見慣れた首飾りの姿はない。焦燥に駆る心と、落ち着けようとする心が複雑に絡みあうが、ただどんよりと曇っていくばかりだった。

「――見つけた」

「！」

気配もない所から、女性の声が聞こえてくる。鉄格子の方に視線をやると、灰色の髪をした背の高い女性が、にっこりと微笑んでいる。

「今出してあげるから、ちょっと待っててね」

カチャカチャと、鍵を弄る音がする。そう時間もかからずに、ガチャリと鍵が外れる音が聞こえた。

「フレイ……さ……」

「リン、うごけ――なさそうだね。麻痺してる？ それとも睡眠薬だった？」

「後者……です」

「わかった。じゃあこれだね」

フレイが懐から小さな袋を取り出し、そこから更に、小さな粒状のものを掌に乗せた。

「ドロシーが作った薬だよ。大変かもしれないけど、飲んでね」

口元にフレイの掌があてられ、そこから口内に薬が入ってくる。水なしで飲み込むのは少し大変であったが、それでも体の自由を取り戻すためにと、リンは薬を飲みこんだ。

「どう？」

「少し……楽になりました」

「それならよかった。流石ドロシーだね」

手先が器用な彼女は、調合を得意としている。材料さえ揃えてしまえば、市販されているのと同じようなものを、自分の手で作ってしまうのだ。最近は薬よりも、趣味である爆薬ばかり作っているのが玉に瑕ではあるが。

暫くすると、全身を襲っていた倦怠感がなくなってきているのを感じた。ドロシーの作った薬が効き始めたのだろう。体が動くことを確認した後、リンはゆっくりと体を起こす。

「動けそう？」

「はい……もう暫くすれば戦えるくらいになると思います」

これならば、すぐに本調子を取り戻すであろう。リンは立ち上がり、助けてくれたフレイに軽く頭を下げた。

「よし、それじゃあ探索を開始しようか。はい、これ武器ね」

「……どうしたんですか、この剣」

「この中を見回ってる人から貰ったの。気付かれる前に気絶させたから大丈夫だよ」

物騒な行動とは違い、口調は穏やかで笑顔は爽やかだ。多少複雑な気持ちになりながらも、武器があるのは有難いことであるため、素直に剣を受け取った。これでリンも戦うことができる。

「それじゃあ行こーリン、首飾りはどうしたの？」

「そ、それが……」

いつも首から提げているものが無くなっていけば、目につくものだろう。リンはポツリとフレイが来る前に起きたことを話した。婦人がもっと相応しい装飾品があるからいらないと言い、彼らに持ち去られたことを。

「リンに相応しい装飾品……？ 彼女はリンを飾りつけでもするつもりなのかな」

「その前に、永遠をあげられる、とも言ってました。何のことなのかサッパリでしたけど……」

「それは……妙だね」

フレイも気にはなるが、何のことやらサッパリだと言わんばかりに首を捻るだけだった。

「一応念頭には置いておこうか。それと、首飾りは探してあげたいのは山々だけどー」

「はい、わかっています。今は物証を探しましょう」

「——そうだね。行こう」

首飾りを今すぐ取り戻したい気持ちは大きいですが、今はそんなことをしている場合ではないことも理解できる。探したい気持ちに蓋をし、すべきことに集中すべきだ。

フレイと二人、牢屋を後にした。細長く続いている通路を、できるだけ足音を消しながら進んでいく。フレイは流石というべきか、急ぎ足であるにも関わらず全く足音が鳴っていない。依頼を達成することができたなら、足音を立てずに走る練習をした方がいいかもしれない。フレイといると、己の未熟さを更に実感することばかりだ。

通路はまるで迷路のようだった。幾重にも枝分かれした通路が続き、今リンたちはどの辺りにいるのかさえもよくわからない。中は日が差し込まないせいで薄暗いが、点々と設置されている照明装置（ライトアプラテス）が発光し、ぼんやりとはあるが通路を照らしてくれているおかげで、暗闇を進むということはない。しかしこの広大さからすると、敷地内全域に通路が張り巡らされているのだろうか。フレイは迷わないためにか、曲がり角までくるたびに、壁に剣で傷をつけていた。これならば帰りも道に迷うことなく外へと出られるだろう。脱出経路の確保は大事である。

途中幾つか小部屋を見つけたが、そこに人影はなく、あるのは山と積まれた札束や金貨であった。これらはウィッキテルスト夫君が生涯において稼いだ金だろう。フレイと二人、ただ呆然とお札の山を見るしかできなかった。それと同時に、婦人が金に糸目をつけない理由にも納得がいく。

いくら湯水のごとく使ったとしても、全てを使いきるなどきっとできないだろう。それだけの金品が保管されていた。

「……ここは元々金庫だったようですね」

「だねえ……いやまあ、それなら特殊なインク使って入り口隠す理由も納得がいくけど」

人が住む地上ではなく、地下に保管する。確かにこれなら泥棒の心配をする必要もなく保管し続けることができるだろう。フレイ曰く、入り口には視界に映すことのできない、特殊なインクで魔法陣が描かれていたらしい。こんなに大金を隠しているのならば、それだけ嚴重にする理由に説明がつく。

「……いい加減、お金以外に何か出てこないものかね」

数箇所目の小部屋にたどり着き、フレイが多少辟易したような顔を扉に向ける。リンも無言でそれにコクリと頷いた。いくら珍しい山のような大金だとしても、こうも何度も見ることになったら驚嘆する気持ちは次第に萎えてくるものである。

「……！」

扉を開いたフレイは、藍色の瞳を大きく見開いた。遅れてリンも中を覗きこむ。

「これは……」

その部屋は金庫ではなかった。他の小部屋よりも広めの室内に、薄暗い室内を部分的に照明装置（ライトアップラテス）が照らしていた。照明の下にいるのは――五体の直立し続ける人影。

「中に入ってみようか」

「はい」

フレイが部屋へと入り、周りを見渡す。罨のようなものがないか確認しているのだ。そして軽く手招きされ、リンもフレイに続く。

「これは……人形、でしょうか……」

淡い光を浴びている人影は、ジャラジャラと頭や首に宝石を飾り、さらに服装もまるで舞台衣装のような華美なものから、礼服のような落ち着いたものを、それぞれバラバラに着せられていた。共通しているのは、五十センチほどの大きさの台座に乗せられていることと、五体ともが、十歳前後の少年らしいということであろうか。

「……まさか」

フレイが顔に緊張を走らせながら、一体一体人形の顔を確認していく。

「フレイさん……？」

「リン、失踪したまま戻ってこない少年たちの人数は？」

突然振られた話題に面食らうものの、フレイの表情は至って真剣であった。

「ご、五人と聞きましたが」

「それじゃあ、失踪した少年たちの大体の年齢は？」

「えっと、十歳前後くらい……の……！」

漸くフレイが言わんとしていることに気づいたリンは、バツと五体の人形を見上げた。失踪した人数、そして少年たちの年齢。ここにある人形はそのどちらも共通している。

「ぐ、偶然……ですよ」

「偶然にしては材料が揃いすぎて。――ここにいる彼らが、失踪してしまった少年たちである可能性は非常に高いね」

「……！」

リンは一人の少年の鼻先に手を近づける。そこから吐息を感じることはなく、彼らが呼吸をしていないということが判明し、顔を青ざめさせた。

「彼らは……もうすでに……」

「それにしても一つ妙なんだよね……一番最初に連れ去られた子は、一月半前……もうすぐ二ヶ月くらい経つっていうのに、誰も全く腐敗が進んでない」

言われてみて彼らの姿をまじまじと見つめれば、肌はまるで生者のように瑞々しく、また腐敗臭もしなかった。――とっくに死んでしまっているのなら、一番最初に連れ去られた少年の遺体は、無残な姿となってしまっているはずだ。

「腐敗もですが……生きていないのに、二つの両足で立ち続けているのも、妙ですね……支えられてるわけ

でもないのに」

彼らは台座の上に、二つの足でもって立っていた。背中や横に寄りかかるようなところはない。生きているのならばわかるが、先ほど確かめたように彼らは息をしていないのだ。意識もあるようには思えない。フレイと共に、首を傾げるばかりだ。

「……！」

リンは扉の方を振り向くと、フレイもまた同じく扉の方を向いていた。どうやら気がついたのは同時らしい。

「人が……来ます」

「だね。扉から死角になる位置に移動しようか」

気配が一つ、こちらに近づいてくる。開いた扉によって姿が隠れる位置に二人揃って移動し、息を殺して気配を絶つ。

扉を開けて入ってきたのは、みすばらしいローブを纏った男であった。明かりに照らされている五人の動かない少年たちを順番に見ながら、手に持っている手帳のようなものに何やら書き込んでいる。

他に人の気配はない。リンはフレイと目配せすると、彼女は剣を腰の鞘へと収めながらニヤリと不敵に笑った。

「――そこで何をしていますか？ ピケットさん」

「！」

フレイが死角から出て彼の背後へと回った。面白いほどに肩を跳ねさせたローブを纏った男、ピケットは、顔を驚愕に染めている。

さあ、漸く掴めた絶好の機会だ。これを逃す手はないだろう。リンは扉の影に隠れたまま、二人のやり取りを黙って見つめ続けた。

「ど、どどどど、どうして、レイさんが、こ、ここ、こんなところに……！」

「質問してるのはわたしですよ？ 貴方はここで、何をしていますのですか？」

口調は穏やかさを保ちながらも、声音には反論を許さないという高圧的なものを含める。臆病なピケットはすぐにそれに気づいて、がくがくと震えだした。

「わた……私は、け、研究を、し、して……」

「研究、ね。五人の男の子たちを観察することが、どう魔術的な研究に関係しているのか、是非教えてほしいですね」

目的である失踪した少年たちの存在と、気の弱い研究者であるピケットが密接に関わっているのならば、好都合だ。他に誰もいないのなら尚のこと。彼は今杖を持ってはいるが、魔術で攻撃するためには詠唱が必要となる。この距離ならば、いくら詠唱の短い簡単な術でも、杖を奪うなり詠唱を妨げるのは容易いこと。基本術士は接近戦に弱いものだ。

「け、研究内容は……お、教えられませんと……！」

「おや、そんなこと今更だとは思いませんか？ どうしてわたしがこの秘密の部屋の中にいるのだと思います？」

言い渋るピケットに言葉を続けると、彼ははっとしたように細い瞳を見開いた。

「な、なるほど。つまり、レイさんも協力者になってくれたのですね……！ すぐに気づかなくてすみませんでした……！」

フレイの言葉をいいように勘違いしてくれたピケットに、フレイは笑みを深くした。ピケットは手に持っていた手帳をこちらに見せる。

「今は魔術をかけた実験体たちの経過の記録をつけてまして……最長で、もうじき二ヶ月になりますが、術は今のところずっと安定してるんですよ」

「そうでしたか。その手帳、見せてもらってもいいでしょうか」

「どうぞ、どうぞ」

ピケットから手帳を受け取ったフレイは、一番最初のページから目を通す。

そこには丁寧に日付と術をかけた後の経過が簡潔に書かれていた。最初は一人だったのが更に一人、また一人と増え、全てが順調に経過していると。それでもこの術の確実性を示すには、まだまだ時間がかかる、と纏められている。

(新たに実験体がやってきた日と少年が失踪した日、ほとんど一致してる)

詳細に日付が書いてあるおかげで、それがよくわかった。これは立派な証拠となるであろう。フレイはにっこり笑みを見せながら、手帳を閉じた。

「ピケットさん、もっと詳しく読みたいので、これを預らせていただいてもいいでしょうか」

「え……」

「実はピケットさんがどのような研究をなさっているか、まだ詳しく知らないんですよ。だからもっと詳しくなっておこうと思ひまして」

手帳に伸びようとする手からするりと逃れる。流石に大事なものらしく、持ち出されることには抵抗があるらしい。

「――どうしてもだめですか？」

そこで少し圧力をかけた声音を使うと、彼はビクリと身体を震わせ、顔をブンブンと横に振った。

「き、今日の観察は、お、終わったので……！　だ、大丈夫です！」

「ありがとうございます」

落とさないよう、懐にしっかりと手帳を仕舞い込む。これで証拠は確保した。婦人を捕まえるならば十分だろう。ここでピケットを気絶させ、リンと共に婦人の屋敷を抜け出すことができれば、任務完了だ。

しかし、気がかりはまだある。術をかけられて人形のように飾られている少年たち。できるならば彼らを助け、親元へと帰してやりたい。今のこの、生きていいのかいないのかわからない状態が術をかけることで成り立っているのなら、その術を解くことさえできれば、彼らを解放することができる。

そして彼らを助けるには、どのような術がかかっているのか知る必要がある。手帳には経過が記されているだけで、かけた魔術の内容は書かれてはいなかったのだ。

「ピケットさん、今度は彼らにどのような魔術がかかっているのか、聞いてもいいでしょうか」

ここまできたら、もう遠まわしな言い方などせず、直球で聞く。少し強めに言うだけでいろいろしゃべってくれるのだからありがたいものだ。彼が臆病な性格であることに心のなかで感謝した。

「は、はひ！　わ、私が彼らにかけたのは……わ、私が研究している『時を止める魔術』です……！」

「時を止める魔術？」

確か補助系の術に、一時的に対象の動きを封じるような魔術ならあったように思うが、そんな魔術の存在は聞いたことがない。

「い、今までの術ではその……僅かな時間でしか止めることのできなかった対象の時間を、その、未来永劫、止め続ける魔術を編み出すのが、私の研究でして……」

対象の時間を止める。それを聞いてフレイの肌にぞわりと悪寒が走った。生きているとは思えない少年たち。だけど死んでいると表現するのもまた違う。それは何故なのかと沸いた疑問が解決するのと同時に、心が酷く冷たくなっていくのがわかった。

「……それは、ただ殺すのとどう違うのかな？」

「ぜ、全然違いますよ!?　ほ、ほら、彼らを見てください！　特にこの実験体は、術を使ってからもうすぐ二ヶ月ほど経ちますが、未だに腐り落ちるようなことになってません！　術をかけてから今まで栄養を摂取することもなく、こうして台座の上に立たせてますが、術をかけた日から全く変わった様子がないんです！　すごいとは思いませんか！」

おどおどしていたはずのピケットの声音が、次第に興奮したものへと変わっていく。爛々と輝く茶色の瞳からは狂気が感じられた。

「私、元々はオリフィールの魔術研究都市のスペレーに在籍していたのですが、そこでは利便性がないという理由で、追い出されてしまいました……。それでも独りで研究を続け、なんとか理論を完成はさせたいんですが、実験を行うための道具やら設備やらを用意するのは並大抵のことではなくて、今までろくに実験もできなかったんです。ですが、ウィッキテルスト婦人が私の研究に興味を示してくださいましてね……！」

そのおかげで魔石から彼らのような実験体まで、必要なものを全てご用意してもらいました。本当に奥様には頭が上がらない思いで一杯です。彼女の支援のおかげで、私はこうして満足に研究に没頭できるのですから……！」

今までになく饒舌に語るピケット。しかし正直いってそれらの話に全く興味はない。彼の苦労話など知ったことではないし、何より術をかけた少年たちに対して浴びせた『実験体』という言葉が気にいらぬ。彼らのことを同じ人間だと思っていない態度に、今すぐ気絶させたいのを堪えて笑みの形を作った。

「その術、順調に進んでいるようですね。――因みに解除する方法は考えてあるのですか？」

知りたいのはそれだ。人形のように時を止められてしまった少年たちを救うため、解除の方法を聞かなければならない。笑顔が引きつりそうになるのを懸命に堪えながらも、ピケットの言葉を待つ。

「え、解除？ そんな方法ありませんよ。解除されたりできたりしない、完全なる魔術を目指して編み出しましたから」

「……！」

歯を食いしばりたくなる事実、笑顔を崩さないでいることは不可能だった。解除方法はない。時を止められてしまった少年たちはもう二度と元には戻らないという事実、拳を強く握り締めた。

「理論は完璧だと思っておりますが、それでも万が一という場合もあります。だから私はこうして毎日経過の記録を――どうかしました、レイさん？」

「……」

感情のコントロールは得意な分野ではあるが、激情を堪えることは、今になっても難しい。フレイは無言でピケットの背後に回り、頸部に手刀を放った。ピケットの身体がフラリと傾ぎ、バタリと床へと倒れる。

「……フレイさん」

ずっと扉の影に潜んでいたリンがそろりとフレイに近づいてくる。僅かに青ざめさせた表情を、照らされている五人の少年たちに向けた。

「彼らを助けることは……もう……」

「そうだね、とても残念だけど……わたしたちでどうにかできる問題じゃないみたいだ」

同じ術士ならば、もしかしたら彼らにかかっている術を解く方法を解明できたかもしれない。そんな可能性を掲げればきりはないが、今ここでフレイとリンが彼らに対してできることは、何一つないことだけは確かな事実だった。

「……もうここに用はなくなった。任務は無事に達成したよ。帰ろうか」

「……はい」

この場で彼らを助けることができない以上、フレイたちが最早この場所にいる意味はない。ピケットから、術の経過を記録した手帳を貰うこともできた。パルジファルに提出する証拠ならば、これで十分だ。(それにもたもたしていたら、今度はリンが彼らのように時を止められてしまう)

少年たちを攫った目的が人形にすることならば、リンもまたそうするために捕まえたと考えるべきだろう。そしてリンが言っていた婦人の『永遠をあげられる』という言葉にも辻褄が合う。

(好みの少年の時間を止めさせて、着せ替え人形にすることが婦人の目的だと思ってよさそうだ。なんて悪趣味だけど)

リンをすぐに捕まえなかったのは、実験に必要な魔石が無かったからであろう。魔石の買い出しをしたのは昨日で、ことを起こしたのが今日だということを思うと、間違いなく婦人はリンを彼らの仲間に加えようと企んでいる。もしも雇われた当日、実験用の道具が完全に揃っていたのならば、何かしら理由をつけてリンと引き離されていたかもしれない。

そして牢にリンがいないことを婦人が知ったら、発狂して大騒ぎとなるだろう。そうなる前に屋敷を抜け出し、パルジファルの二人に証拠の手帳を渡し次第、トレイディアを出るべきだ。ガルデアにさえ戻ってしまえば、流石の婦人もフレイたちを探すあてはなくなる。街から出て行った名前も違う人間を探すことなど、不可能に等しい行為だ。

少年たちが飾られていた部屋を出て、外への通路を急いだ。迷路のように入り組んでいた通路であるが、迷わないためにつけた傷が導となり、駆ける足が淀むことはない。

リンが捕まっていた牢を過ぎ、大分外へと近づいてきたことだろう。リンの様子を伺うと、彼女はちらちらと後ろを見遣っていた。置いてくるしかなかった少年たちのことを心配しているのかと思えば、彼女の片手が胸元で宙を握り締めている。

リンが何を気にしているのか、その行動を見ればすぐにわかった。

「――悪いけど、首盛りを探すのは婦人を捕まえた後、だよ。家宅搜索することになるだろうから、そのときにパルジファルの人に一緒に探してもらおうね」

「あ、はい……すみません」

「仕方が無いよ、大事なものなんでしょ？」

普段着飾ることがないリンが首飾りのような装飾品を大事にしているのは、くれた人物の存在が大きいのは言うまでも無い。フレイにはあの鈍い男のどこがそんなにいいのか甚だ疑問だが、好いた人から貰ったものを大事にとっておきたい気持ちはよくわかる。

「もうそろそろ外に繋がる魔法陣のところに……！」

「！」

フレイとリンは、同時に剣の柄に手を伸ばし、何時でも剣を抜けるように構える。ピリリとした殺気を感じた。誰かがこちらに近づいてきている。

「リン、背中を任せる」

「はい。わかりました」

複数の殺気に対して、こちらは二人だ。だが、ここは狭い通路。一度に襲いかかってこれるのは最大でも三人程だろうか。それでもギリギリであるから、複数でかかるほど相手の動きは制限される。こうして背中合わせになれば背後の心配をしなくて済む分、こちらが不利だということもない。

「――来るよ！」

「はい！」

剣を抜き放ったと同時に、キンとなる金属音。仮面をつけた黒い装束を纏った人間が、眼前に迫っていた。

「はっ！」

空いていた足元に向かって足払いをかけると、襲撃者はあっさりとはひっかかって体制をくずす。その背後からガラリと鈍く光る物が飛んでくるのを見て、剣を軽く振った。キンキンと連続で鳴る金属音と同時に、床に小さなナイフが散らばった。

「……っ！」

背後では、男のくぐもった苦痛の声が聞こえてくる。ちらりと様子を見れば、リンは躊躇うことなく襲撃者の腕や足を切りつけ、そして獲物を弾き飛ばしている。命を奪わないにせよ、戦闘力を削ぐには相手の手足を切りつけるのは、人間相手には有効な手段だ。特にリンの場合、できるだけ傷つけずに連れ戻すよう厳命されているであろうことも手伝ってか、襲撃者達の動きが鈍い。若干戸惑っているのを感じ取り、彼らはあまり戦闘には秀でていないのだと察する。

フレイもまたリンと同じように、腕や腿に狙いを定めて切り付けていく。己の命を守るためだ、相手を傷つけることを躊躇っているのはこちらが殺されてしまう。だからこそ、二人の剣筋は鈍るということはない。

足を切られた襲撃者は、足を押さえて蹲っていった。足からだらだらと血が流れ続け、下手をしたら二度とその足が動かなくなるかもしれない。だがこれはあくまで正当防衛であり、因果応報でもある。お互い人を斬ることを選んだのであるのだから、それくらいの代償を背負う覚悟くらいあるだろう。

「困りますね、勝手に実験体を連れ出されては」

どこか無機質な声音にはっとする。後ろからも息を呑む音がした。彼女も突然の彼の登場に驚いているのだろう。

「先に勝手に連れ出したのはそっちでしょう、ウィゼラさん。わたしは大事な弟を取り戻しに來ただけだよ」

「彼に足止めをするよう言っておいたというのに……結局見つかってしまうとは。全くもって使えない人たちですね」

ウィゼラの言葉におどけたように返事をする、彼は黒檀色の瞳に冷ややかな光を宿し、蹲っている襲撃者達を見据えている。侮蔑の眼差しを受け、襲撃者達の体がビクリと震えた。

その、足止めをするよう頼んだ人物とは、フレイにリンを追いかけてと言った護衛の男のことだろう。狙われることを予め知っていたからこそ、彼はフレイにその情報を流して逃がしてくれたのだ。

「やれやれ……元々強者と争う予定のない仕事内容だからと、潜入だけを得意としている者ばかりを連れて来るのではありませんでした。――まさか弟君まで剣の扱いに長けていたとは」

ウィゼラの視線がリンへと向けられる。しかし彼女は臆することなく己の紫の瞳を彼に向けた。

「僕は、一度も剣を使えないと言った覚えはありませんが」

「なるほど、確かにそうですね」

襲撃者へ向けたものは冷やかであったにも関わらず、リンやフレイを眺める姿はどこか楽しげだった。ウィゼラに対する不審が募り、フレイは剣呑を走らせる。

「あなた方は実に素晴らしい。――どうでしょう、よろしければ我が組織の一員となりませんか？」

「は？」

思わず気の抜けた声が出て、フレイは慌てて警戒を強める。何を突然言い出すのかと思えば。突拍子もないことを言って、こちらの油断を誘っているのだろうか。

「善戦するあなた方を見て、正直惜しいと思いました。特にレイ、貴女の動きは本当に無駄なく、更に美しい。その実力があれば我が組織でもすぐに頭角を現せるでしょう。――レンはまだ荒削りですが、同じく素質があります。婦人の人形にするのは何とも勿体無いことです」

「……」

一体彼は何者なのだろうか。ただの世話役にしてはいろいろ胡散臭いとは思ったが、口ぶりからして、彼には婦人以外にも仕える人間がいるようである。そして、時を止める魔術のためにリンを『実験体』と表す姿勢からして、ろくでもない組織であることは明白だ。

(闇の組織……わたしがいた所ではないとだけは断言できるけど。まあそんな組織なんてあっちの世界じゃ腐るほどあるし、さりとて珍しいことじゃないか)

表の世界にもギルドや複数ある国々、商業連盟(コンマースユニオン)など、様々な組織形態に別れている。当然、裏の世界でも同じように複数の組織が存在し、暗躍している。彼がどうして婦人の付き人のようなことをしているのかは知らないが、自身の組織のためであることは間違いない。

「――断る。非人道的な行為を肯定する組織になんて、誰が入るものか」

フレイがどう応えるか逡巡しているうちに、リンが紫の瞳を窄めて嫌悪感を露に、拒絶の意を示した。敬語の抜けた彼女の口調を初めて聞いたフレイは、思わずぎょっとリンを見つめる。

「おやまあ、随分と嫌われてしまったようですね。――レイはどうです？」

「……わたしもレンと同じ気持ちですよ」

彼の組織のことを少し探ろうかとも考えたが、思えば彼らの組織に関してはどうでもいいことだ。目の前にいる青年をたとえ捕まえたとしても、組織全体に痛手を負わせることなどできない。潰したくば、中核の者を全員捕まえるなりしなければ、闇の組織はなかなか消滅したりはしないのだ。だからここで彼から所属している組織のことをわざわざ聞き出す必要はない。今大事なのは、リンと共にこの隠し通路から脱出することである。

「やれやれ、断られてしまいましたか……とても残念です」

ウィゼラは一度肩を竦めると、パンパンと手を軽く叩く。訝しげに様子を伺っていると、彼の背後から再び黒装束の人間が現れた。

「組織に入ってくださいらないというのであれば、仕方がありません。婦人の願いを叶えるべく動くしかあり

ませんね。――これを見てください」

黒装束の人間は、ただ現れただけではなかった。片腕に微動だにしない少年を抱え、もう片方の手には刃物が握られている。

「――この少年の命が惜しければ、レンをこの場に置いていってくれませんかね、レイ」

「うわぁ……そういうことするわけ……」

抱えられている少年は、時を止める魔術をかけられた少年の一人だった。伏せられた瞳が開かれることもなければ、抱えられている身体がピクリとも動くことはない。今の彼の状態は、とてもではないが『生きている』とは言えないだろう。

「――時を止める魔術は、解く方法がないと聞いた。彼に人質としての価値はない」

リンが口にしたことは、まさしくその通りであった。ピケットが編み出した時を止める魔術のせいで、彼は死んではないが生きているとも言いがたい状態へと陥ってしまっている。そんな少年を人質にとるなど、一体何を考えているのだろう。

「確かにそうですね。でも、この魔術はまだ実験段階です。術が解けて彼が開放されるということも、ありえない話ではありませんよ？」

「……！」

フレイは口元を僅かに引きつらせながら、瞳を窄めた。リンの瞳にも動揺が走っている。

この少年は完全に死んでしまったわけではない。助かる可能性も僅かながら残されているのだ。自分たちではどうすることもできないからと、その可能性からあえて目を逸らしていたというのに、この男はそれを嘲笑うかのようにつきつけてくる。

「この……！」

「そんな形相を浮かべないで下さい、レン。せっかくの愛らしい顔が崩れてしまいます。婦人は少女のように可愛らしい貴方をお望みなのですから」

「そんなの知ったことか！」

リンが眉間に皺を寄せ、激しい怒りを露にしている。恐らくこれはこの少年を見捨てて自分たちだけが逃げるのか、それともその身を差し出すのかと、良心を突き動かそうとする策だろう。お人好しであるリンにとって、最も有効的なものであると言っていい。ここでフレイまでリンのように激昂しては、ウィゼラの思うつぼだ。

(落ち着け。何が正しいかとかじゃない。どうすることが最善かをよく考えないと)

激情に震えるリンは、堪えるように手を強く握り締めている。彼女は今、いつものような冷静な判断をすることはできないだろう。

(……よく考えなくても、もう結論は出ているか)

導き出した答えに、フレイはまず剣を鞘へと納めた。

「レン、こっちにおいで」

「フ……姉さま？」

リンを手招きし、傍へと寄らせる。戸惑うようにフレイを見上げるリンの頭を軽くなでた。

「ウィゼラさん、わたしの答えが決まりました」

「ほお。それでは是非聞かせていただきましょうか」

少年の首にナイフが突きつけられた。リンが苦い表情でそれを見つめている。フレイは軽く息を吐いた後、灰色の瞳をウィゼラにまっすぐ向けた。

「はっ！」

剣の柄に手をかけ、素早く抜き放つ。

振り抜いた動きに合わせ、剣先から緑色に光る刃が生み出された。それは直線を描き、ウィゼラの元へと飛んでいく。

「……！」

刃はウィゼラに当たる寸前、少年を人質にとっていた黒装束の男が彼を横へと突き飛ばし、変わりにその直撃を受けて吹き飛ばされた。仰け反って床に落ち、背中を打ち付ける。

「当たらなかったか、残念」

「……これはこれは、手荒なことを」

己の魔力を剣に纏わせ、振る動きに合わせて生み出す風の光刃。初級魔術の『風の刃（ウィンドエッジ）』よりも殺傷力は数段落ちるが、殺すことを目的としない使用法ならば、詠唱をしない分もってこいだ。フレイが得意とする風属性の魔術を応用して編み出した技。

（一回使うだけでも結構魔力消耗するから、乱発はできないんだけどね）

魔力は魔術を使うだけに非ず。己の獲物に魔力を乗せ、特定の効果を顕す使い方も存在する。フレイはかつて『氷の死神』の剣先から冷気が出ているのをヒントに、自己流で習得したのだ。

背後にも剣を素早く薙いで風の光刃を生み出した。怪我を省みずフレイの不意をつこうとしていた黒装束の男に直撃し、大きく吹き飛ばす。

「本当に術が解けるかもわからない少年よりも、大事なものがある。それを守るためなら、わたしが迷うことはないよ」

「フ……、姉さま……！」

リンが複雑な表情を浮かべながらフレイを見上げてくる。己の身の安全を選んだフレイに対する感謝と、少年を見捨てる選択をした後ろめたさ。それでもどちらかを選ばなくてはならないとするならば、フレイは己の大事なものの方を選ぶ。

「——こんな風に、時には見捨てる選択をしないといけないときもある。そうなったら、どちらがより後悔しないか、ちゃんと考えて選択するんだよ。覚えておいて」

「！」

きっとこの先、どちらか一人しか助けられないという選択を迫られるときが来るだろう。ウィゼラのように外道な手段を厭わない輩は決して少なくはないのだから。悩み、傷ついたとしても、困難を乗り越えるにはいずれぶつかざるを得ない壁である。それでも、リンならばきっと乗り越えてくれるだろう。

「そういうわけなので、ここは逃げさせてもらいますよウィゼラさん」

「やれやれ……どうやら婦人の願いを叶えるのはこれまでのようですね」

ウィゼラは己の身をかばった黒装束の男と、同時に投げ飛ばされて床に横たわる少年を交互に見つめて肩を竦めた。

「まだまだ資金の運搬が残っているというのに……仕方がありません」

丁度起き上がろうとしていた黒装束の男に、ウィゼラが目配せをした。すると黒装束の男は片膝をついて頷いた後、通路の奥へと走り去っていく。

「さて、皆さん。ここにはもう用はありません。撤収しましょう。ああ、各員、自力でどうにかして下さいね。生き埋めになったとしても、責任はとりませんので」

「……!?!」

さりと口に出した不穏な言葉に耳がピクリと反応した。あっさりと手を引くことといい、嫌な予感が胸中によぎった。

「生き埋めになるってどういうこと？」

「はい、先ほど行かせた部下に、この隠し部屋を破壊する装置を稼働させるよう伝えました。そろそろ装置

がある場所へたどり着くでしょうね」

「な……！」

まるで他人事のように言い放つウィゼラに愕然としていると、ぐらりと足場が揺れた。ウィゼラは既に背中を向けており、軽く腕を上げて手を横に振る。

「逃げるならば早い方がいいですよ、あなた方も生き埋めになりたくないのならば」

颯爽とした足取りの背中が、あっという間に影となり見えなくなっていく。その間も、みしみしと軋む音がそこらじゅうから響き、壁や床に亀裂が走った。

「これは……ヤバイね。リン、逃げ——」

リンの方を向くと、そこに彼女の姿はなかった。ぎょっと回りを見ると、前方——ウィゼラが消えた先に向かってリンが走って行くのが見えた。フレイは慌てて追いかけて、リンの腕を捕まえる。

「ちょ、リン！ どこに行こうとしてるの!？」

「す、すみません……でも……」

一度は謝るリンではあったが、フレイを見る紫の瞳は焦りに満ちていた。この場所が破壊されるとわかっただけでここまで動揺することはないだろうし、向かうならば逆方向にある出口である。ならば彼女の焦りの原因は何なのか。

「ここが壊されてしまったら、く、首飾りが……！」

(ああ成る程……シグルドに貰った大切なものだもんね……)

彼女の首飾りはウィゼラに奪われ、そして所在が知れない。破壊装置がどれほどの範囲に及ぶかはわからないが、破壊される場所にも首飾りが捨て置かれていた場合、壊れたり最悪永遠に見つからない可能性がある。完全に崩れ去ってしまう前に首飾りを探したいと思う気持ちもわからないわけではない。だが、

「リン、こんなだだっ広い所を探してたら、わたし達も生き埋めになってしまうよ」

「……わかってます。なので、フレイさんだけ先に戻ってください。僕はやっぱり諦めきれなくて……！」

手を放してほしいとばかりにリンは腕を振るが、当然わかったよと放すはずがない。リンを置いて一人外へと脱出することなどできるわけもなく、フレイはリンの手を引っ張りながら出口の方へと向かった。

「フ、フレイさん……！僕は……！」

「放せるわけがないだろ！ わたしがさっき、どうしてリンを選んだと思っているんだよ！ 君は彼らと違って助かる命なんだ！ 見捨てられるわけあるか！」

強い口調で叫ぶとリンはビクリと肩を震わせる。フレイは投げ捨てられた少年に、足を切ったことで動くことがままならない黒装束の男たちの横を通り過ぎる。彼らは崩壊するこの場から移動することができない。ウィゼラに彼らを助ける気は毛頭なく、現に既に彼は一人安全圏へと避難したことだろう。リンを彼らと同じように、この場に生き埋めにしてしまうわけにはいかないのだ。

それでもリンの足取りはやはり重く、引きずるように何度も後ろを振り返っていた。一分一秒が惜しいフレイは、そんなリンに軽い苛立ちを覚える。

「何もかも、命あってのものだねだ！ シグルドから貰った首飾りを大事にしたい気持ちはわかるけど、今はそんなことを言ってる場合じゃない！ ここから出たら、シグルドに新しいのを買ってもらえ！」

首飾りにどれだけ思いが籠っているかは知らないが、『シグルドから貰った』という部分が大きいのは明白だ。ならばあの首飾りに拘る必要はない。『囧』という危険な仕事をやり遂げたのだから、ご褒美としてねだればシグルドなら気前よくいくらでも買ってくれるだろう。

「リン！ 死んだらそれこそ、シグルドに会うことすらできなくなるってことだ！ それでもいいのか!？」

「……！」

リンが息を呑む。同時にフレイの脳裏によぎったのは、長い藍色の髪を持つ彼の姿。二度と会えなくな

るのは絶対に嫌だ。まだ想いも何も伝えてはいないというのに。

(会いたいよ、ロードさん……！)

無性に彼に会いたくなかった。無事に脱出しガルデアに戻ったら、真っ先に彼に会いに行きたい。依頼を無事に達成したと告げれば、ニコリと微笑んで誉めてくれるだろう。

「だからわたしと一緒に生き延びるんだ！ わかった!？」

「……はい！」

少し間は空いたが、返事をすると同時にリンを引っ張る腕が軽くなる。彼女がこの場から逃げることを選択してくれたのだ。そっと腕を離すと、リンはスピードを緩めることなく、フレイの後ろを追走する。

ガラガラと背後で崩れる音がし始めた。眼前にある壁や通路にミシミシと罅が広がっていく。全てが完全に崩れ去ってしまうのも時間の問題であると同時に、出口にも近づいていた。

「あと少し……！」

前方には行き止まりがある。だがその壁にはしっかりと隠す必要のない魔法陣が淡い光に照らされているのが確認できる。リンを探しに出るより前に、入ったときと同じ呪文を紡げば外への道が開かれることは確認済みだ。

「あ、で、でも罅が……！」

自分たちが辿り着こうとするよりも先に、壁を進む亀裂が到達しようとしている。もしも罅が魔法陣の形を崩してしまったら、かかっている魔術は無と化し、ただの石壁と成り果ててしまう。

(一か八か……！)

普通に走って間に合わないのならばと、フレイは息を大きく吸い込んだ。

「我、汝の機密を守る者なり！」

腹の底から搾り出した大声は、魔法陣へと届いただろうか。

壁の罅が魔法陣へと到達する寸前、魔法陣がカッと光を放った。行き止まりであった壁が左右上下に動き、ポカリと空洞を作る。

「開きました！」

リンの歓喜の声と同時に、背後から瓦礫が崩れ落ちる音が聞こえてくる。道は開けた。後はもてる最大の速さで走り抜けるのみ。

徐々に近づいてくる光。眩い光に体が包まれたと感じたと同時に、フレイとリンは隠し通路から外へと飛び出した。

——ドォオオン

背後から聞こえたのは倒壊する音。振り返れば、先ほどまで隠し通路への道を開いていた扉が、ただの瓦礫へと変貌していた。思わず口の端が引きつる。間一髪だった。

「危なかった……ぎりぎりだったね……」

「す、すみません……僕が躊躇っていたから……」

「助かったんだからもうそれはいいよ。気にしないで」

首飾りが埋まってしまうことを危惧したことを謝られ、フレイは軽く手のひらを振った。結果的にこうして無事に脱出できたのだから、それでよしだ。ギリギリであろうと余裕であろうと、助かった事実は変わらない。

「……ピケットさんも埋まってしまったのでしょうか」

「恐らく、ね。破壊したのは多分証拠を隠滅させるためだろうから、助けたとは思えないな」

彼が夢見た『時を止める魔術』は、彼と共に瓦礫の底へと埋まってしまった。これで二度と、あの少年たちのような被害者が出ることはないだろう。

フレイは軽く目を閉じ、時を止められた五人の少年たちの姿を頭に思い描いた。どうか安らかにと冥福を祈る。

「フレイさん、倒壊はどうやら屋敷全体に及んでいるようです。使用人の人たちが倒壊に巻き込まれてしまったかもしれません」

「……そうだね」

隠し通路は屋敷の地下にあった。それが全て崩れ去ったならば、その上にある屋敷もまた、無事ではないだろう。

「――ごめん、リン。助けに行くのは後だ。まずはピケットさんから貰った手帳をパルジファルの二人に届けないと」

ウィッキテルスト婦人が少年たちを攫ったことを示唆する供述がされている手帳。これをまず届けなければ、身体を張った意味が無い。それに、フレイたちは今買い出しに出ていることになっているのだ。倒壊してすぐ駆けつけたのならば、いらぬ疑惑を買ってしまう可能性がある。

「パルジファルの二人に手帳を届けて、放置してきた荷物を回収してからでないダメだ。わかるね？」

「――はい」

コクリと頷いたリンの頭をなで、できるだけ早く戻ってくるべく、パルジファルの二人がいる宿屋へと駆け出した。

彼には何が似合うだろう。衣装部屋にある少年用の服を、事情をよく知る護衛の男に出させながら、ウィキテルスト婦人は顎に手を当てた。

(黒い髪と紫の瞳はとても落ち着いているから、派手なものは避けた方がよさそうねえ。ああ、そういえばお姉さんから剣を習っているようだから、戦士のような格好がいいかも。ウフフフ)

色は薄いものよりも濃いものの方がいいだろうか。小さな胸当てのような防具をつけるのもいいかもしれない。あまりゴテゴテしすぎると、彼のせっかくの細い体がよくわからなくなってしまうから、それにも気をつけよう。

「ああ、どれにしようか本当に迷うわ。これも貴方が捕まれるのに協力してくれたおかげね。ウィゼラから聞いているわ。ありがとう」

「いえ……」

護衛の男は軽く頷いた後は、無言のまま己が命じたままに衣装を出してはしまつてを繰り返していた。彼はレイが来るまで一番腕の立つ護衛であるに加え、こうして最も己に従順であるため、とても重宝している。

レンに永遠を上げることになったから、衣装選びを手伝ってほしいと伝えたとき、彼は一度表情を青ざめさせた。気分でも悪いのかと問えば、何でもないと首を振ったため、こうして彼に予定通り手伝いをさせている。

「とりあえず服はそこに置いておいて。わたしは装飾品を選んでいるから」

近くに設置されている透けているガラスのケースの中に、集めた宝石が使われた装飾品が飾られている。惚れ惚れとする美しさに見惚れながらも、レンにはどれがいいかを見繕う。

死んでしまった夫が、普段構うことができないからと買い与えてくれた宝飾品たち。本当は夫に傍にいて欲しかったのだが、彼の仕事上そんなことを言うわけにもいかず、美しいものに囲まれて過ごし続けた。美しいものが、己の寂しい気持ちを和らげてくれたのだ。

夫が病気で突然亡くなってしまった後は、彼が残してくれたお金で美しい物をひたすら集めに集めた。宝飾品だけでなく、絵画、衣装、使用人。全てにおいて己の目や心を楽しませるために妥協は一切しない。それだけの財産を夫は残してくれたのだ。

そのおかげか、夫が亡くなって二年が経とうとしている現在、寂しさは薄らぎつつある。最近は特に、ピケットが開発した『時を止める魔術』によって、美しい少年たちに永遠をあげることに成功したのだ。彼らを美しい姿のまま、ずっと傍に置いておくことができる。わざわざ隠し通路にまで赴かなければならないのが難点であるが、ウィゼラから部屋に飾ることを禁じられてしまったのだから仕方が無い。

(そういえば瞳と同じ色をしたガラス玉の首飾りをしてたわね。あの子に似合うのは、まさしく紫水晶に違いないわ)

どう見ても安物の首飾りは不釣りあいではあるが、紫水晶ならば話は違う。確か大粒の紫水晶がついたサークレットやブレスレットがあったはずだ。それをレンへ与えよう。うきうきと心を弾ませながら、ガラスケースを開ける。

ゴゴゴ……

「あら……？」

突如感じた揺れに違和感を覚える。地震であろうか。それならば、衣装部屋にいるのは危ないかもしれない。多少名残惜しいが部屋を移動しようと護衛の男の方を向いて、婦人は瞳を大きく見開いた。

「ど、どうしたの……？」

彼は床へと倒れ伏していた。確かに地震で揺れてはいるが、立ってられない程のものではない。現に己は未だ二本の足で立っている。

「――彼には少々気絶してもらいました。暫く目は覚まさないでしょう」

「！」

突然声をかけられたことに驚くが、その姿を見てああなんだと安堵する。切れ長の黒檀色の瞳を持つ青年は、毎日見慣れている人物だ。

「ウィゼラ、何かご用かしら？」

彼にはピケットの実験をつつがなく行わせるための手伝いを命じたはずである。なのにこうして己の下へと来たということは、何かあったのだろうか。

「最後のご挨拶に参りました、奥様」

「え？」

胸に手を当てながら恭しくお辞儀をするウィゼラはいつも通りだ。なのに言葉がいつも通りではない。最後の挨拶とは、一体どういうことだろう。

「貴女に夫君の財産が眠る隠し通路の存在を教えていただいたおかげで、我が組織に潤沢な資金を送付することができました。貴女には本当に感謝しております」

「何を……言っているの？」

ウィゼラが言っていることがよくわからない。我が組織？ 資金の送付？ 彼は夫が亡くなった直後に雇い入れた使用人である。端正な見た目に惹かれたのと、どんな仕事でもそつなくこなすことから、昔からの重鎮のように重宝していたし、働きに見合った給金を弾んでもいた。

これからもずっと傍にいてくれるものだとはばかり思っていたのに、その口調ではまるで己の下を離れるような言い方ではないか。

「お、お給金に不満があるなら、もっとあげるわよ！ あなたはとても働き者だから、望むだけあげられるわ！」

「いいえ、給金に不満を持ったことはありませんよ。――結論から言いますと、貴女が不要になったのです」

淡々と話す様子は、婦人がよく知るウィゼラである。なのに、彼はその口からとんでもないことを口にした。

「ま、待って！ わ、わたしの何が気にいらぬのか言ってちょうだい！ わたしには、あなたが必要なよ、ウィゼラ！」

夫を亡くしたことでポカリと開いてしまった心を塞ぐことができたのは、ウィゼラの存在が大きかった。どんなときでも彼は傍にいて、己の願いを叶えてくれていたというのに、どうして突然そんなことを言い出してしまうのか。

「私が貴女に望むものはもうありません。こうして挨拶に来たのも、一応の義理を果たすため。――それではさようなら奥様。どうか安らかにお眠りください」

「ウィゼー」

彼の名を呼ぼうとした声は最後まで紡がれることがなかった。突然全身に衝撃が走り、床に倒れ伏した護衛と同じように、意識を失う。

「さて、我々はここが崩壊する前に立ち去りましょうか。ああ、そこの宝飾品もついでに持って行きましょう。運び出しきれなかった分には相当しませんが、ないよりはましです」

婦人と護衛の男を昏倒させた黒装束の男に指示を出す。男は無言のまま開かれたガラスケースの宝飾品を乱雑な手つきでかき集めた。

「……本当なら、ここにあるもの全てを持ち出したいところではありますが、欲を張りすぎるのはよくありませんね。証拠隠滅ができるだけでよしとしましょう。何か役に立つかと思えば、時を止める魔術は人間を人形に変える以外に効果はありませんでしたし、別段惜しくもありませんしね」

『時を止める魔術』とその開発者、披検体、そして隠し通路に隠されていた金品の大半を偽物とすり替えていたこと。これらが全て瓦礫に埋もれてしまえば、もし婦人の罪が暴かれたとしても、ウィゼラの組織について辿り着くことは不可能である。

「久しぶりの帰還、楽しみですね。さあ、行きましょう」

ウィゼラは倒れ伏す二人の人間に視線を向けることもなく、崩壊しようとしている衣装部屋を悠然とした足取りで立ち去って行った。

パルジファルの二人がいる宿屋へと赴くと、そこにいたのはトルーズ一人だけだった。

「ネニックさんはどうしました？」

彼の姿が見えないことが気になった。彼が現在懸想しているフレイが来たというのに、飛び出してこないということは不在なのだろうか。

「さっきウィッキテルスト婦人の屋敷がある方から大きな音が聞こえたから、様子を見にいくと行って出て行った。二人共出て行くわけにはいかないから、俺がここに残ったんだ」

「なるほど」

倒壊したのは地下に広がる隠し通路とはいえ、地下は迷宮並みに広がっている。そんな広大なものが崩れたのだから、轟音は凄まじく響いたに違いない。

「方角が方角なだけにあんたたちのこと気になったけど、無事なようで安心したよ」

「あはは、無事は無事だけど、実は全くの無関係じゃあなくてね」

フレイが苦笑しながら、懐にしまっていた手帳を取り出す。深緑色の瞳を瞬かせるトルーズに、ピケットの手帳を差し出した。

「これ、婦人の屋敷から見つけた『物証』、だよ。そのときひと悶着があつてね、大半の証拠を隠滅させるためだと思うけど、婦人の使用人が隠し通路を破壊したんだ」

「……！」

トルーズはフレイから手帳を受け取ると、開いて中を確認する。すぐに手帳を閉じると、彼は手帳をしっかりと懐へしまった。

「確かに受け取った。ありがとう」

「いや、仕事だからね。――それとできれば、君には今すぐガルデアに戻ってもらいたいんだけど、いいかな」

「お願いします」

ウィッキテルスト婦人の屋敷には、事件とは何の関係も無い使用人が大勢働いている。屋敷がどれだけ倒壊したかはわからないが、今頃大惨事になっているのは言うまでも無い。できれば世話になった彼らを助けに行きたいと思っているが、証拠となる手帳を持って屋敷に戻るわけにはいかなかった。それに、できるだけ早くガルデアに届けて欲しいと思っている。

「……ガルデアまで、そう強い魔物はいないから俺一人でも大丈夫だろうな。わかった、ネニックに会ったら先に戻ったと伝えておいてほしい」

「それはもちろん」

彼は置いてあった荷物を手にし、こちらに軽く頭を下げてから部屋を出て行く。これで物証である手帳はトルーズが届けてくれるだろう。リンとフレイの任務達成だ。

「フレイさん、僕たちも屋敷に戻りましょう」

「そうだね。でもまず荷物を拾わないとね」

「はい……」

囮として捕まった際に、買い出しとして頼まれた物はそのまま置いてきた。屋敷の人たちから余計な疑いをかけられないためにも、一度取りに戻る必要がある。リンはフレイと共に宿屋を後にし、攫われた場所へと走る。

大分時間が経ってしまっていたため、誰かに持ち去られてしまったかもしれないことを危惧したが、運よく荷物はそのままの位置から動いてはいなかった。フレイが手避け袋を掴み上げ、すぐさま屋敷へと駆け出した。

「フ……姉さま、屋敷が見えてきました！」

「全壊はしてないけど……もう少し急いだ方がよさそうだね」

距離を置いて全体が見えた屋敷は、全てが倒壊するのは免れたものの、やはりところどころが倒れて瓦礫になっていたり、中がむき出しになってしまっている。屋敷を囲っている塀の外側には人だかりが大勢できていた。

「すいません！ 大丈夫ですか!?!」

買い出しからたった今帰ってきたばかりを装いながら屋敷に近づいていくと、大勢の人々が瓦礫をどかす作業を行っていた。使用人ばかりではなく、街の人々も参加しているらしい。

「レン！ それにレイも。ちょうどよかった、あなたたちも手伝って！ 瓦礫の中に埋まってる人、まだ何人かいるから！」

フレイが持ってきた荷物を適当なところに置くのを確認した後、使用人たちの手伝いに混ざる。地中から聞こえるくぐもった声は、埋まってしまった人の助けを求める声だろうか。人々はその声を頼りに瓦礫をどかし、一人、また一人と救出していく。

「聖なる光りよ我が手に集え、『回復（ヒール）』」

助け出された人は瓦礫により、体中に打撲や切り傷を負っていた。そんな彼らに、リンは治癒術をかけていく。いくら小さな傷しか治せないとはいえ、他に治癒術を使える人間がない以上、かけないよりはよっぽどましだろう。

「い、いやあああああ！」

「!?!」

治癒術をかけ終わった後、離れたところから悲鳴があがる。急いでそちらに向かうと、一人の老齢の女性が引き上げられたところだった。彼女の傍には、フレイと初めに手合わせした護衛もまた横たわっていたが、彼の方は命に別状はないらしい。

「ウィッキテルスト婦人……」

彼女が纏っている衣服は砂埃で汚れ、所々赤い色で染まっていた。額から血が流れ出ていた痕があり、意識があるようには見えない。

「奥様、目を覚ましてください！ 奥様！」

使用人たちが肩を強く揺さぶるが、婦人は目を開かない。リンは婦人に近寄り、そっと手首をとって、脈を測った。意識をそこに集中するが、跳ねる音は感じられない。

「……だめです。もう事切れてます」

「そんな……」

リンが首を横に振ると、使用人たちは愕然とした。瓦礫からの圧迫は、鍛えられていた護衛はともかく、年老いた婦人には衝撃が強すぎたのだろう。

（彼女は結果的に五人の少年たちの未来を奪った。因果応報、と言ってしまうえばそれまでだけど……）

『時を止める魔術』を施したのはピケットだ。だが、その被検体として少年たちを選んだのは婦人本人である。彼女にとって『時を止める魔術』が悪意ある行動ではなくても、実際に術をかけられてしまった少年たちは、その時点で死を迎えてしまったのと同じようなものだ。

「レン！ こっち来てくれる？ 治癒術かけてほしいんだけど！」

「あ、はい。今行きます」

別の所にいる使用人から呼ばれ、リンはそちらに向かった。新たに瓦礫から救いだされた人に治癒術をかける。

「本当に助かるわぁ。それにしても吃驚ね、レンが治癒術使えるなんて」

「特に言う機会がなかったものですから……」

周囲にはできるだけ力のない無力な少年であることを示しておきたかったため、姉に剣術を習っている途中、ということにしておいた。それでも治癒術に関しては本当に使えないよりはマシという程度の力しかないため、言ったところでこんな事態にでもならなければ、使うこともなかっただろう。

「ごめん！ こっちもお願いしていい!？」

「あ、わかりました」

別の所からも呼ばれ、治癒をしに向かう。ないよりはマシな力でも、こうして実際役に立っていることを思うと少しは心が軽くなる。

(……少年たちの将来を奪ったのは婦人だけど、僕が彼らを見捨てたことにも変わりはない)

地下の隠し部屋に埋もれてしまった五人の少年たち。救う手立てがないからと、リンは彼らを救うことを諦めた。見捨てたのだ。

(だからこそ、今ここで助かる命を救おう。贖罪……とは違うかな。あくまで僕の自己満足だから)

フレイは時に、一方を切り捨てなければならない選択を迫られるときがあると言っていた。どちらがより後悔しないかを選択するように言った理由も、落ち着いた今ならわかる気がした。

見捨てたことに対して罪悪感を抱くと同時に、リンとフレイには、彼らを救う手立てはなかったことも理解している。あのままあの場に残ったとしても、少年たちを救うことなどできず、一緒に生き埋めになっていただろう。

(僕とフレイさんには、彼らを見捨てて逃げるか、一緒に生き埋めになるかの二択しかなかった。どちらが正しいかなんて、誰にもわかるわけがない)

そこは逃げて正解だという人もいれば、一緒に生き埋めになればよかったと言う人もいるだろう。完全に主観の問題である。だからこそ、答えは自分で見つけるしかない。

(フレイさんはもう答えを見つけたんだろうな……僕はまだ迷ってばかりだけど)

どんなときでも後悔しない選択を。リンもいつかそれができるようになるだろうか。

「おーい、今度はこっちの子を頼むよー！」

「はい」

再び呼ばれ、大きく手を振る人物の方へと駆ける。そして瓦礫に背中を預けている少年の姿を見つけ、リンは瞳を丸くした。彼の名を呼びそうになったのを、寸で飲み込む。

「……！ この人を治せばいいんですね。ここは僕が引き受けますので、他の方の救出をお願いします」

「おう、わかったよ」

少年から離れて行く姿を確認した後、リンは彼の傍に膝をつく。

「大丈夫ですか、ネニックさん」

そこにいたのは、パルジファルの伝達役であるネニックだった。トルーズからこちらに向かったと聞いていたが、彼が到着した頃には流石に倒壊は収まっていたはず。巻き込まれたとは思えない。

「おー、リンかぁ。いやぁ情けない。ある物をとろうとしたら足を滑らせて派手に身体ぶつけちゃってさ。かっこ悪いからフレイさんには内緒にしててくれよ」

「わかりました。今から治療術をかけますのでじっとしていて下さいね」

ネニックの肩に触れながら詠唱を唱える。リンの魔力では完治させられないのは申し訳ないが、少しは楽になるだろう。

「あー……痛みが引いたぁ……大分楽になったよ、ありがとう」

「いえ、楽になられたのならよかったです」

怪我はまだあちこちに残っているため、このまま暫く大人しくしていた方がいいだろう。

「そうだった、ネニックさん報告があります。僕たち、無事任務完了しました」

「え、本当!? そ、それで証拠は今どこに……」

「トルーズさんに渡しました。彼は今ガルデアに向かっています」

「そ、そっか……トルーズが……」

一度ペアアと表情を明るくしたネニックだったが、ハタとその表情がとまると、今度は真逆にズウウンと落ち込んでいく。

「お、俺、屋敷の人を助けようと思ったのに逆に怪我して助けられて……全然活躍できなかった……」

「……」

何と応えたらいいのかわからず、リンは無言になった。ネニックは表情に影を指しながら何度も活躍したかった活躍したかったと呟いている。後ろ暗い思考は完全に治ってはいない傷にも障ってしまうだろう。なんとか彼の気持ちを上昇させることはできないだろうか。

(そうだ、フレイさんだ)

いるではないか、彼の機嫌を良くできそうな人物が。

「ネニックさん、僕たちも任務は終わりましたので、せっかくですから三人で一緒に帰りませんか？ ガルデアに入って別れば、パルジファルに咎められることもないでしょうし」

行く時も一度別れて、時間を合わせて街の入り口で合流すればいい。そうすれば彼は好いている相手と共に行動することができる。

「え、いいの!? やったぁ！」

そしてそれは効果抜群だったようでネニックの表情が再びペアアと明るくなる。気分が前向きになれば、怪我の方もその分よくなるだろう。

「あ、そうだ。リン、悪いんだけど俺の変わりにこれの持ち主探してくれない？ さっき拾ったやつなんだけどさ、多分屋敷の誰かのものだと思うから」

「落とし物ですね。はい、構いませんよ」

彼が怪我をしたのは、その落とし物を拾おうとしたからだろう。もしかしたら落とし主が探しているかもしれない。

「はいこれ。よろしく」

「これは……！」

差し出されたネニックの手に握られていたのは、紫色のガラス玉が嵌め込まれた首飾りだった。星と月が連なった形をした淵のそれは、見覚えがありすぎるもの。

「ぼ、僕の首飾り……！」

ネニックの手から勢いよく首飾りを掴んで眼前へと持って行く。ガラス玉に多少の傷はついているものの、壊れてしまった様子はなかった。

ウィゼラにどこぞへ持って行かれ、そして生き残るために二度と戻らないことを覚悟した首飾りが、今

目の前にある。

「え？ それリンのだったんだ。ならちょうどよかった。拾った甲斐があったなー」

のほほんと笑うネニックを尻目に、リンは首飾りを胸に抱きしめた。シグルドから貰った、大事な首飾り。じわりと目頭が熱くなる。

「ありがとうございます、ネニックさん……！」

嬉しさと感動が込みあがった満面の笑みでもって、ネニックに感謝の意を伝えた。彼が見つめてくれなければ、瓦礫の下に埋まったまま、誰にも気づかれず放置されていたかもしれない。

「え、あ、い、いやぁ俺は当然のことをしたまでで……」

「本当にありがとうございます！ もう、感謝してもしきれません……！」

ウィゼラに首飾りを持ち出され、広大な屋敷のどこかに捨てられた上に、この倒壊だ。見つけるのは絶望的だと思っていた。だが、首飾りはリンの手元に返ってきてくれた。それも偏にネニックが見つめて拾ってくれたからだろう。

「その怪我、僕の首飾りを拾ったときについてしまったんですよね……申し訳ありませんでした」

「そ、そんなのは全然気にしなくても……」

流石に力強く礼を言いすぎたのか、ネニックが頬を赤らめながら困惑した様子で頬をかいている。体勢も気づけば身を乗り出していたため、リンはネニックから身体を離し、その場で微笑むに止めた。

(でも、本当に戻ってきてくれてよかった)

リンは留具を外し、首にかける。胸元に落ちた紫の星と月の姿を見て、心が落ち着くのを感じた。ガラス玉は少し傷がついてしまったけれど、近くで見なければ気づかない程度だ。頬を緩ませながら首飾りをそっと指でなでる。

「年上だけど可愛いのも……うん、ありだ、あり。うん……」

「？ 何か言いました？」

「い、いえなんでも！」

首飾りに注意がいったせいで、ネニックが呟いた言葉が上手く聞き取れなかった。彼は頬を赤く染めたまま、ぶんぶんと手を眼前で勢い良く横に振る。

「怪我のせいで発熱までしてしまったのでしょうか。顔が随分と赤く染まっていますが、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫、です！」

しかしリンがネニックの顔を覗きこむと、彼は耳まで赤くなる。本当に風邪ではないのだろうか。だが、当の本人は決して風邪ではないと否定する。

「おーいレン。どうしたの？」

「フ……姉さま」

ずっと同じ所にいたせいか、フレイがリンのもとへとやってくる。リンは首飾りを手で持ち、彼女に見えるように持ち上げた。

「見てください、ネニックさんが首飾りを拾ってくださったんです」

「おお、よかったじゃない。こんな広いところからよく見つけたね、ネニック君」

「た、偶々ですよ偶々」

想いを寄せているフレイに褒められたからか、彼は照れくさそうに頭を掻いた。これだけ気分が浮上すれば、怪我はもう大丈夫だろう。

「そうそう、使用人の人たちの救出終わったよ。怪我人は出たけど、幸い死人はでなかった。――夫人を除けば、だけど」

例え因果応報であっても、できるならば生きて彼女を捕らえたかった。己がしでかしたことへの罪悪感

のないままに逝ってしまった彼女を、同じく崩落で亡くなってしまったであろう少年たちはどう思っただろう。

「雇い主がいなくなってしまったから、使用人の人たちにはまた旅に出る的なことでも言っておこう。疲れてるなら宿をとって明日戻ることを考えるけど、どうする？」

ピケットの手帳をトルーズに渡したことで、任務は無事に完了した。つまり、もうトレイディアにいる必要はない。

リンは首飾りに目を落とした。脳裏に思い浮かぶのは、やはり茜色の長い髪を一つに括った、大柄な男性の姿。トレイディアにきてから丸々七日が経過している。もしも彼が長期的な依頼を受けていなければ、今から帰れば会えるかもしれない。

「この場が落ち着いたら帰りましょう。僕なら大丈夫です」

いろいろあった今日であるが、そこまで疲れたということはない。単純な疲労の度合いで言えば、魔物の掃討に勝るものはほとんどないだろう。

「それならよかった。わたしもどうしても会いたい人がいるから、できれば今すぐ帰りたいて思ってたさ」

「会いたい人、ですか？」

「うん、そう」

ニコリと笑うフレイの表情はどこか読めない雰囲気を感じている。聞くな、ということではないのは確かだが、だからといって気軽に聞ける雰囲気でもなく。

(あ、でもネニックさんがいるからこの場で聞くのは止めておこう。会いたい人が男性だったら、また落ち込んでしまう)

リンにとってのシングルドのように、フレイにそんな相手がいるかはわからないが、ここは黙って受け流した方がいいだろう。それにもしリンに話してくれるつもりがあるのなら、フレイの方から切り出してくれるはずだ。

(もしもそうなら……フレイさんの想い、叶うといいな)

全ての人が恋心を成就させられることはない、理解はしている。それでも、やはり親しい付き合いをしている人には幸せになってもらいたい。

「よし、それじゃあ屋敷の人に話しをつけに行こうか」

「はい」

「あ、あの、リンさん！」

フレイと共に移動しようとする、ネニックから声をかけられる。突然敬語になったネニックを不思議に思いながらも、リンは足を止めて振り返った。

「何でしょう？」

「さ、さっきの約束……い、一緒にガルデアまで帰ってくれるんですね……？」

ネニックは指をこすり合わせ、どこかそわそわとしている。リンは心の中でああと納得した。肝心のフレイにはまだ、一緒に帰ろうという旨を伝えていない。

「はい。もちろんです。いいですね、フレイさん」

「わたしは別に構わないよ。長引きそうな怪我でもなさそうだし」

「だそうです。よかったですねネニックさん」

フレイの承諾を得て、これでネニックも安心するだろう。

「えっとうんそうなんですけど、その……」

「それではまた後で。少し休めば良くなると思いますから」

リンは軽く手を振って少し前を歩いているフレイの隣に並んだ。倒壊した建物が続いているのを見て、死人がほとんどでなかったことに内心安堵した。人が活動している時間帯であったからこそ、被害は少なかったのかもしれない。もしも寝静まった夜に起きたとしたら、逃げ遅れて埋まってしまった者が増えた可能性がある。

「……リンも割りと鈍いのか。流石にシグルドほどじゃあないけど」

「フレイさん？」

「なんでもないよ。気にしないで」

呟かれたフレイの言葉は、小さくて聞こえなかった。しかし微笑みながら頭を軽くなでてくることからして、本当に些細な独り言なのだろう。

「さあ、最後だけ気を緩めず行こうね、レン」

「はい、レイ姉さま」

姉弟を演じるのも、これでお終いである。だからと言って使用人たちの前で本名を言うてはいけない。それでは今まで名を偽ってきたことの意味がなくなってしまう。最後まで関わった人たちにワイドリジョンの傭兵であると感じかれないようにするまでが、依頼内容だ。

(今後も、こんな風に身元がわからないように演技をする必要が出てくるだろうから、いい経験になったな)

入団してまだ数ヶ月。リンに覚えなければならないことはたくさんあった。それはこれからも増えていくだろう。ガルデア支部の仲間たちの力となるべく、できる限りのことを覚えていきたい。

フレイが使用人たちが集まっているところに話しかける。任務が全て完了するまで、後少し。